

日本タンゴ・アカデミー機関誌

TANGUEANDO EN JAPON

No. 33
2014

タンゲアンド・エン・ハボン

TANGUEANDO EN JAPÓN

Número 33, enero de 2014

日本タンゴ・アカデミー 機関誌

タンゲアンド・エン・ハポン 第33号 (2014年1月)

—藤澤嵐子さん追悼号—



在りし日の藤澤嵐子さん

日本タンゴ・アカデミー

TANGUEANDO EN JAPÓN

第33回 (2014年1月)

(タンゲアンド・エン・ハポン)

目次

	頁
会長挨拶	飯塚久夫 4
日本タンゴ・アカデミー 2013年下期活動実績	6
アカデミー行事アルバム	10
タンゴ・セミナーのプログラム・コメント CLASE DE TANGO (タンゴ教室)	
第83回 SPで訪ねる「ラ・クンパルシータ」の軌跡 — (戦前編) —	
.....	コメンテーター：島崎長次郎 14
第84回 今年聴いたCDから	
.....	コメンテーター：吉村俊司・山本幸洋・福川靖彦・齋藤富士郎 22
「東京リンコン・デ・タンゴ」レポート	福川靖彦 25
第22回「関西リンコン・デ・タンゴ」	
レポート	山本雅生 32
プログラム	35
第13回「中部リンコン・デ・タンゴ」	
レポート	丹羽 宏 38
プログラム	42
第3回NTAミロンガパーティー報告	西川 薫 45
神戸発・上田・山本タンゴ写真館 (12)	
「藤澤嵐子&志賀 清とロス・モデルノス」	上田 登・山本雅生 49
<愛好家インタビュー>—佐藤 光男さん—	聞き手…西川 薫 51
回想「菅平高原タンゴフェスティバル」	黒木皆夫 55
タンゴ作家列伝 第4回 J. カルーソ/R. カジョール/C. レンシ	高場将美 62
現代タンゴ群像 (1955～1990) 第4回 クアルテート・パレー・ド・グラス	西村秀人 68
ブエノス・アイレスのマリア～その成り立ちと魅力	吉村俊司 73
カルロス・ガルデル -2-	大澤 寛 (訳) 81
マヌエル・ピサロ研究 (後編)	齋藤富士郎 86
アニバル・トロイロを楽しむ	佐藤光男 95
シリーズ・資料再見 (2) マンリオ・フランシアは語る	編集部 101
映画に見るアルゼンチン・タンゴ模様	
～そのアーティスト、タイトル、バイレなどをめぐって～ その4	飯塚久夫 103
こんなレコード/CDを聴いています (4) レッスンで使う音源	大久保江梨 105
全国リレー随想 (13) タンゴはまず「聴く」ことから	笠井正史 108
藤澤嵐子さん追悼	西村秀人 111
思い出す..... 叔父「早川真平」と「藤澤嵐子」のこと	山田建雄 120
ランコ・フジサワとフジヤマのトビウオ	笠井正史 123
藤澤嵐子・早川真平 年表	編集部 125
腕をあげた日本のタンゴ演奏家たち	上村 要 131
“Tango Concert ~Estrellita Tokuko Takahashi~” を聴く	齋藤富士郎 133
第一回アルゼンチンタンゴ早慶戦を聴いて	杉山滋一 135
2013年下期首都圏タンゴ・コンサート情報	脇田富水彦 139
編集後記	142

Índice

SALUDOS DEL PRESIDENTE	HISAO IIZUKA	4
ACTIVIDADES DE LA ACADEMIA DEL TANGO DE JAPÓN (De julio a diciembre de 2013)		6
ÁLBUM DE LAS ACTIVIDADES DE LA ACADEMIA.....		10
COMENTARIOS SOBRE “CLASE DE TANGO” :		
Vol.83 REVISANDO LA HISTORIA DE “LA CUMPARSITA” A TRAVÉS DE LOS DISCOS DE PASTA (PRIMERA PARTE : ANTES DE LA SEGUNDA GUERRA MUNDIAL)	COMENTARISTA : CHOJIRO SHIMAZAKI	14
Vol.84 DISCOS IMPRESIONANTES DE 2013COMENTARISTAS : SHUNJI YOSHIMURA, TAKAHIRO YAMAMOTO, YASUHIKO FUKUKAWA, FUJIO SAITO		22
“RINCÓN DE TANGO” EN TOKIO — REPORTAJE	YASUHIKO FUKUKAWA	25
“RINCÓN DE TANGO” EN EL OESTE” No.22		
REPORTAJE	MASAO YAMAMOTO	32
PROGRAMAS.....		35
“RINCÓN DE TANGO” EN LA REGIÓN CENTRAL No.13		
REPORTAJE	HIROSHI NIWA	38
PROGRAMAS.....		42
REPORTAJE SOBRE LA TERCERA FIESTA EN LA MILONGA	KAORU NISHIKAWA	45
DESDE KOBE : LAS FOTOS DE UEDA Y YAMAMOTO (12)		
RANKO FUJISAWA & KIYOSHI SHIGA Y SUS MODERNOS	NOBORU UEDA Y MASAO YAMAMOTO	49
ENTREVISTA CON LOS AFIOCIONADOS : SR. MITSUO SATO	KAORU NISHIKAWA	51
RECORDANDO AL FESTIVAL DE TANGO EN SUGADAIRA	MINAO KUROKI	55
LOS LETRISTAS DEL TANGO (4) J.CARUSO, R.CAYOL, C.LENZI	MASAMI TAKABA	62
IMÁGENES DEL TANGO CONTEMPORANEO (1955-1990) (4) CUARTETO PALAIS DE GLACE	HIDETO NISHIMURA	68
MARÍA DE BUENOS AIRES, SU ORIGEN Y SU ENCANTO	SHUNJI YOSHIMURA	73
CARLOS GARDEL (2)	traducción : HIROSHI OHSAWA	81
ESTUDIOS SOBRE MANUEL PIZARRO (Segunda parte)	FUJIO SAITO	86
GOZANDO LA MÚSICA DE ANÍBAL TROILO	MITSUO SATO	95
SERIE REENCUENTRO CON LOS DATOS (2) MANLIO FRANCIA CUENTA	EL EDITOR	101
EL TANGO EN LAS PELÍCULAS (4) : LOS ARTISTAS, LOS TEMAS, EL BAILE	HISAO IIZUKA	103
LOS TANGOS QUE ESCUCHAMOS (4) : LAS GRABACIONES QUE USAMOS EN LAS CLASES	ERI OKUBO	105
CADENA DE ENSAYOS (13) VAMOS A EMPEZAR EN “ESCUCHAR” EL TANGO	MASAFUMI KASAI	108
HOMENAJE PÓSTUMO A RANKO FUJISAWA	HIDETO NISHIMURA	111
RECORDANDO A MI TÍO SHIMPEI HAYAKAWA Y RANKO FUJISAWA	TATEO YAMADA	120
RANKO FUJISAWA Y “EL PEZ VOLADOR DE MONTE FUJI”	MASAFUMI KASAI	123
TABLA CRONOLÓGICA : RANKO FUJISAWA Y SHIMPEI HAYAKAWA.....	EL EDITOR	125
LOS ARTISTAS TANGUEROS JAPONESES DE ALTA NIVEL	KANAME UEMURA	131
ESCUCHANDO EL CONCIERTO DE “ESTRELLITA TOKUKO TAKAHASHI”	FUJIO SAITO	133
ESCUCHANDO EL CONCIERTO DE “PRIMER PARTIDO CLÁSICO DE LAS UNIVERSIDADES WASEDA Y KEIO EN EL TANGO”	SHIGEICHI SUGIYAMA	135
INFORMACIONES DE CONCIERTOS DE TANGO EN EL ÁREA CAPITAL	FUMIHIKO WAKITA	139
ANUNCIOS Y NOTAS DE LA REDACCIÓN.....		142

会長就任のご挨拶

飯塚 久夫

会員の皆さま、明けましておめでとう御座います。この度、4代目の会長を仰せつかりました飯塚です。若輩の身にあまり大役ですが、幾ばくなりとも日本タンゴ界の発展のためにお役にたつことが出来れば幸甚の至りです。新役員ともども何卒よろしくお願い申し上げます。

さて、皆さま方並びに島崎前会長のおかげで、日本タンゴ・アカデミーは、活動状況、会員数など、かつてない発展を遂げていると思っているところであります。会員数も昨年末で189名と、あと一歩で200名を超える数に達しております。そうした中で、アルゼンチン・タンゴをとりまく情勢は、ダンス・ブームが牽引する形ではありますが、世界的にも史上かつてない程の盛況を呈しており、加えて、アルゼンチン・タンゴは音楽をしっかりと理解・体得しないとダンスも上手くならないという認識も広まり、踊りを中心とする人たちにもタンゴ音楽の演奏・歌唱・鑑賞・解釈などが重要になりつつあります。日本タンゴ・アカデミーとしてはそうしたことも更なる機会ととらえ、より広く、多くの方々が一歩進んだタンゴの世界に定着するような努力もしていきたいと考えております。

というのは、日本タンゴ・アカデミーの会員数は増えているとはいえ、全国的・世間的にはタンゴに対する現実、戦後しばらくとは比較にならない状況にあるのは言うまでもありません。ましてや、私達が「黄金時代」と称し、タンゴの深奥さを最も湛えていると考えるスタイルのタンゴがいつまで続くのかといった懸念すらあります。「世界文化遺産」ということが象徴するように、アルゼンチン・タンゴの有するあらゆる文化性を軸に、これからも世代を超えて永続するタンゴの発展に微力ながら努力して参りたいと存じます。

最後になりましたが、今回役員を退任されます島崎前会長、佐藤進、西川薫両前監事には在任中のかけがえないご活躍・ご尽力に深く感謝申し上げます。島崎前会長には名誉会長として今後も日本タンゴ・アカデミーの活動を背後からご支援頂くことになりました。改めて、新体制での会員の方々への貢献をお誓い申し上げますと共に、皆さま方のご協力をよろしくお願い申し上げます。



<2014年度 日本タンゴ・アカデミー役員及び実行委員>

名誉会長	島崎 長次郎	
理事	会長 飯塚 久夫	事業担当及び事務局・広報担当 兼務
	副会長 高場 将美	セミナー担当 兼務
	副会長 齋藤 富士郎	「タンゲアンド・エン・ハポン」編集長 兼務
	杉山 滋一	会計担当
	福川 靖彦	リンコン・デ・タンゴ担当
	大澤 寛	「タンゴランディア」編集長
	弓田 綾子	事務局・編集・会員サービス担当
	西村 秀人	地域担当（中部）
	丹羽 宏	地域担当補佐（中部）
	*宮本 政樹	行事企画・編集担当
監事	*脇田 富水彦	名簿管理・行事案内
	*山本 幸洋	行事企画・若手振興担当
実行委員	吉田 義之	行事全般
	吉澤 義郎	行事記録
	山本 雅生	地域担当（関西）
	鈴木 一哉	若手振興
	*中村 尚文	行事全般
	* = 新任 なお監事の佐藤 進と西川 薫は都合により退任	



高場将美氏



西村秀人氏



山本雅生氏



鈴木一哉氏



後列左から：吉澤義郎氏、脇田富水彦氏、福川靖彦氏、吉田義之氏、宮本政樹氏、山本幸洋氏
 前列左から：丹羽 宏氏、弓田綾子氏、齋藤富士郎氏、島崎長次郎氏、飯塚久夫氏、大澤 寛氏、杉山滋一氏
 (写真撮影：吉澤義郎)

日本タンゴ・アカデミー 2013年下期活動実績

● タンゴ・セミナー (CLASE DE TANGO)

- ◎ 第83回セミナー：11月23日（土）、東医健保会館において、13時30分から16時30分まで、島崎長次郎会長自らがコメンテーターとなって「SPで訪ねる「ラ・クンパルシータ」の軌跡」というタイトルのお話がありました。お話の内容は、島崎会長ご所蔵のSPレコードによる1916年から1936年に至る20種のラ・クンパルシータ演奏例をベースに、演奏パターンの分析と基本和音（コード）の構成、それに歴史的経緯・発展の紹介を含めた大変密度の濃いものでした。基本和音に関しては河内敏昭氏も参加してのギター実演による説明もありました。タンゴ・セミナーを通り越して、さながら日本タンゴ・アカデミー大学の島崎長次郎教授による「ラ・クンパルシータ学特別講義」の感がありました。出席者ならぬ受講者は会員47名、ビジター2名の計49名でした。
- ◎ 第84回セミナー：12月7日（土）、東医健保会館において、13時30分から16時30分まで、今回は年末恒例の「今年聴いたCDから」というタイトルで吉村俊司氏、山本幸洋氏、福川靖彦氏、齋藤富士郎氏からそれぞれ最近のCDの紹介がありました。出席者は会員37名、ビジター1名の計38名でした。

● 東京リンコン・デ・タンゴ

- ◎ 7月30日（火）：今回は「特別納涼大会」という企画で、夜は参加が難しいという方々のために開催時間を14：30-17：30と昼間に設定し、ピアノ演奏が可能な「原宿ブルーガーデン」を臨時会場として開催しました。この企画は大成功で会員58名、ビジター4名、計62名という東京リンコン・デ・タンゴ始めて以来の盛会でした。プログラムは「私がタンゴにハマったあの曲・この曲」というタイトルで齋藤富士郎さん、大澤寛さん、グロリア米山さん、宮本政樹さん、小林謙一さんの5人の方々が、それぞれ思い出の曲を2曲ずつ披露されました。それに続いて「池田みさ子とロス・アミーゴス」（四重奏団）による熱演（7曲+アンコール1曲）に皆が聴き惚れ、キャッチフレーズ通り「熱いタンゴで暑気払い」となりました。
- ◎ 9月10日（火）：今回の特集は名曲5人選「フェリシアFelicia」で、コメンテーターは吉田義之さん、寺本千栄子さん、佐藤光男さん、石濱洋さん、笠井正史さんの5人で、それに河内敏昭さんも加わりました。日頃、あまり聴かない楽団の演奏での「フェリシア」を楽しみました。それに続いて中村尚文さんと脇田富水彦さんをコメンテーターとして「4大学タンゴ合同コンサートから」と題する、1975年12月10日の早稲田大学、慶応大学、中央大学、明治大学（明大については1979年の録音も含む）のタンゴ楽団合同コンサートの貴重な音源を楽しみました。参加者は会員40名、ビジター3名の合計43名でした。
- ◎ 11月19日（火）：今回は藤澤嵐子特集ということで杉山滋一さんの「藤澤嵐子さんを偲んで」というタイトルによる1951年から1982年に至る嵐子さんの数々の録音の紹介と笠井正史さんによる藤澤嵐子さんと同時代に活躍した日本のタンゴ演奏家の録音の紹介がありました。また河内敏昭さんのギター伴奏でグロリア米山さんが嵐子さんの愛唱歌を3曲歌われました。出席者は会員38名、非会員4名、ビジター2名の計44名でした。

● 第3回NTAミロンガ・パーティー

第3回NTAミロンガ・パーティーが10月12日（土）に昨年と同じ東京都千代田区一番町の「いきいきプラザ一番町・カスケードホール」において13時30分から16時30分までの3時間にわたって開催されました。出演楽団は平田耕治クアルテート+河内敏昭（g/vn）で、それにGYU&夏美しいによるダンスデモがありました。また齋藤富士郎さん、杉山滋一さん、佐藤 進さんの選曲によるCD鑑賞もありました。今回、初の試みとして、開演に先立って12時から12時40分まで開かれた大久保江梨さんらを講師とするタンゴダンス超入門講座では島崎会長も始めてタンゴを踊られ、人気を博していました。参加者は143名+招待者（お手伝い）3名=146名で、聴く人と踊る人の割合は51名対92名でした。

● 関西リンコン・デ・タンゴ

第22回関西リンコン・デ・タンゴは2013年10月27日（日）13時より神戸三宮の例会場「サロン・ド・あいり」にて開催されました。第1部は藤澤嵐子さんを偲んでのかつての名唱と、河内敏昭氏、井上 潤氏、麻場利華さんによる思い出話に耳を傾けました。第2部は「タンゴ・コケータ」の生演奏、第3部は脇田富水彦氏による1975年開催の4大学対抗タンゴ・コンサートの紹介でした。参加者はNTA会員12名、ゲスト参加者19名の合計31名でした。詳細は本号所載の山本雅生氏のレポートをご参照ください。

● 中部リンコン・デ・タンゴ

第13回中部リンコン・デ・タンゴは2013年11月10日13時より四日市市内の「スワ・セントラル・パーキング」2階大ホールで開催されました。第1部は前回に続いてゲスト解説者をお願いした名張市の澤田義寛氏（非会員）から「SP稀観原盤によるロドルフォ・シアマレーラ作品集」というお話をいただきました。第2部は「タンゴ・プラティーノ四重奏団」の生演奏。第3部は9月にモンテビデオ市で開催された《国際コロキアム》に出席された西村秀人氏からブエノス・アイレス&モンテビデオ最新アルバムとコロキアム講演会後に催されたコンサート映像の紹介がありました。参加者は会員10名、ビジター34名の計43名でした。詳細は本号所載の丹羽 宏氏のレポートをご参照ください。

● 機関誌「タンゲアンド・エン・ハポン」32号が7月に発行されました。

● 副機関誌「タンゴランディア」27号が10月に発行されました。

● 会員動静（2013年12月28日現在 会員数189名）

入会者（敬称略）：大石 豊（東京都）、鈴木慶子（東京都）、本間正行（東京都）、
星野睦郎（東京都）、松崎久美子（東京都）、山本嘉子（東京都）、
泉谷隆男（神奈川県）、廣嶋紀通（神奈川県）、田中早苗（埼玉県）、
寺本千栄子（千葉県）、勝原良太（三重県）

退会者（敬称略）：大和田充昭（逝去）、池上 格（逝去）、内村 宏、内田省三、奥村清彦、
河辺 功、関 明子、田原陽次郎、手島泰子、陳 昌敬、中野恵正（逝去）、
丹羽晴子、古橋ユキ、細田満理、松本千冬、由利あつ（逝去）

● 理事会・役員会

* 7月24日（水）：現在の会員数は190名ですが、2名の新規入会者が予定されているのでそれを含めると192名になるとの報告がありました。それに続き、入出金状況報告、機関誌編集発行状況、東京・関西・中部リンコン・デ・タンゴの報告があり、次回セミナーの予定、第

3回ミロンガパーティーの計画、タンゴ早慶戦（NTAは後援）の計画について討議しました。また不備が指摘されているHPの改善策も討議しました。

- * 9月2日（月）：3名の新規入会者があり、現在の会員数は193名であると事務局より報告がありました。それに続き、定例通り、入出金状況、機関誌編集状況の報告があり、また東京・関西・中部リンコン・デ・タンゴの次回タンゴ・セミナーの予定を審議しました。10月12日開催予定の第3回NTAミロンガパーティーにおける各役員の役割分担を決定しました。来年度の全国会員の集いの会場候補を議論しました（諸般の事情で東京メルパルクホールの予約確実性が期待できなくなったため）。11月1日開催予定のタンゴ早慶戦について関係者から報告がありました。
- * 10月1日（火）：新規入会者2名と退会者（死亡）1名の異動があり、現在の会員数は193名になったとの報告がありました。それに続き、入出金状況、東京・関西・中部リンコン・デ・タンゴの予定・企画と次回セミナーの企画について討議しました。第3回ミロンガパーティーの運営の詳細を討議し、併せて参加者の勸奨の要請がありました。来年春の「全国会員の集い」についてメルパルク東京の確保が困難になったので、代わりとしてメルパルク横浜に会場を変更し、開催日も3月9日（日）とすることに内定しました。
- * 11月5日（火）：新規入会者は2名、退会者は0名で現在の会員数は195名になったとの報告がありました。それに続き、会計入出金状況、東京・関西リンコン・デ・タンゴの報告と予定、次回セミナーの予定内容について討議しました。今回は10月12日開催の第3回NTAミロンガパーティーの報告と反省事項について詳細に討議しました。
- * 12月7日（土）：タンゴ・セミナーの終了後、同会場にて、理事改選年度に当る2014年度に向けて、理事改選人事案を中心に討議しました。

● 編集会議

- * 9月2日（月）：役員会に先だって編集会議を開き、タンゴランディア2013年秋号（27号）とタンゲアンド・エン・ハポン33号の編集進行状況を討議しました。
- * 11月5日（火）：役員会に先だって編集会議を開き、発行済みのタンゴランディア2013年秋号（27号）とタンゲアンド・エン・ハポン33号の編集進行状況について討議しました。

「2014年度NTA全国会員の集い」が開かれます

今回は会場と日時が昨年とは異なっています。ご注意ください。

日 時：3月9日（日）（昨年とは異なります） 午前10時開場

会 場：「メルパルク横浜」（昨年とは異なります）

〒231-0023 横浜市中区山下町16 TEL：045-662-2221（代）

<http://www.miel-yoko.com/>（会場への地図は次頁をご覧ください）

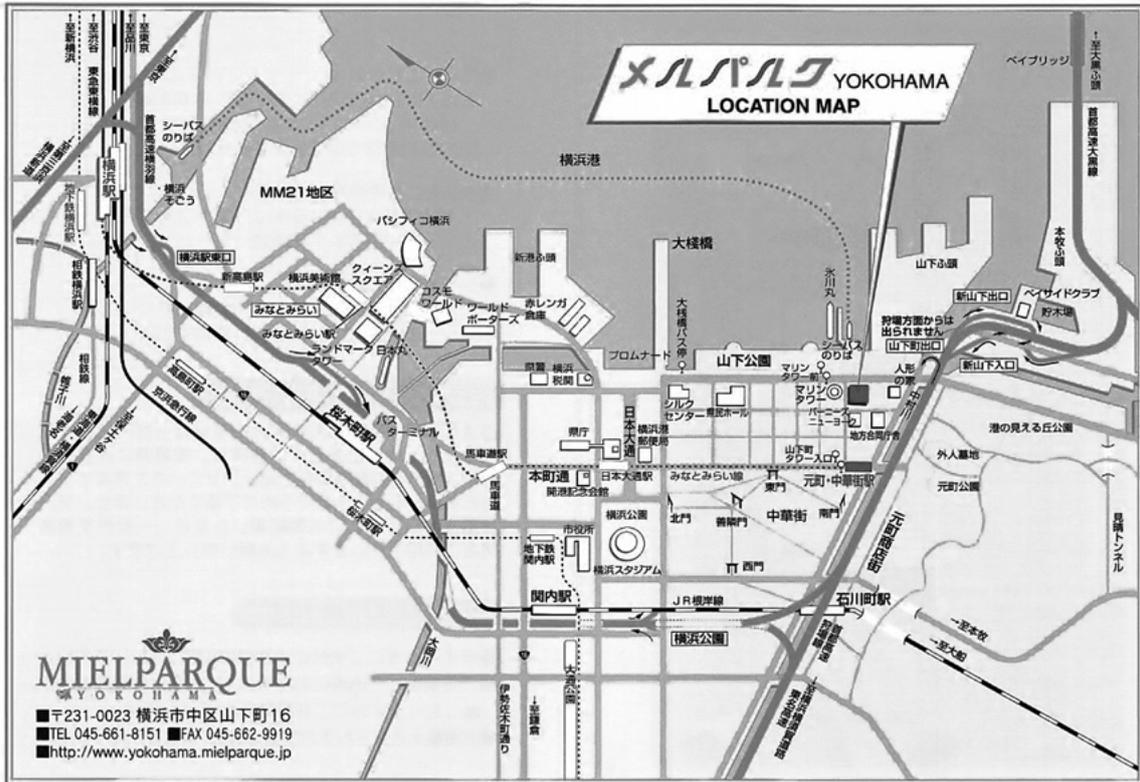
第1部：第85回タンゴ・セミナー

映画上映：“Al Corazón”（DVD）

コメンテーター：飯塚 久夫

第2部：懇親パーティー（会長挨拶、事業報告、決算・予算報告、懇談）

アトラクション：出演乐团「オルケスタYOKOHAMA」



●電車利用の場合：

- ① 地下鉄「みなとみらい線」元町・中華街駅より徒歩1分
- ② JR石川町駅（元町口）より徒歩12分

●バス利用の場合：桜木町駅より約15分、山下町バス停下車、8・20・58・148系統。

<リンコン・デ・タンゴ特集>

ーリンコン・デ・タンゴ(2013年1月28日)ー



「原宿クリスティー」のある東京・原宿・竹下通りとは
こんなところ

鈴木慶子さん(Vn)と仁詩さん(Bn)の2重奏



ーリンコン・デ・タンゴ(2013年3月19日)ー
今回は生演奏が無かったので会場風景のみです



ーリンコン・デ・タンゴ(2013年5月19日)ー
今回も生演奏が無かったので会場風景のみです



ーリンコン・デ・タンゴ(2013年7月30日)ー



今回の「特別納涼大会」の会場となった「原宿ブルーガーデン」の前景



会場風景

アカデミー行事アルバム



ロス・アミーゴスのメンバー:左より 鈴木慶子(vn)、田辺和弘(cb)、池田みさ子(p)、鈴木崇朗(bn)

ーリンコン・デ・タンゴ(2013年9月10日)ー
今回も生演奏はありませんでした



会場の外側から



新入会者の星野睦郎さん

ーリンコン・デ・タンゴ(2013年11月19日)ー



グロリア米山さんと河内敏昭さん



会場風景



アカデミー行事アルバム

第 83 回タンゴセミナー

— Clase de Tango (タンゴ・セミナー) —

SPで訪ねる ———

「ラ・クンパルシータ」の軌跡

— (戦前編) —

♪ とき 2013.11.23(土:祭)pm.1.30~

♪ ところ 東医健保会館 (信濃町)

♪ とく 島崎長次郎



G. H. Mator Rodriguez



La Cumparsita
Tango
para Piano
G. H. Mator Rodriguez



主催 日本タンゴ・アカデミー



SPで訪ねる ——

「ラ・クンパルシータ」の軌跡

—— (戦前編) ——

2013/11/23(土)

◆ 曲に関する基礎知識あれこれ

○(作曲家)GERALDO HERNAN MATOS RODRIGUEZ(1897~1948)、モンテビデオ生れ。

○(作曲の動機)作曲者が工科大学の学生時代に、彼らが借りていた学生連盟の宿舍が家賃の滞納で追い立てにあっていたため、苦肉の策として街のカーニバルに出場して賞金を稼ごうと、たどたどしい手つきでピアノに向かって書いたのが「ラ・クンパルシータ」で、楽譜を書いたのは友人のカルロス・ワーレンといわれている。(マーチを思わせる割り切れた4ビートの冒頭部分は、まさにそれを裏付けている。)

○(作曲年)目下①1914説、②1916年説、③1917説、と諸説があってハッキリしていないのが現状。①を一貫して唱えてきたのが評論家で故人となった高橋忠雄氏(17歳のとき作曲したとの説が正しいとすれば、まさにこの年)。②「インベントリオ・デル・タンゴ(H. Ferrer/O. Del Priore)」ほか、アルゼンチンで最も多いのがこの説。要は、作曲した年を本人の申告でとるか、楽譜出版、あるいはレコーディングでとるのか、このあたりは微妙だ。③モンテビデオの「カフェ・ヒラルダ」でフィルポが初演したとのプレートがあるが、これはフィルポが前年すでに録音(DN48388)済みなので、あくまでも現地での初演であって、作曲とは違う。

○(曲名の由来)元はCOMPARSAで、スペイン語事典にあるとおり“仮装行列”の意味になるが、これがイタリー流、又はスペイン東部のカタルニャ風に「O」→「U」に訛り、縮小辞で「LA CUMPARSITA(小さな仮装行列)」となった。

◆ 曲の構成と、その魅力を探る

○ 曲は次の三つの楽章、つまり、第1主題(A)=15小節、第2主題(B)=16小節、第3主題(C)=16小節で構成され、これが「ト短調」で一貫して書き上げられ、各々の主題が起伏に富んだ特徴を備える中で、全体が見事にバランスされているといえるが、特に魅力的なのが、<ドミナントセブン(属7の和音)>に乗せ、簡素な4ビートでスタートする第1主題の冒頭部分。このコードの持つかすかな不安感、同時に妖しい魅力を醸し出し、これと安らぎを保つトニック(主和音)が交互に綾なし、聴くものを惹きつけ、魅了させる。この作品の人気の秘密は実にここにこそあり、演奏パターンはA→B→A→C→A→Aとなり、Aの反復が常識になっている。

○演奏者のすべては、絶妙な楽想を持つこの第1主題があるがゆえに、限りなく編曲意欲を掻き立てられ、そこに最大限の創意と工夫を凝らし、己の夢を果たそうとする。だから、無数の「ラ・クンパルシータ」が次々に生まれ、それぞれの味わいで楽しませ、尽きることがない。



) _____ 《 プログラム 》 _____ (

- | | |
|---|---------------------|
| ◇ <u>最初期のレコード</u> | 「録音」 「使用音源」 |
| 1. ロベルト・フィルポ楽団 ROBERTO FIRPO Orq. | G:1916 亜Ode. 4838 |
| 2. アロンソ=ミノット楽団 ALONSO=MINOTTO Orq. | G:1917 米Vic. 69579 |
| ◇ <u>日本での事始になったレコード</u> | |
| 3. フリアン・ウアルテ楽団 JULIAN HUARTE Orq. | G:1929 日Col. J1961 |
| 4. エバ・ボール楽団 EVA BHOR Orq. | G:1927 米Col. 2576 |
| ◇ <u>名手対決による白熱のコラボレーション</u> | |
| 5. マフィア=ラウレンス MAFFIA=LAURENZ (Bn. 2重奏) | G:1926 亜Vic. 79690 |
| 6. イリアルテ=ペソア IRIARTE=PESOA (Gu. 2重奏) | G:1928 日Col. J2758 |
| ◇ <u>タンゴ・カンシオンのを 拓いた二人</u> | |
| 7. カルロス・ガルデル CARLOS GARDEL "si supieras" | G:1924 亜Ode. 18118 |
| 8. ロベルト・ディアス ROBERTO DIAZ | G:1926 亜Vic. 79702 |
| ◇ <u>この名作をこよなく愛した日本の歌手たちの代表</u> | |
| 9. 奥田 良三 RYOUZO OKUDA | G:1936 日Pol. 2397 |
| 10. 淡谷 のり子 NORIKO AWAYA | G:1940 日Col. J30471 |
| ◇ <u>ヨーロッパ遠征組の熱演から</u> | |
| 11. オラシオ・ペトロッシ楽団 HORACIO PETTOROSI Orq. | G:1930伊Col. D03756 |
| 12. オスカル・ロマ楽団 OSCAR ROMA Orq. | G:1934 日Cri. CP932 |
| ◇ <u>わが国での普及に一役買ったダンス・バンド</u> | |
| 13. 巴里ムーランルーージュ楽員 PARIS MOULIN ROUGE Orq. | G:1933 日Reg. 67270 |
| 14. ザ・カステリアンズ THE CASTILLIANS | G:1934 日Col. M-20 |
| ◇ <u>黄金時代を飾った名流楽団の遺産</u> | |
| 15. オスバルド・フレセド楽団 OSVARDO FRESEDO Orq. | G:1927 亜Ode. 5137 |
| 16. フランシスコ・カナロ楽団 FRANCISCO CANARO Orq. | G:1933 亜Ode. 4262 |
| 17. フランシスコ・ロムート楽団 FRANCISCO LOMUTO Orq. | G:1936 日Vic. JA1175 |
| 18. ロベルト・フィルポ4重奏団 ROBERTO FIRPO 4to. | G:1936 亜Ode. 3508 |
| 19. オルケスタ・ティピカ・ロス・プロビンシァノス LOS PROVINCIANOS | G:1932 亜Vic. 47621 |
| 20. カジェタノ・プグリッシ楽団 CAYETANO PUGLISI Orq. | G:1929 亜Vic. 47076 |

LA CUMPARSITA

ラ・クンパルシータ
TANGO

Letra y Música de
G.H.MATOS RODRIGUEZ

(A)

primero

La Cum-par-sa De-mi-se-ria sin fin Des-fi-la. En tor-no de-a-quel ser En-fer-mo,

Arco 2a vez (4cuerda)
Violin la vez Pizz

Piano

(B)

segundo

Aban-do-nó su vi-e-ji-ta Que-que-dode-sam-pa-ra-da Y lo-co de pa-sión Cie-gode-a-mor

(C)

trio

Hoy ya so-ña-ban-do-na-do A lo tris-te de su suer-te An-sio-snes-pe-ra lo

各レコードの演奏パターン (プログラム参照)

- | | |
|--------------------|--------------------|
| ◇ 最初期のレコード | ◇ ヨーロッパ遠征組の熱演から |
| 1. A-B-B-A-C-C-A | 11. A-B-A-C-A-A |
| 2. A-A-B-B-A-C-C-A | 12. A-B-A-C-A-A |
| ◇ 日本でこの事始になったレコード | ◇ わが国での普及に一役買ったD/B |
| 3. A-B-A-C-A-B | 13. A-B-A-C-A |
| 4. A-B-A-C-A-A | 14. A-A-B-C-A |
| ◇ 名手対決による白熱のコラボ | ◇ 黄金時代を飾った名流楽団の遺産 |
| 5. A-B-A-C-C-A | 15. A-B-A-C-A |
| 6. A-A-B-A-C-A | 16. A-B-A-C-A |
| ◇ タンゴカンシオンの道を拓いた二人 | 17. A-B-A-C-A-A |
| 7. A-B-A-C-A | 18. A-B-A-C-A-A |
| 8. A-B-A-C-A | 19. A-B-A-C-A |
| ◇ この名作を愛した日本の歌手 | 20. A-B-A-C-A-A |
| 9. A-B-A-C-A | |
| 10. A-B-C-A | |

(註) A=第1主題 B=第2主題 C=第3主題

各種レコード

プログラム
No. 参照



1	2
4	7
12	13
16	20



LA CUMPARSITAと同じように……

妖しい魅力のドミナントセブ(属7の和音)で始まるタンゴ(例)

Adios Argentina

Letra de: FERNAN SILVA VALDÉS
Música de: G. H. MATOS RODRIGUEZ

PIANO

エル パニョ エリト El Pañuelito

Letra de G. Coria Peñalosa
Música de Juan de Dios Filiberto

Piano

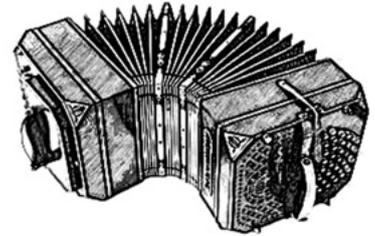
Triste
Sonoro
mf

COMME IL FAUT

por EDUARDO AROLAS

PIANO

Re. dim.
mf
Appassionato
Lam. Mi7 Lam.



EL ACOMODO

Edgardo Donato

PIANO

LA YUMBA

Música de OSVALDO PUGLIESE

PIANO

EL AMANECER

Roberto firpo

GUITARRA

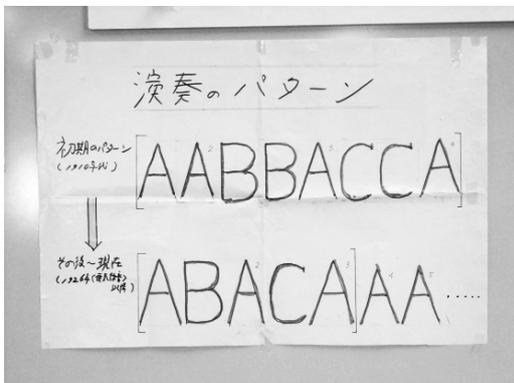
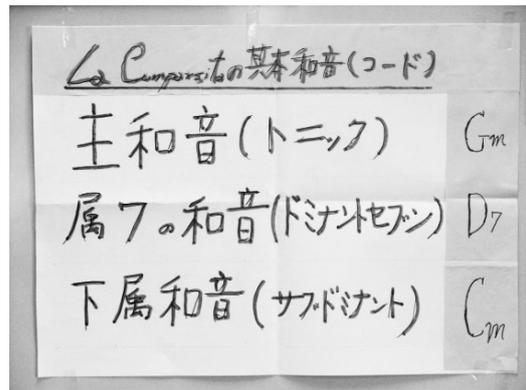
p cresc.



「ラ・クンパルシータ学特別講義」をする島崎会長



河内敏昭氏の協力を得て基本和音の説明をする島崎会長



「ラ・クンパルシータ」の演奏パターンの変遷の説明



島崎会長所蔵の貴重なSPレコード



「ラ・クンパルシータ」初録音と言われるロベルト・フィルポ楽団による1916年録音のレコード



カジェタノ・プグリシ楽団による1929年録音の「ラ・クンパルシータ」レコード



熱心に聴き入る「受講者」の方々



ウルグアイのマトス・ロドリゲス記念切手



タンゴ・セミナーのプログラム

タンゴ教室

Clase de Tango

第84回タンゴ・セミナー

2013年12月7日

今年聴いたCDから

コメンテーター：吉村 俊司 山本 幸洋
福川 靖彦 齋藤 富士郎

コメンテーター：吉村 俊司

1. **Tierrita - 新黄金世代の巨匠たち**
/ Orquesta Nicolás Ledesma
2. **Milonga Carriaguera - María de Buenos Aires**
/ 小松亮太/ Amelita Baltar/ Leonardo Granados/ Guillermo Fernández/ Tokyo Tango Dectet
3. **Negra María - En Vivo En Suiza**
/ Las Bordonas
4. **La cachila - Contacto**
/ Dario Barozzi - Matías Rubino
5. **Carismático - Ideas & Emociones**
/ Saúl Cosentino
6. **Pensalo Bien - Doble O Nada**
/ Sexteto Milonguero



コメンテーター： 山本 幸洋

1. **Taconeando 4:42 / Tango**
/ Atilio Stampone
2. **La Catrera 3:28 / Tangos En Versión Original - Volumen 1**
/ Orquesta Típica “Pacho”
3. **La Viruta 4:42 / Todo Corazón**
/ Mark Weinstein
4. **Scandilonga 2:37 / Tangofied**
/ Torben Westergaard & Diego Schissi
5. **Marrón y Azul 3:50 / Piazzolla… Amor**
/ Orquesta Aurora
6. **Chiquilín De Bachín 6:08 / Conversaciones Desde El Arrabal Amargo**
/ Adrián Iaies & Horacio Fumero



コメンテーター： 福川 靖彦

1. **CHIQUE**
中央大学ルナタンゴ 1975年
2. **A LA LUZ DEL CANDIL**
フランシスコ カナロ楽団 1927年
3. **BOLADA DE AFICIONADOS (M)**
ファン ダリエンソ楽団 1941年
4. **LA BORDONA**
レオポルド フェデリコ楽団 1996年
5. **NOCHERO SOY**
オスバルド プグリエーセ楽団 1956年



6. SEGUIME SI PODÉS

オスバルド プグリエーセ楽団 1953年

コメンテーター： 齋藤 富士郎

1. フォゴ (Fogo) (M: A. Linetzky)

「建国200年祭」記念 オルケスタ・ティピカ (指揮 A. リネツキー)

G. 9/12/2010EPSAMUSIC 1320-02 ©&© 2011

2. 心のすべて (Todo corazón) (M: J. De Caro)

フリオ・デ・カロ楽団

G. 1924 CTA-126 © 2012

3. マレーナ (Malena)

(M: L. Demare, L: H. Manzi)

アストル・ピアソラ・イ・ス・グラン・オルケスタ

G. 1967 Universal 3725344 ©&© 2012

4. 迷える鳥たち (Los pájaros perdidos)

(M: A. Piazzolla, L: M. Trejo)

(歌) ロクサーナ・フォンタン (伴奏) 五重奏団 (指揮: N. ゲルシュベルグ)

G.? EPSAMUSIC 1273-02 ©&© 2012

5. 小ぬか雨 (Garúa) (M: A. Troilo, L: E. Cadícamo)

(歌) アイダ・デニス、(伴奏) 不明

(TV Canal 11 1964-1965) DIEGON 89019 © 2012

6. ラ・クンパルシータ (La cumparsita)

(M: G.H. Matos Rodríguez L: P. Contursi / E. P. Maroni 訳詞: 藤澤嵐子)

(歌) 藤澤嵐子 (伴奏) 早川真平とオルケスタ・ティピカ東京

G.? UNIVERSAL MUSIC TYCN-60003 Disc 1



「東京リンコン・デ・タンゴ」



レポート：福川 靖彦

東京「原宿クリスティー」にて

「リンコン・デ・タンゴ」は、タンゴの普及を目的の一つとしてどなたでも参加できる気楽な会を歌い文句にしておりますが、それだけに主催者側としてはお客様の「入り」が常に気になるところです。そのためにはまず魅力あるプログラムを作ることが最も大切であり且つ苦勞をするところでもあります。会場を原宿に移して以来、実演もプログラムして取り入れてきましたが、それはそれでまた別の苦勞もありお客様の声を気にしなくてはならないことが増えてしまいました。反面楽しみも増えたことも事実ですが。

第71回 2013年7月30日 特別納涼大会 於 原宿ブルーガーデン

出席者 62名

今回はリンコンでは初めての試みとして「納涼大会」と銘打って、CD解説+演奏会で夏の一日を盛り上げようということになりました。会場も恒例の「クリスティー」ではなく、近くの洒落たレストラン「ブルーガーデン」を借り切り、5名の豪華コメンテーターによるCD解説と池田みさ子とロス・アミーゴス四重奏団による演奏会という形になりました。幸い62名というお客様をお迎えして、会場も大いに盛り上がり楽しい夏のタンゴの午後を楽しむことができました。

第1部

テーマ：私がタンゴにハマったあの曲・この曲

齋藤富士郎さん

1. アディオス パンパ ミア
ADIÓS PAMPA MÍA
2. キス オブ ファイア
KISS OF FIRE

フランシスコ カナロ

ジョージア ギブス



大澤寛さん

1. チキリン デ パチン
CHIQUILÍN DE BACHÍN
2. ラ リモスナ
LA LIMOSNA

アメリタ バルタール

フリオ マルテル



グロリア米山さん

- | | |
|-----------------------------------|-----------|
| 1. バイレモス
BAILEMOS | リベルタ ラマルケ |
| 2. カンテモス コラソン
CANTEMOS CORAZÓN | ファン ダリエンソ |



宮本政樹さん

- | | |
|--|----------------|
| 1. エル ペンサミエント (v)
EL PENSAMIENTO | ファン マグリオ “パチョ” |
| 2. ミエントラス ジョーラ エル タンゴ
MIENTRAS LLORA EL TANGO | ラ カージェ |

小林謙一さん

- | | |
|--|----------|
| 1. アルマ デル バンドネオン
ALMA DEL BANDONEÓN | タニア |
| 2. アディオス アルヘンティーナ
ADIÓS ARGENTINA | アルベルト ビラ |



第1部は5名のベテランの方々にご自身のタンゴ遍歴を語っていただきました。タンゴファンは同じような経験をもった方が多いようですが、それでも夫々タンゴにはまっていったきっかけは誰一人として同じ曲が無かったのには感銘を受けました。ご自分のタンゴを語る時の目は皆さん輝いていました。

第2部

納涼大会演奏会 池田みさ子とロス・アミーゴス

池田みさ子 (p)、鈴木崇朗 (bn)、鈴木慶子 (vl)、田辺和弘 (cb)

- | | |
|--------------------------------|------------|
| 1. SELECCIÓN DE JUAN D'ARIENZO | ダリエンソ メドレー |
| 2. SUR | 南 |
| 3. NOSTÁLGICO | ノスタルヒコ |
| 4. CORAZÓN DE ORO (v) | 黄金の心 |
| 5. SENTIMIENTO GAUCHO | gauchoの嘆き |
| 6. FORTÍN CERO (m) | フォルティン セロ |

7. RECUERDO

思い出

池田みさ子と新編成ロス・アミーゴス四重奏団の熱演でした。タンゴを聴くのにはちょうど良い広さと雰囲気を持った会場で、演奏の後はプレーヤーも一緒になってワイワイと時間の経つのを忘れましました。



第72回 2013年9月10日 於 原宿クリスティー

出席者 43名

今回は会場を従来の「クリスティー」に戻しての開催です。ちょうどこの頃日本タンゴ・アカデミーも後援する「タンゴ早慶戦」という企画が進行中で、やや話題になりつつありました。島崎長次郎会長はじめ日本タンゴ・アカデミーとしても「タンゴの普及のために」という名分で協力して行こうということになったのです。ちょうどそんな時、「4大学タンゴ合同コンサート」というプライベートCDを役員の脇田富水彦さんが所持されているということが判り、今回のリンコンで聴かせていただくことにしました。

第1部

コメンテーター：脇田富水彦

4大学タンゴ合同コンサートから {1975年}

早稲田 Orquesta de Tango Waseda

1. マイポ Maipo (E.Arolas)

2. ラカチーラ La Cachila (E.Arolas)

慶応 KBR Tango Ensemble

1. バンドネオンの嘆き Quejas de Bandoneón (J.Filiberto)
2. 二人の為に Para Dos (O.Ruggiero)

中央 Luna Tango Ensemble

1. 甘きものを Ahí va el dulce (J.Canaro)
2. 悪い仲間 Mala Junta (J.De Caro)

明治 Orquesta Típica Meiji

1. プレパレンセ Prepárense (A.Piazzolla)
2. インデペンデンシア Independencia (A.Bevilaqua)

ダリエンソ メドレー (1979年)
チケ (1979年)

1950年代から60年代にかけては多くの大学に学生タンゴバンドがあつて、それぞれ活躍していましたが、いまや現役学生タンゴバンドはオルケスタ・デ・タンゴ・ワセダのみとなつてしまいました。今日聴いた4大学のタンゴバンドはもちろんアマチュアですから、技術的なテクニクを求めることはできませんが、どの楽団も一生懸命に演奏している様子が伝わってきて、聴き終わって何かホッとしたようなスッキリした気持ちになれました。



コメントする中村尚文さん（左）と脇田冨水彦さん（右）

第2部

名曲5人選 「フェリシア」

- | | |
|------------|------------------|
| 1. 吉田義之さん | フェルナンド テル トリオ |
| 2. 寺本千栄子さん | カルシート クアルテート |
| 3. 佐藤光男さん | オスマール マデルナ楽団 |
| 4. 石濱洋さん | アドルフォ カラベリ |
| 5. 笠井正史さん | オルケスタ ティピカ トーキョー |

名曲5人選は一つの曲を5人のコメンテーターに自分流に解説していただくという趣向のプログラムですが、前回の「エル チョクロ」に続いて2回目です。定評のある演奏はほぼ限られているように思いますが、5人の方がバッティングしないということは、驚きというかさすがアカデミーというか見事なものであります。



第73回 2013年11月19日 於 原宿クリスティー

出席者44名

第73回リンコンの準備をしている最中に、あの藤沢嵐子さんの訃報が飛び込んできました。タンゴの女王と称され、我が国のタンゴの隆盛を夫君の早川真平さんと共に牽引した偉大なタンゴ人です。引退後新潟県長岡市で静かな余生を送っておられたように聞いていましたが、改めてタンゴの巨人を失ったなという気持ちになりました。

そこでリンコンも急遽プログラムを変更し、「藤沢嵐子特集」を組むことにしました。第1部にはこのテーマに最もふさわしい杉山滋一さんをお願いし、第2部ではこれまた完璧な資料をお持ちの笠井正史さんをお願いしました。そして蘭子さんとは最も縁の深い、元オルケスタ ティピカ東京のバイオリニストであった河内敏昭さんのギター伴奏で、グロリア米山さんに嵐子さん縁の歌をお願いしました。まさに豪華版「藤沢嵐子特集」と言えるでしょう。

第1部

コメンテーター：杉山滋一

テーマ：藤沢嵐子さんを偲んで



伴奏

- | | | |
|--|--------------|-----------------|
| 1. EL PAÑUELITO
白いスカーフ | オルケスタ ティピカ東京 | ビクター (1951) |
| 2. SUR
南 | トロイロ=グレラ | BsAsライブ (1953) |
| 3. AQUEL PAÑUELO AZUR
水色のワルツ | カルロス ガルシーア楽団 | MH (1954) |
| 4. MAMA VIEJA
ママ ビエハ | ギター トリオ | 東芝 (1961) |
| 5. FRENTE AL MAR
海に向かいて | オルケスタ ティピカ東京 | RCA (1964) |
| 6. EL ÚLTIMO CAFÉ
最後のコーヒー | オルケスタ ティピカ東京 | CBS SONY (1968) |
| 7. PATOTERO SENTIMENTAL
パトテロ センティメンタル | オルランド トリポディ | トリオ ライブ (1981) |
| 8. LA CUMPARSITA
ラ クンパルシータ | アストル ピアソラ5重奏 | ライブ (1982) |



特別出演

グロリア米山 (唄)

河内敏昭 (ギター)

- 1 ママ恋人がほしい
- 2 カンタンド
- 3 カミニート



第3部

コメンテーター：笠井正史

テーマ：藤沢嵐子と同時代に活躍した人たち



[日本人楽団による演奏]

- | | | |
|---------------------|----------------|---------|
| 1. EL HURACÁN | 坂本政一とO.T. ポルテナ | G. 1970 |
| 2. EL POLLO RICARDO | 平野洋輔とロス・タンゲーロス | G. 1987 |

[日本人歌手による歌曲]

- | | | |
|-------------------------|-----------------|---------|
| 3. VENTANITA DE ARRABAL | 阿保郁夫 (vo) | |
| | 小沢泰とO.T. コリエンテス | G. 1980 |
| 4. FUMANDO ESPERO | 柚木秀子 (vo) | |
| | 小松真知子とタンゴ・クリスタル | G. 1988 |
| 5. BANDONEÓN ARRABALERO | 前田はるみ (vo) | |
| | 池田光夫とロス・アミーゴス | G. 1984 |

[日本人の作曲]

- | | | |
|-------------------------|------------|---------|
| 6. ROSARIO (タケカワ ユキヒデ) | セイケ シスターズ | G. 1984 |
| 7. TAL VEZ UN DÍA (小松勝) | 京谷弘司タンゴトリオ | G. 1987 |

第3部は藤沢嵐子さんと同時代に日本で活躍した楽団・歌手をとりあげていただきました。現在ではこれほどの豪華メンバーを揃えることは難しくなりましたが、有望な若手プレーヤーも育ってきているようです。

これからも大いに期待して行きたいものです。

第22回 関西リンコン・デ・タンゴ・レポート

— 山本 雅生 —

2013・10・27日（日）に第22回「関西リンコン・デ・タンゴ」が例会場の神戸は三宮の「サロン・ド・あいら」で行われましたので、報告をさせていただきます。

10日位前から発生した台風27号が一週間位前から奄美大島の付近で停滞をし、例会の当日に関西地方から東海地方の南海上を通過するとの予報で心配をしたのですが、早めに東の海上へ去ってくれて、秋晴れの爽やかな日になって、楽しく開催をする事が出来ました。東京からは今回の為に来て下さった「脇田富水彦さんご夫妻」と、かつてオルケスタ・ティピカ・東京で活躍をされたタンゴ界の大物「河内敏昭さん」がお見えになって賑やかに開会をしたのでした。

今年8月下旬に新聞・テレビなどで「タンゴの女王」藤澤嵐子さんがお亡くなりになったとの報道に接し「関西リンコン」でも哀悼の意を表すると共に、歌を聴こうと云うプログラムを組んでみました。

神戸ポルテニア音楽同好会の「角井さん」にお世話をして頂いてご覧の様なプログラムを組んで頂きました、レコード・CDなど市販の音源は沢山有るのですが、今回は全てライブ録音の音源で聴いて頂く趣向です。

最初の3曲は会員の山田さんの提供になるもので1曲目の「スール」ではオルケスタ・ティピカ・東京が1958年にブエノスアイレスを訪れた時ディセポロ劇場で、ペロン大統領が出席をされたコンサートに於いて藤澤嵐子さんが挨拶をされた声が入ったもので、ラジオ・スプレンドイーからラジオ東京に送られて「藤澤嵐子アワー」で放送をされたものです、以下レコード以外のライブ録音をされたもの6編で構成しています。

途中で河内さんに出て頂いて、嵐子さんとの「身内話し」をお話しして頂きました、姫路の井上さんには1980年（平成1・11・11）姫路キャッスルホテルでのディナーショーでのお話し、麻場さんには1991年東京・虎ノ門教育会館での最後のコンサートで演奏をしたタンゴ・クリスタルで、現在アストロリコを率いて活躍をされている門奈紀生さんがバンドネオンを弾いていた事などのお話しをして頂きました。

第2部では「タンゴ・コケータ」の演奏を楽しみました「タンゴ・コケータ」は2004年に結成されたアストロリコからの派生グループの様でバンドネオンの星野さん・バイオリンの外園さんはオルケスタ・アストロリコのメンバーでもあり、気心の知れた仲間でも有ります。オトラでは、「ロカ」を演奏して呉れました。

第3部では東京から来て下さった脇田さんの出番で、最初に「昭和生まれの明治です」とご挨拶が有り、人の前で話しをするのは嫌なんだけれど！と云われながら、1975年に行われた4大学「早稲田」「慶応」「中央」「明治」のタンゴバンドの演奏を、お話しを交えて聴かせて頂きました。おまけには「ダリエンソ・メドレー」「チケ」の2曲を楽しませて頂きました、それぞれ大した力演で若い人達に

この様な演奏を伝えて下さる土壤が残って欲しいと思ったことでした。

例によって吉澤さんのご奮闘で記念写真を撮って頂いたあと、井上さん・鈴木さんお二人の音頭による乾杯が有り、脇田さんを囲んで懇親会が始まり、日本タンゴ・アカデミー「2013・NTA全国会員の集い・セミナー・懇親会」のDVDを見せて頂きました。

大変盛り上がった懇親会も19:30頃打上となり、散会となりました。参加人数はNTA会員12名、会員外のゲスト19名の合計31名でした。来年の開催日は5月18日と11月9日に予約済みです。



司会の山本雅生さん



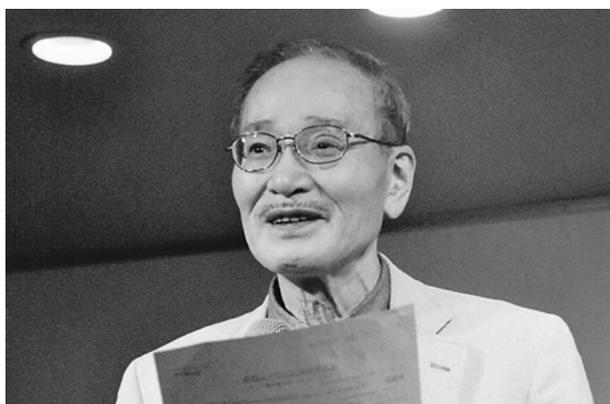
藤澤嵐子さんの思い出を語る河内敏昭さん



藤澤嵐子さんの思い出を語る井上 潤さん



藤澤嵐子さんの思い出を語る麻場利華さん



4大学タンゴバンドの演奏を紹介する
脇田富水彦さん



「タンゴ・コケータ」の演奏
ピアノ 吉岡 凜、バンドネオン 星野俊路、ヴァイオリン 外菌美穂



参加者集合記念写真

(写真撮影：山本雅生、吉澤義郎)

<プログラム>

***** 第 1 部 *****

藤沢 嵐子さんの歌を聴く

- | | | | |
|----|---|--------------------------------|------|
| 1 | SUR スール (南) | トロイロ・グレラ ラジオ東京 | 1953 |
| 2 | VIDA MÍA ビダミア (我が命の君) | ビクトル ブチーノ ミュージックホール | 1954 |
| 3 | PROHIBIDO プロイビード (許されぬコト) | ベト アルゴ TK | 1955 |
| 4 | CAMINITO カミニート (小径) | ファン カンバレリー4重奏団 大阪厚生年金会館 | 1969 |
| 5 | A MEDIA LUZ アメディアルス (淡き光に) | 〃 | |
| 6 | MAMA YO QUIERO UN NOVIO ママ ジョキエロウン ノビオ (ママ私恋人が欲しいの) | タンゴ誕生100年 Orq. Típ. 東京 中野サンプラザ | 1980 |
| 7 | YIRA YIRA ジーラ ジーラ | 〃 | |
| 8 | CHIQUILÍN DE BACHÍN チキリン デバチン (バチンの少年) | アストル ピアソラ5重奏 渋谷公会堂 | 1982 |
| 9 | CHE BANDONEÓN チェバンドネオン (おいバンドネオンよ) | ピアソラ ソロ Bandoneón | 〃 |
| 10 | LA CUMPARSITA ラクンパルシータ | アストル ピアソラ5重奏 | 〃 |
| 11 | BANDONEÓN ARRABALERO バンドネオン アラバレロ (場末のバンドネオン) | キンテート モデルノス 姫路キャッスルH | 1989 |
| 12 | MILONGUITA ミロンギター | 〃 | |
| 13 | Y A MÍ QUÉ イアミケ (私は平気さ) | 小松真知子 タンゴクリスタル 虎ノ門教育会館ホール | 1991 |
| 14 | TIEMPOS VIEJOS ティエンポス ビエホス (古い時代) | 小松亮太 ソロBandoneón | 〃 |
| 15 | ANTES DE ADIÓS アンテス デアディオス (別れの前に) | タンゴクリスタル 最後のコンサート | |

***** 第 2 部 *****

TANGO COQUETA の演奏を楽しむ

タンゴ・コケータのプロフィール

2004年、古典からモダンまでタンゴをこよなく愛するピアニスト吉岡凜をリーダーとし、オルケスタ・アストロリコで活躍する奏者と共に結成されたユニット。

クラシカルでエレガントな佇まいと、情熱的かつダイナミックなサウンドに定評のある本格的タンゴ・バンドである。2008年、アルゼンチンにて様々なコンサートに出演した際には、繊細かつエモーショナルな熱演であったと大変高い評価を得て、タンゴ・マガジンの取材をうけるなどタンゴの本場ブエノスアイレスでも注目された。

近年の日本国内の活動に於いても、朝日新聞主催アサコムコンサートの再演を希望するコンサートで一般投票1位を獲得し、再演の祭は最多の来場者数を記録した。

又、八幡市主催のコンサートでも、定員を超える観客動員数を記録するなど、非常に高い人気を博している。なお、ユニット名である『コケータ』とは、アルゼンチンの公用語であるスペイン語の『魅力的な女性』の意。バンドネオンの名演奏家、門奈紀生氏に依る命名である。

メンバー： ピアノ 吉岡 凜、ヴァイオリン 外園美穂、バンドネオン 星野俊路

プ ロ グ ラ ム

一 部

- 1 エル・チョコロ
- 2 ヌエベ・デ・フリオ
- 3 デスデ・エル・アルマ
- 4 アディオス・ムチャーチョス
- 5 パリのカナロ
- 6 碧空
- 7 エバリスト・カリエーゴに捧ぐ

二 部

- 8 鍵盤の悲しみ
- 9 パトテロ・センチメンタル
- 10 我が愛のミロンガ
- 11 カミニート
- 12 バンドネオンの嘆き
- 13 ラ・クンパルシータ

***** 第 3 部 *****

4 大学対抗タンゴ・コンサート (1975 / 12 / 10 日本青年館ホール) から

080 脇田 富水彦

早稲田 Orquesta de Tango WASEDA

- 1 マイポ Maipo (E. Arolas)
- 2 ラカチーラ La cachila (E. Arolas)

慶 応 KBR Tango ensemble

- 3 バンドネオンの嘆き Quejas de Bandoneón (J. Filiberto)
- 4 二人の為に Para dos (O. Ruggiero)

中 央 Luna Tango ensemble

- 5 甘きものを Ahí va el dulce (J. Canaro)
- 6 悪い仲間 Mala junta (J. D. Caro)

明 治 Orquesta Típica MEIJI

- 7 プレパレンセ Prepárense (A. Piazzolla)
- 8 インデペンデンシア Independencia (A. Bevilacqua)

ダリエンソ メドレー 1979

チケ Chiqué (R. L. Brignolo)

***** 懇親会 *****

時間の都合で 藤沢嵐子さんの CDお楽しみ下さい

藤沢嵐子さんの足跡

ラティーナ誌 10月号より抜粋

- 1949年6月 「原孝太郎と東京六重奏団」の歌手としてNHKラジオ「バンド・タイム」に出演
ラジオ初出演
- 1950年1月 オルケスタ・ティピカ東京の歌手としてNHK「きらめクリズム」に出演
テレビ初出演
- 1950年9月 東京日比谷公会堂のコンサートに出演 早川・藤沢でのステージ初共演
- 1951年12月 日本ビクターで「アディオス パンパミーア」を録音
タンゴ歌手としてレコード・デビュー
- 1953年8月 アルゼンチンへ初旅行 以後1954年 1956年 1964年 と中南米へ演奏旅行
- 1957年12月 NHK紅白歌合戦に出場 以後 1961年迄5回連続出場
- 1970年 早川真平とオルケスタ・ティピカ東京 解散
- 1971年7月 日比谷公会堂で行われた「これがタンゴだ」に出演
以後約10年ステージから離れる
- 1980年12月 志賀清とタンゴ・モデルノスの中野サンプラザ公演で10年ぶりに出演
本格的に活動を再開
- 1984年 早川真平 死去（享年 70歳）
- 1991年9月 小松真知子とタンゴクリスタルでゲスト出演 この出演を最後に引退
- 2013年8月22日 藤沢嵐子 死去（享年 88歳）



懇親会風景

(写真撮影：吉澤義郎)

第13回 「中部リンコン・デ・タンゴ」レポート

丹羽 宏

第13回「中部リンコン・デ・タンゴ」（以降、中部リンコンと略記）は11月10日（日）13時より、前回に続いて西村秀人理事を迎えて、三重県は四日市市内の「スワ・セントラル・パーキング」2階大ホールで開催した。当日の中部地方は朝は霧雨、後半晴れ。静岡県の光廣会員、大阪の吉澤会員をはじめ、初参加の神奈川の廣嶋さん、愛知県など2時間を要する隔地から参加された方々も含め44名（会員10名、ビジター34名）が会場を埋めた。

前回同様、各種親睦団体から受けた協力の効果は大きかった。又、日頃から交流を深めているジャズ・ライブハウスからの参加もあった。

プログラムのテーマについてはバランスが取れていて、タンゴを広い観点から楽しみ、理解出来たという意見が寄せられた。

【第1部】 《SPレコードの輝き》

ゲスト解説者 澤田義寛さん

希観原盤による「ロドルフォ・シアマレーラ」作品集

「地域で活躍するタンゴ・ファン」による解説担当は、前回に続いて名張市の澤田義寛さん（非会員）にゲスト解説者をお願いした。インフラ企業向けの精機製造会社の経営と併せて、関西～中部地方のタンゴ同好会の解説の顔として活躍しておられる。《中部サロン・デ・タンゴ》のSP解説部門長でもある。

今回は豊富なSP音源コレクションの中から、日本で人気のある作曲家「ロドルフォ・シアマレーラ」の作品を8曲厳選された。そして、関西弁が炸裂する元気な解説となった。

最初は意外に綺麗な再生音のエレクトラ盤が登場した。又、曲がいい。「フランシスコ・プラカニコ楽団」の名演「ノ・テ・エンガーニェス・コラソン」である。「シアマレーラ」の1926年の処女作で出世作ともなった曲。「F.プラカニコ」の録音は作曲されてから、そう遠くない時期であろう。

焙り出されるこの“感傷”感は何なのだろう。作曲者と演奏者のシンクロニスムに由来するのか。

2曲目は1928年の作品で「チェ、バルトーロ」。同年に「ファン マグリオ “パチョ” 楽団」は歌詞には見向きもせずインストで録音したが、名盤と言えよう。

3曲目は、「ファン・ギド楽団」のインスト演奏で「アセロ・ポル・ラ・ビエハ（お母さんの為に）」切なさがいつまでも柵引く演奏だ。第12回の「フランシスコ・プラカニコ作品集」では「母の日」とラップさせて「マイサニ」の「マードレ（母）」が登場したが、今回は如何な思いが込められての選曲だろうか。

続いての3曲は、解説者の嗜好を反映して、歌の名曲が3曲ズラッと並んだ。「ノ・キエロ・ベルテ・ジョラル」を「アグスティン・マガルディ」が、「アンダーテ〈ノ・テ・バジャス〉」を「リベルタ・ラマルケ」が、「ビエハ・レコバ」を「カルロス・ガルデル」が夫々歌うという趣向である。これらは1930年代に作曲されたもので、歌手たちの好調な時期と符合して楽しめた。

次は、1929年の作品で「ムカミータ（お手伝いさん）」あまり目立たない作品ながら、1929年のDisco Nacional 第4位入選曲である。この頃に「フランシスコ・ロムート楽団」がオデオン社に録音

していたことは有難い。因みに、「フランシスコ・カナロ楽団」は「チャルロ」を、「ロベルト・フィルポ楽団」は「テオフィロ・イバニェス」をエストリビジョにして録音している。

最後は作曲の年、1928年に「マイサニ」の歌で大ヒットした「ジェバテロ・トード」を、「オスバルド・フレセド楽団」も「エルネスト・ファマ」のエストリビジョで大いに存在感を高めた。SP解説に感謝。

【第2部】 《生演奏》 中部で活躍する「タンゴ・プラティーノ4重奏団」

当地域のタンゴ・ファン、特にライブ・ファンからの要請を受けて、「中部リンコン」3度目の登場となった。今回初めて定例のクアルテート・メンバーが勢揃いしてお披露目演奏となった。リズムを叩き出すポジションのコントラバス奏者、会員の鈴木克比古さんが他グループでの活動や体調の問題もあって、中部リンコンに錦を飾れない状況が続き今日に至った為である。という訳で、特別な価値ある70分演奏会となった。

12曲がプログラムに登録されていたが、この内9曲は前回と重複していなかった。このあたりはライブ・ファンを大切にしているリーダー、田中博澄さんの心意気が表われていて嬉しかった。

今回はプログラム配布時点でサプライズを興す試みを、田中リーダーと事前相談し画策した。つまり、「中部サロン・デ・タンゴ月例会」でタンゴ歌唱のレッスンを取り仕切っている、名古屋のタンゴ（元シャンソン）歌手、岡田雅代さんが「タンゴ・プラティーノ」のサポートを得て、「カミニート」と「ラ・モローチャ」を熱唱した。十分な音合せ時間を持たない中でのライブに感謝。

なお、器楽演奏で会場の拍手が多かったのは、近年あまり演奏されることが少なくなった「カナロ」、「ドン・オルランド」、「ドン・パシフィコ」という50～60年代に楽しんだ花形曲である。

この地域に根ざした演奏グループであり、加えて鈴木会員の復活演奏ともなったことで、場内から声援が飛び、熱く和やかなライブを楽しんだ。80歳代後半の田中さん、いつ迄もお元気で。

【第3部】 《会員によるレコード・映像コンサート》 ブエノスアイレス&モンテビデオの最新情報～ 国際コロキウム「タンゴ、昨日と今日」に参加して 理事 西村秀人さん

解説頂いた「西村秀人」さんは、9月27日から30日に掛けてウルグアイはモンテビデオ市で開催された《国際コロキウム》に、名古屋大学からの短期出張で参加された。東洋からは只1人の参加者であった。

早速、第13回「中部リンコン」プログラムの一環として、ラ・プラタ地域で入手されたタンゴ情報に加えてコロキウム講演会後に催されたコンサート映像を開陳して頂くことになった。

パート1 ブエノスアイレス&モンテビデオ最新アルバム紹介

国内未入荷品もあると思われる音源（CD）6種類から1曲づつを選び紹介・解説された。

まずは、ウルグアイのアルバムから『GOT@N. UY』（ゴタン・ウー・イー）という珍しいネーミングで活動する「パブロ・カンポラ」のピアノと「フリオ・コベリ」による2重奏で「メ・グスタ・バイラール・ミロンガ」（ミロンガを踊るのが好き）を聴いた。今風と古典風が寄り添うような楽しい演奏。なお、このアルバムの特異点は演奏曲が全てウルグアイ出身のタンゴ人の作品を選んでいる

という事である。

2曲目は、「ホセ・プグリア（ピアノ）とフリオ・コベリ（ギター）」の2重奏で、「ロス・マレアーダス（酔いどれたち）」。「ホセ・プグリア」は嘗てバンドネオンの「エドガルド・ペドロサ」と共に、「プグリア＝ペドロサ楽団」を結成して、「セサル・サニョーリ」と並ぶウルグアイ屈指の質の高い演奏で活躍していた。

3曲目は「キンテート・デ・タンゴ“ラ・グレラ”」の演奏する「マイポ」。アコスティック・ギターを加えた標準的な若手の5重奏だが、すでに10年余りの演奏キャリアを持っているとのこと。伝統と現代の中庸を行くスタイルで演奏する「マイポ」は重からず軽からずで聴き易かった。2013年制作。

次は、オーストラリア人で「オルケスタ・エスクエラ・デ・タンゴ」出身の「マギー・ファーガソン」が率いる5重奏団。彼女はバイオリンとバンドネオンのバイリンガル奏者で、修行したブエノスアイレスに戻ってアルバム作りを行ったという。「タンゴ学校」時代のレパートリーから小編成にリアレンジしての「ミロンゲーロ・ピエホ」を聴いた。アンドレス・リネツキーやイグナシオ・パウチャウスキーがメンバーに入って協力。2012年制作。

続いては今、タンゴ通に人気のライブ・ハウス“カフェ・ビニロ”で収録された「オルケスタ・ビクトリア」による「ラ・タブラーダ」。会場の熱気も伝わってくる演奏である。タンゴには縁遠いと思われるバス・クラリネットを上手く取り込んだ演奏が結構楽しい。オラシオ・サルガンを思い出すファンもいるかも。2013年制作。

パート1の最後は「カルロス・ディ・サルリ」スタイルを一寸拝借してデビューした「オルケスタ・ティピカ・ミステリオサ」のアルバムから名曲「ミ・ドロール」を聴いた。「ディ・サルリ」がレパートリーにしなかった曲をこういう形で聴くことが出来るのは大変有難いことである。2013年制作。

パート2 国際コロキウム「タンゴ、昨日と今日」のコンサートより

ここからは国際コロキアムのカリキュラムに則った講演終了後に、「SODREサラ・バルソ・ホール」へ場を移して行われたコンサートの中から、「リンコン」向けの映像を鑑賞した。特別許可を得ての撮影とのこと。

まずはウルグアイのグループで、「フリオ・コベリ」のギターで歌う「フランシスコ・ファルコ」。歌詞を噛み締めながら「Montevideo, Vos y Yo, モンテビデオ、お前と俺」を淡々と歌う。嘗ての「ルイス・カルデイ」がお好きなファンにはお楽しみシーンであろう。

次はウルグアイの若者グループ、ギター4重奏と歌の「クアルテート・リカコサ」による「La Fulana、ラ・フラーナ」。ギター4台での闊達な演奏は中々迫力がある。

3番目は「キンテート・ラ・ムーファ」によるアローラス＝フィルポの「花火」と続く。次いで日本にも紹介されて名の知られたウルグアイのバンドネオン奏者「ネストル・バス」が加わる「アルバロ・アゴピアン6重奏団」で「ラ・ボルドーナ」と「ナウティコ・クルブ」の2曲。後者は「セサル・サニョーリ」の作品。何れも統制のとれた格調高い演奏だ。続いて、当日の講演者でありピアノ奏者である「フリアン・ペラルタ」が指揮する「セステート・アスティジェーロ」はアルゼンチンから参加して、「Torque、トルケ」という重厚な現代タンゴを演奏した。

さて、本日の「中部リンコン」のボーナス・トラック、解説者がブエノスアイレスに渡って収録したのはご存知「Orquesta Escuela de Tango, タンゴ学校オーケストラ」のリハーサル映像。「ビクトル・ラバジェン」が指揮しながら合図を送っているのは、「エル・アンダリエゴ」の演奏。大勢の生徒たちの教習光景は頼もしい限り。

この後、終了時間まで更にボーナス映像、「タンゴ学校」の「ラ・ジュンバ」を観て聴いて、様々なタンゴの享樂の締めとした。

こうして最新リリースのCDを解説(寧ろ講義に近い)と共に聴きながら、そして「ラプラタ・タンゴ」のライブの映像を観ると、活き活きした今の《タンゴ》の動向がよく理解出来た。

以上、【第1部】のSPレトロ・タンゴ、【第2部】の地域の生演奏に、【第3部】の現地情報と対比させながら味わうという実に贅沢な至福の4時間を過ごすことが出来た。

【リンコン懇親会】

プログラム終了後は「欧風チキン・サロン」に場を移してのリンコン懇親となった。光廣会員(磐田市)はじめ、来泗には2時間以上も要する中部地域の参加者、本日の解説・演奏・歌・スタッフの皆さんも含めて15名がフリー・ドリンクで実に愉快的ひと時を過ごした。



司会進行役



ゲスト解説者：澤田義寛氏



タンゴ・プラチーノ4重奏&歌手：岡田雅代



復活した会員 鈴木克比古氏



解説者：西村秀人氏



次回の引継ぎの2人



初回からの開催スタッフと共に



会場内

(写真撮影：吉澤義郎)

<プログラム>

【第1部】 <Sレコードの輝き>

13:05-14:05

**希少原盤による「ロドルフォ・シアマレーラ」作品集
Sレコード蒐集家 名張市 澤田義寛さん**

1. NO TE ENGAÑES CORAZÓN、心よ騙されるな <作曲 1926 年>
ORQUESTA TÍPICA FRANCISCO PRAGÁNICO<Electra-733>
(フランシスコ・プラカニコ楽団)
2. CHE, BARTOLO、ねえバルト一口君 <作曲 1928 年>
ORQUESTA TÍPICA JUAN MAGLIO“PACHO”<Odeon-7592>
(フアン・マグリオ・パチョ楽団)
3. HACELO POR LA VIEJA、お袋のために <作曲 1928 年>
JUAN GUIDO Y SU ORQUESTA<Victor-47071>
(フアン・ギド楽団)
4. NO QUIERO VERTE LLORAR、君が泣くのを見たくない <作曲 1937 年>
AGUSTÍN MAGALDI CON ORQUESTA <Victor-38208>
(歌:アグスティン・マガルディと楽団)
5. ANDATE (NO TE VAYAS)、出て行って <行かないで> <作曲 1933 年>
LIBERTAD LAMARQUE CON ORQUESTA<Victor -37406>
(歌:リベルタ・ラマルケと楽団)
6. VIEJA RECOVA、哀れな老婆 <作曲 1930 年>
CARLOS GARDEL CON GUITARRAS<Odeon-18812>
(歌:カルロス・ガルデルとギターたち)
7. MUCAMITA、お手伝いさん <作曲 1929 年>
ORQUESTA TÍPICA FRANCISCO LOMUTO<Odeon-7828>
(フランシスコ・ロムート楽団)
8. LLEVATELO TODO、全部持って行け <作曲 1928 年>
ORQUESTA TÍPICA OSVALDO FRESEDO<Odeon-5254>
(オスバルド・フレセド楽団)



TodoTango より



【第2部】 生演奏 : TANGO PLATINO CUARTETO 14:10-15:20
タンゴ・プラティーノ4重奏団〈名古屋市〉

田中 博澄〜指揮・バンドネオン

西谷 徳子〜ピアノ

斉藤 幸枝〜バイオリン

鈴木 克比古〈会員〉〜コントラバス

《演奏者の都合により曲目は変更する場合があります》

1. CANARO、カナロ 〈José Martínez〉
2. CRIOLLA LINDA、麗しのクリオージャ 〈V. Gorrese=B. Germino〉
3. JUEVES、木曜日 〈R. Rossi=U. Toranzo〉
4. CAMINITO、カミニート/小径 〈J. de Dios Filiberto—G. Coria Peñaloza〉〜歌手:岡田雅代
5. DON ORLANDO、ドン・オルランド 〈H. Varela〉
6. DON PACÍFICO、ドン・パシフィコ 〈A. de Bassi〉
7. EL CHOCLO、エル・チョコロ 〈A. Villoldo〉
8. FELICIA、フェリシア 〈E. Saborido〉
9. LA MOROCHA、ラ・モローチャ/褐色肌の娘〈E. Saborido—A. Villoldo〉〜歌手:岡田雅代
10. CORAZÓN DE ORO、黄金の心 〈Fco. Canaro〉 [VALS]
11. QUEJAS DE BANDONEÓN、バンドネオンの嘆き 〈J. de Dios Filiberto〉
12. EL INTERNADO、インターン医学生 〈Fco. Canaro〉

—————ステージ整備&懇親・休憩 約20分間—————

【第3部】 会員によるレコード・映像コンサート 15:40-17:00

ブエノスアイレス&モンテビデオ「最新情報」〜

国際コロキウム「タンゴ 昨日と今日」に参加して

日本タンゴ・アカデミー理事 西村 秀人

パート1 ブエノスアイレス&モンテビデオ最新アルバム紹介

1. ME GUSTA BAILAR MILONGA(ミロンガを踊るのが好き)(Pintín Castellanos)
/ GOT@N.UY ゴタン・ウー・イー(ギター=パブロ・カンポラ、ピアノ=ゴンサロ・グラビーナ)
CD: Bizarro 4887-2 “Tango del Uruguay” (2011)
2. LOS MAREADOS(酔いどれたち)(Juan Carlos Cobián)

/ JOSÉ PUGLIA & JULIO COBELLI ホセ・プグリア(ピアノ) & フリオ・コベリ(ギター)

CD: Sondor 1205-2 “Tangos de siempre” (2006)

3. MAIPO (マイポ) (Eduardo Arolas)

/ QUINTETO DE TANGO “LA GRELA” キンテート・デ・タンゴ ラ・グレラ

CD: No number “La reina del festín” (2013)

4. MILONGUERO VIEJO (ミロンゲーロ・ビエホ) (Carlos Di Sarli)

/ MAGGIE FERGUSON (Quinteto) マギー・ファーガソン (A.リネツキー、I.バルチャウスキー他)

CD: No number “Tango Project Loca Bohemia” (2012)

5. LA TABLADA (ラ・タブラーダ) (Francisco Canaro) / ORQUESTA VICTORIA オルケスタ・ビクトリア

CD: Café Vinilo 1013 “Orquesta Victoria en vivo en Café Vinilo” (2013)

6. MI DOLOR (ミ・ドロール) (Carlos Marcucci)

/ ORQUESTA TÍPICA MISTERIOSA BUENOS AIRES オルケスタ・ティピカ・ミステリオーサ・ブエノスアイレス、
CD: PAT 306-218 “Una noche en la milonga” (2013)



Montevideo : PaPiTaMuSiCa より



Cuarteto Ricacosa : PaPiTaMuSiCa より

パート2 国際コロキウム「タンゴ 昨日と今日」コンサートより

1. MONTEVIDEO, VOS Y YO (モンテビデオ、おまえと俺) (Miguel Ángel Pereyra)

/ FRANCISCO FALCO & JULIO COBELLI フランシスコ・ファルコ(歌)、フリオ・コベリ(ギター伴奏)

2. LA FULANA (ラ・フラーナ) (Alberto Mastra) / CUARTETO RICACOSA

クアルテート・リカコサ(ギター四重奏 & 歌)

3. FUEGOS ARTIFICIALES (花火) (Eduardo Arolas-Roberto Firpo)

/ QUINTETO LA MUFA キンテート・ラ・ムーファ

4. LA BORDONA (ラ・ボルドーナ) (Emilio Balcarce)

5. NÁUTICO CLUB (ナウティコ・クラブ) (César Zagnoli)

/ SEXTETO DE ÁLVARO HAGOPIÁN アルバロ・アゴピアン六重奏団(バンドネオン: ネストル・バス)

6. TORQUE (トルケ) (Mariano González Caló)

/ SEXTETO ASTILLERO アスティジェーロ(ピアノ・指揮: フリアン・ペラルタ)

7.《Bonus Track》 EL ANDARIEGO (エル・アンドリエゴ) (Alfredo J. Gobbi)

/ ORQUESTA ESCUELA DE TANGO タンゴ学校オーケストラ(指揮: ビクトル・ラバジエン<リハーサル>)

第3回 日本タンゴ・アカデミー ミロンガ・パーティー



西川 薫

日本タンゴ・アカデミー（以下NTA）がー昨年10月に初めて企画したミロンガ・パーティーの経験を踏まえ開催した昨年の第2回目は好評裡に幕を閉じたが、今年も抜けるような秋晴れ（明治8年の統計開始以来最も遅い真夏日の記録更新）のなか、10月12日に昨年と同じ千代田区一番町「いきいきプラザ一番町」のカスケード・ホールで開催された。

当日は行楽シーズン3連休の初日であり、又間の悪いことに都内周辺の小学校運動会と重なったため、可愛いお孫さん持ちの年配者はそちらの応援にシフトしたことも影響してか、前回と比べて若干参加人数が減少した（参加者150名、そのうち演奏を聴く人51名）。それでも東京・近隣エリアの方々に限らず、函館、宇都宮、四日市、大阪など遠方からの参加者もあり、主催者側にとっては嬉しいことであった。

過去2回のレポートはNTA会友の宮本氏がタンゴ・バイレ愛好家の透徹した目と耳で活写されたが、筆者はタンゴ・バイレはおろかダンスに関する素養も知識も持ち合わせていないため、表面をなぞる感想しか述べる事が出来ない事を冒頭に白状しておきます。

出演者：

演奏 平田耕治 (bn) クアルテート + 1
那須亜紀子 (vn)、加畑嶺 (pf)、
木田浩卓 (cb)、河内敏昭 (vn, g)

ダンス・デモ GYU & 夏美れい

司 会：飯塚久夫 (NTA副会長)

＜タンゴ・バイレ＞

提供音源はCD、ライブ（第一部）、CD、ライブ（第二部）、CDの順で定刻より若干遅れてスタートしたようだ（ようだ、というのはエントランス・ホールで来場者の誘導、出演者控え室でデモ・バイラリーナとの最終確認などでスタート時のミロンガ・フロアの状況を把握していなかった所為である）。今回のCD選曲者はNTA会員の齋藤富士郎、杉山滋一、佐藤進3氏。会場の各所に貼り出された49曲のうちモダン・タンゴは1曲のみで、曲名、演奏者名から類推するに“踊りやすさ”に腐心した三者三様の選曲と思える。フロアに流れた曲目は日頃タンゴを聴き馴染んでいる愛好家にすればスタンダード曲のオン・パレードだが、踊る側からはもっと耳馴染みの有名曲を配列して貰いたかったという声も上がっている。



時々会場を覗いて感じた印象を述べてみよう。毎回タンゴ・バイレに関しては年季の入った方々が多く、今回も広いフロアを有効に使いリラックスした表情でステップを踏んでいる。3時間という長レースで時間的にゆとりがある



ことで、踊りの合間にロビーで友人達と語ったりドリンクで喉を潤すなど、それぞれのスタイルで時間と空間を愉しんでいるようだ。ただ、見渡して気になったのは一人参加の来場者が多かったように感じたことである。パレハ(pareja〜カップル) やグループで参加された方々はバイレの相手の心配は皆無であろうが、一人参加の、特に女性は果たしてバイレを堪能出来たであろうか。またタンゴを聴くだけの愛好家にしてもそうだが、バイレ年齢も高齢化しているようだ。筆者の見た限り20代と覚しき参加者は男女合わせて2名しか視野に入らなかった。カラオケ・ルームに出入りするような気軽さでバイレに足を向ける若い年代層が出て来るのはいつのことだろうか。

＜ライブ演奏について＞

平田耕治の演奏を間近で聴いた＜聴く人席＞のタンゴ好きにはたまらない時間であったろう。目の前で繰り広げられる演奏は広いコンサートホールでは味わえない臨場感だ。小編成であるが故の各楽器の聴かせどころがたっぷりと盛り込まれた贅沢なパフォーマンスはアレンジの妙と鍛え上げられた技術でタンゴの魅力を聴かせてくれた。1曲目はダンサリン、2曲目はロカ、ところがその2曲が終わるまでフロアにはひと組たりとも進み出ない。会場の全員が演奏を凝視しているだけだ。2曲目の途中で「なぜだ、なぜ踊らない？」と不安に駆られた。理

由は終段で述べましょう。

さて、2曲目が終わってリーダーの平田耕治がマイクを持って立ち上がった。“皆さん、今日はミロンガということで踊りがメインだそうです。どうぞ踊って下さい”のアナウンスで「ラブニャラーダ」がスタートした。ここで参加者が堰を切ったようにフロアに進み、演奏をバックに華やかなバイレが始まった。そう、そうでなくちゃいけない。



リーダーは選曲に大いに悩んだと云う。一方で“ダンスは出来ない、ひたすらタンゴを聴くのが好き”な愛好家と、片や“タンゴの曲や演奏家についてはあまり知らない、ただ一定のリズムで奏される曲で踊るのが好き”というタンゴダンス愛好家の両者を同時に満足させる演出は土台無理な話だ。この相反するテーマをどのように整理するか、演奏する側にとっては本当に頭の痛い作業であろう。フロアから“踊るのが難しい”という溜息が2、3上がったことも確かだ。



第二部では途中からバイオリンとギターで河

内敏昭が加わった。耳をそばだてたのはミロンガではまず演奏される機会がないfolkloreのサンバ（Zamba de mi esperanza～メンドーサ州の大ぶどう園主が作詞作曲）を採り上げたことだ。

サンバはアルゼンチンのfolkloreを代表する音楽形式で、6/8拍子のリズムに乗り男女がハンカチを振りながら踊り、終わりに男性が女性の肩にハンカチをかける、すなわち女性への求愛がダンス化されたもので、アルゼンチンでは最も愛されている舞曲だ。ところがフロアの踊り手は皆タンゴのステップで踊っている。見ていて違和感を覚えたがこのことは仕方が無い。この光景は平田にとっても想定外だったようで、曲が終わってからサンバの舞踏について短いコメントを加えていた。

この日の曲目構成は古いもので「ラ・ラーチャ」「心の底から」「ロカ」、ちょっと時代が進んで「首の差で」「ラ・プニャラーダ」などで、それ以外は50年代以降ディ・サルリ、プラサ、スタンポーニ、ピアソラと平田及びメンバーによる作品が配列されたが、オリジナル・アレンジを含め若手平田の拘りを感じる構成であった。アンコールは工夫を凝らした「ラ・クンパルシータ」で鳴り止まない拍手のなか終演した。

<ダンス・デモ>

GYU & REIは第一回目のミロンガに続き2度目の登場である。GYUはLAMとのコンビでタンゴダンス アジア選手権2007でのステージ部門チャンピオンに輝いた第一人者。まずは「Qué falta que me hacés（君なくて）～M. カロー/A. ポデスタ」の演奏でサロン・スタイルをデモる。広いフロアを存分に使って離れなれになった男女間の心の葛藤を切なく表現した。一つ一つの所作が大きく、静と動の対比の妙は流石で、参会者はまさに寂として声なしで

二人の演舞に魅入っている。



2曲目はステージ・ダンスで「P'a que te oigan bandoneón（バンドネオンを聴かせるために～J. ハーゲル・セステート）」。演奏自体は冒頭バンドネオンによるカデンツァから思わせぶりにラルゴ（ゆるやか）な旋律に入った後一転してア・テンポ（もとの早さで）に戻り、終局部はスピード感溢れる華やかなバンドネオンの見せ所で締め括るが、踊り手にとって高度な技術・振り付けを要求される難解な曲を選んだものである。広い空間を伸び伸びと使って躍動するダンスは切れ味鋭い刃のようなステップと躍動感で圧倒的な存在感を見せつけた。



予定ではこの2曲だけの筈であったが、アンコールに応じてミロンガを披露してくれた。バックは平田耕治クアルテートで古い古い（110年以上昔の）「La cara de la luna（お月さんの顔）」。バンドネオン黎明期のミロンガ色を遺した2/2拍子のこの曲を二人は即興・ぶっつけ本番（事前練習なし）で軽妙・ひょうきんな足捌きで踊って魅せた。

思うにプロの強みは歌詞の意味、曲の背景をしっかりと咀嚼しているところにある。それが今回の選曲面でも通俗的な曲に陥る陳腐さと一線を画すことになっているのではないだろうか。加えてこのふたりは体格的にも恵まれている。GYUは180cmを超える長身だし、夏美れいも170cm近い。外国に出ても見劣りしない恵まれた体躯と運動能力の高さは何よりの武器だ。会場からは鳴り止まぬ拍手がいつまでも続いた。

<種明かし>

バイレの開始に先立って12時過ぎから当会役員のための「バイレ超々入門?!」が大久保江梨（当会員）さんによる特訓で実施された。役員のうち踊れる人はひとりだけという現状を打破しようとの企画から実現したらしいが、彼女のレジュメまで用意し噛んで含めるような実技指導も受ける側は超高齢者集団とあって、呑み込みに四苦八苦の情景を展開していた。ライブ演奏の冒頭に報告した2曲終わっても誰ひとりフロアへ踏み出さなかった理由は、“即席レッスンを受けた島崎会長が早速演奏をバックに特訓の成果を披露する”という情報が実しやかに参会者の間に広がった結果である。実際はそうならなかったが、次回はきっと軽やかなステップを披露してくれることでしょう。大久保さん有り難うございました。



<終わりに>

会場の雰囲気彩りを添えるという意味合いではライブ演奏に歌が入ってもいいだろう。往年の歌手アルベルト・カスティージョはミロンガやカルナバルで来会者を楽しくフロアに誘う、乗せ上手な歌い手で圧倒的な人気だったという。次回はキャリアを積んだ歌手にも登場願ひ、軽妙洒脱なトークと熟練の歌い口で踊り手達を乗せて貰いたいものだ。

本場ブエノスでのミロンガはタンゴ演奏家によるライブが当たり前のようだが、我が国では一般のプロ奏者の演奏をバックに踊るというのは限られた機会、環境に恵まれたエリアでしか経験できないだろう。そういう視点で考えれば、当日参加したダンス愛好家の皆さんは倅せて心豊かな数刻に浸ったことと思います。

(2013年10月23日)



(写真撮影：吉澤義郎)

《神戸発・上田・山本タンゴ写真館(12)》

藤澤嵐子追悼記念

—藤澤嵐子&志賀 清とロス・モデルノス—

<平成元年1月11日 姫路中南米音楽愛好会創立35周年記念コンサートから>

写真提供：山本 雅生氏





佐藤 光男 (横浜市) さん

聞き手 西川 薫



西川 佐藤さんには様々な会合でお目にかかっておりますが、親しくお話を伺う機会は今回が初めてでございます。宜しくお願い致します。

佐藤 こちらこそ宜しくお願いします。

西川 ところでアカデミー入会はどのような経緯からでしょうか。

佐藤 所属しております「横浜ポルテナ音楽同好会」(横ポル)で一緒に杉山滋一さんが、会設立の構想から設立に至るまで、ポイント、ポイントでお話下さいました。おかげですななりと発足当初から入会できました。

西川 そういう伏線があったんですか。皆さん横の連帯感がとても強いんですね。では早速自己紹介からお伺いしましょう。先ずご出身は？

<時代の変化激しい故郷本郷>

佐藤 東京です。文京区湯島です。東京は20代半ば迄過ごしました。今では横浜の方がずっと長くなりました。少年時代、あたり近所をふらつき楽しい時を過ごしましたが、今はあ

まり行ってみようとは思いません。これもまた「ふるさとは遠きに在りて想うもの」ですね。最近、福川靖彦さんのご実家が近くであることを知りました。

西川 明治以降錚々たる文人墨客が大勢足跡を遺した文学の香り馥郁たるエリアですね。お生まれになった時代の社会情勢とか土地の環境などはどんな…

佐藤 今は知りませんが、湯島は神田の隣ですが、案外物静かな土地柄なんです。それに子供のころは戦中、戦後でしたから華やいだ雰囲気はあまり知りません。家は焼かれ、疎開は厳しい経験でした。友達はちりぢりばらばら、みんないつも腹を減らしていました。だから、どこそこ生まれの感覚は乏しく、精神的には「根なし草」ですよ。

西川 わたしも終戦後の数年は就学前でしたが、碌な物は食べていないという記憶だけは脳裏に焼き付いております。これはもう怨念です(笑い)。それでは本筋に入りますが、タンゴを聴き始めたキッカケはなんのでしょうか？

<タンゴとの遭遇>

佐藤 中学・高校の頃、いろんな音楽を聴いていました。一番多く聴いたのはジャズ、それからポピュラー、ラテン、クラシック。そうした中にタンゴも入っていました。タンゴと意識して聴いた覚えはない。だから特別のきっかけというものはないんです。むしろその後、タンゴに近づいて行った段階をお話した方が良いのかもしれない。

西川 そうですか、是非その辺りを…

佐藤 一つ目。誰それのあの曲と意識したのは、

カラベリの「フェリシア」です。これは9月に、リンコン・デ・タンゴでお話しました。出たばかりのダリエソの「フェリシア」のSPを持っていました。未だ戸棚の奥にあるかもしれません。あるところで、カラベリのを聴いたんです。あれとは違う。そのレコードの楽団名をしっかりと頭に入れました。タンゴの曲で、違う楽団を聴きくらべた最初です。それから数年、いろいろな機会をとらえてタンゴに熱中しましたが、やがてふつつりと音楽から離れました。身を入れて音楽を聴くような生活環境ではなくなりました。

二ツ目。あるとき横浜の街をぶらついて、一軒のレコード屋に入りました。店の天井から吊るした大きな紙に「ロベルト・フィルポの追悼盤出る」と書かれた広告が目に入りました。フィルポも亡くなったか、そう思いながら3枚組のアルバムを眺めました。帯に書かれた曲目に「ディビサ・ブンソ」とあるのが目に入りました。以前ラジオでこの曲を聞いて、特徴あるこの曲のリズムが、メロディーが頭に残っていました。自然に、このアルバムを掴んで売り場に向かいました。今思うとそれは昭和44年のことです。10年ぶりくらいにタンゴとの接点を持ったことになりま。それでも、その後15年くらいは、時に深夜一人で酒を友にレコードを聴く程度の生活が続きます。

三ツ目。横ポルのほんの初期、岩崎永一さんがフランシスコ・カナロの特集だったかをおやりになった。ショッキングでした。その頃、カナロは東芝から組アルバムが出たりしてよく聴いていました。好きな楽団の一、二に入る人です。でも岩崎さんが聞かせて下さったのは強烈極まりなし、筋金入り、強持ての感を深くしました。「フェア」や「サバド・イングレス」が記憶に残っています。きわめて印象に残るコンサートでした。

西川 う～ん、ビクターは電気録音黎明期から30年代初めの演奏を続々と紹介しましたが、東芝は冷淡でしたね。五大楽団なんか全然陽の目を見ない。さて、佐藤さんは今話に出た

横浜ポルテニヤ音楽同好会の会長さんですから、この際会のご紹介をお願いします。

<横浜ポルテニヤ音楽同好会>

佐藤 横ポルには当初から入会しました。設立は昭和61年1月です。「一騎当千の人が大勢」というのが当時の強い印象です。第1回のレココンのプログラムが手元にありますが、そこに名を連ねる方々を見れば当時の勢いがかかります。杉本孝行さん、小林一行さん、斉藤賢治さん、斉藤八郎さん、西村秀人さん、小林謙一さん、大森敏弘さんがコメントしていました。殆どの方が、今なおそれぞれのお立場で、それぞれの道を歩んでおられる。花岡みと志さんは事務局長的役割もされていて、これらの人たちを実質的にコントロールされていました。



横浜ポルテニヤ音楽同好会 例会風景

個人名が出るお話になりましたが、いわば群雄割拠で、これが横ポルが協議制をとった所以です。いまだに続いています。

タンゴファンも大きく分けてレコード派とライブ派がありますね。人によってそのウェイトが異なる。以前から横ポルは双方をバランス良く取り入れてプログラムを作ってきたと思います。ただ、これはしばらく前までの話です。それまでライブを大小、年に1回ずつ行ってきました。しかし、近頃生の音楽は方々で聴けますし、会員の人数が次第に減ってきたこともあり、私たちのような団体が催行出来ることではなくなってきた。5年ほど前から止むなくライブを諦めました。当然不満も出てきました。

コンサートの企画・立案、運営には大勢の人の力が必要です。当会はこの点でいま、やや劣勢にあります。そんな中、アカデミーの方々には本当にいろいろご支援をいただきました。これからもよろしくと、この場を借りてお願い申し上げます。

西川 その点、杉山さんや編集長の齋藤さん、勿論他の皆さんも含めてですが相互補完・互助の考えで歩調を合わせられたらいいですね。では核心に迫りますが、お好みはどのような傾向を、またその理由は？

<分け隔てなく聴くように>

佐藤 わたしがタンゴに親しんだ経過は前に申し上げました。軽い気持ちでタンゴを聞き始めましたが、次第に深みにはまったということでしょうか。ひとつの大きなジャンプが岩崎さんのカナロだったような気がします。20年代のオデオン五大楽団などはわたしの心の中に、いつの間にかしっかりと定着したようです。40、50年代の並み居る音楽家や歌手も聴くに従い段々と身近に感じるようになりました。タンゴ全体を見て減法好きというものはありません。回を重ねて耳にするうち次第に親しみを覚えるようになったというのが正直なところですよ。

大岩祥浩さん、馬場明人さんの出された私家盤はまことに貴重でした。タンゴの世界の骨格と深みを教えられたわけです。お二人は篤志家だと思っています。大岩さんには、お宅でのコンサートに長い間伺いました。実に貴重な、楽しい時間でした。また、横ポルには毎年欠かさずお出で下さいました。或る時、コンサート後の会の席で、LPからCDに切り替えざるを得ないが、その音楽性能、信頼性、保存・耐久性がいま一つ心配だという趣旨のお話をされていたことを昨日のように思い出します。

レコードにまつわる別の話。或る時、カナロの「トラゴ・アマルゴ」の入ったAMPのLP (TC 1010) を買いそびれた私に、杉山さんが「あったよ」と神保町から電話を下さ

いました。CDで復刻される暫く前のことです。あの電話は本当にうれしかった。そんなことも思い出します。

西川 LPからCDへの変遷時、音質面で懸念されたエピソードなどとても興味深いお話です。では、歌手についても語って下さい。

佐藤 フリオ・ソーサは好きですね。楽団付きの時も、ソロ歌手になってからも、早死にしたせいか、生きのいい時のものばかり。いつも声にハリがあって明快です。「シルバンド」「マダム・イボンヌ」「カンバラ・チェ」、雰囲気聴いてしまいます。同じ意味で安定感のあるエドムンド・リベロ。この人は実にうまい歌い方をする人だと思います。年をとってというか、後の時代に歌が妙に変わった人、あまり好きではありません。

反対に、女性歌手は年増の声の方もいい。若い時のシモーネは、よく表現されるように鈴を転がすようで、とてもいいと思う。けれど、歌手生活最後にHyRに吹き込んだ24曲は負けず劣らずと思います。

西川 HyRのシモーネを高評価する方は大勢おられますね。これなどは愛聴盤に…？

佐藤 申し上げたようなわけですから、愛聴盤と言うのは極めて苦手なのです。よくリクエストとか何曲選と言うのを仰せつかることがあります。本当のところ、これは大の苦手で



【SERIE ROMANTICA VOL.2 Tiempos Viejos】
フランシスコ・カナロ discs A.M.P. TC 1010

す。これまでどちらかという、漫然とタンゴを聞いてきました。ほとんどまいったというのであれば先に申し上げたカナロの「トラゴ・アマルゴ」などです。

時にふとストーンと腑に落ちる曲があります。でも大抵、物覚えの悪さからじきに忘れてしまいます。しかし、たまに頭に残っているものがある。フランシスコ・ロトゥンドの「アケル・タパード・デ・アルミーニョ」などその例です。すぐそのあとで、トロイロの同じ曲も負けず劣らずだとなまた感心する。わたしの好みはこんな風に年中ふらふらしています。

西川 七面倒臭く考えずに愉しむ姿勢が大事と仰うことですね。ちょっと話は昏くなるかも知れませんが、タンゴの現況についてはどのように…

<今のタンゴは、はて…>

佐藤 よその例会にお邪魔した時など、タンゴの今昔をよく知っていらっしゃる方々が「この頃、さっぱりいいタンゴ、いいCDにお目にかからない」という意味のことを仰います。タンゴの世界はこれまで大小の差はあれおおむね滔々と流れてきたが、その流れが弱くなり質も変化したのでしょうか。聴く側、楽しむ側の変化も大きい。時代が変われば、現状をあるがままに受け止めて自分たちの楽しみ方を探して行くことだと思います。

以前、ピアソラの是非の議論が盛んでした。勿論、今でも続いています。その殆どは他を排して、何れかに決着を見ないと収まらないというところから始まっている。亡くなった芝野さんが「ピアソラの好きな人は、譜が読めて楽器を弾くことから入った人に多い」という意味のことを仰っていました。同じものを見ても、視点が違えば違って見える。相手の言うことは間違っているという考えは、そもそも出発点からして噛み合わないということでしょう。

「古い（SPの）タンゴは枯葉だ」といった人がいました。「生きているナマのタンゴを聴かなくてはいけない」と続きます。これも相手の言うことは受け入れられない、から来ています。好き好きは変えられませんし、人に押し付けるものではないでしょう。

西川 価値観の違う方々の見方・意見に耳を傾ける姿勢の大事さを痛感します。大変考えさせられるお話を有り難うございます。では最後にアカデミーに対するご意見や要望がありましたらお聞かせ下さい。

<かけがえのない文化遺産、タンゴ>

佐藤 個人的には意見など持ち合わせておりません。セミナーで、機関誌で見聞きすることは新鮮ですし、すべてが興味の対象です。

タンゴは大切な文化遺産です。アルゼンチンのはアルゼンチンでとの考え方もあるとは思いますが、大勢の先達が熱心に収集し、日本に蓄積された膨大な音楽はこれはもう日本の文化遺産と言ってもいいのではないかと。これらの資産が将来にわたって安全に保存され次の時代に引き継がれるといいなと思います。



最近、音響技術が発達し、音楽を極めて容易に録音し、コピーし、大量のものをストック出来るようになりました。文明の利器はタンゴの音を小さな缶詰にしまいました。一つには、時を経て生き残ったタンゴが粗末に扱われる風潮はないか、反対に、録音、記録された音楽が一定の水準を保っているかどうか。こうしたことにアクセントをつけた目を向けていただければいいなと思っております。

西川 レコード文化、レコード芸術の一カテゴリーとしてのタンゴを次世代に遺す方法がないものか、個人ではなく、マスで考えるべきですね。今日は大変示唆に富んだお話をご披露戴き有り難うございました。

(2013.11.29収録)

回想

菅平高原タンゴフェスティバル

黒木 皆夫 (調布市)

■はじめに

表題を懐かしく思われた方は、かなりの年齢になられたと拝察致します。

菅平高原にてタンゴフェスティバルが始まったのが1979年。「すいよう会」でアルゼンチンツアーを始めた次の年でした。35年も前の事です。JR上田駅から貸切バスで40分。海拔1,300メートルのスキー客用のホテル「白樺荘」にはほぼ全国から参集したタンゴ愛好家の1泊2日のお楽しみ会でありました。第1回目の案内状(1979年9月15日-16日)をご参照下さい。まだワープロもない頃ですのでガリ版刷りです。フェスティバルは、「すいよう会」会長の湯沢修一氏が主催し、すべての仕事をこなしていました。会報等も含め、そのひたむきな努力には、正に脱帽するのみです。ついでながら、各方面から上田までの切符の手配、ホテルの部屋割り、全食事の注文等々に至るまで、ほとんど一人でこなしておりました。最敬礼です。



タンゴフェスティバル

'79 菅平高原

9月15日(祝)-16日(日)

会場・宿泊 ホテル白樺荘
長野県川上郡埴科町菅平高原(信越線 上田駅より車345分) 海抜 1,300円

定員 95名+15名
参加費 (A) 現地集合組 9,000円(1泊2食 宿泊費 タンゴフェスティバル費 他*)
(B) 折返折返1号組 17,500円 (交通費+1泊2食宿泊費 タンゴフェスティバル費 他*)

*プロケム印刷代、案内状、郵送料、デニスコート代 カフテルパーティ代(参加費に含まれない)・Tシャツ代(参加費に含めない)
・昼食代(16日は飲み代も含め1000円)
・モーニングコーヒーのついで(コーヒー代+チケット400円)・私的費用 他
現地で取扱い・ライブLP予約
・海外鑑(13日迄に中興社客室に) 入場券
・9/21 3木学 9/28 多摩美術大学 9/29 北信大
・お2回左ノスアルズ旅行予約申込(未年9/8-9/8)予約金不要

参加者定員20名以内

宿泊先ホテル
オルケスタ・ティヒカ・コンパニエロス
ロス・ノチエ・ロス
オルケスタ・ティヒカ・シロロン
ロス・カピタノス
トリオ・カローラ
加年松城屋、高橋洋美 ほか
SP 若嶽水一 ほか

YM.
フェスティバルのシンボルマーク 祥子(サトウハチロー氏) (西本純氏)が、左ノスアルズで購入した写真の模写したものです。車中のステッカー、ホテル白樺荘の入口、フェスティバル会場にこのマークが。

補欠の案内
9/1-2とホテル白樺荘の宿泊人数増加についてです。その結果、和室と格差は有りです。は スキ-X-スノード(2段)の若くは限り、朝日新聞でのお白のりの方重産で、男8人 女8人の受けを致すことになりました。9/3日にレポートを発送致します。

↓ ↓
・可否を至急お知らせ下さい。
・スキ-X-スノード(2段)の若くは限り、朝日新聞でのお白のりの方重産で、男8人 女8人の受けを致すことになりました。9/3日にレポートを発送致します。詳細は後述のとおりです。

高場将美氏が1980年に「アルゼンチン協会」の会報に掲載した紹介文が秀逸につき、お願いして、再掲致します。

菅平タンゴフェスティバル

高場 将美

長野県の菅平高原にあるスキー・スロープの下にあるロッジに、タンゴ演奏家、愛好家が集まって、タンゴフェスティバルが初めて開催されたのが1979年のことだった。それ以来毎年9月に、1泊2日のフェスティバルが今日まで休まず続いている。

なぜこの年に？ という事情はよくわからないが、付線はある。前の年に、日本のタンゴ愛好家たちが、大挙して（30数名）、ブエノスアイレスへ「タンゴツアー」に出かけた。また1979年には、民音タンゴ・シリーズ10周年記念に、かつて1963年来日して全国のファンを熱狂させたオスバルド・ブグリエーセの楽団が公演して、ファンと音楽家たちは旧交をあたためあった。各地のファンがあちこちの会場で一緒になった、あの興奮をもう一度！

菅平タンゴフェスティバルの大きな推進者は湯沢修一さんという。この時点で、もう20年も東京で「すいよう会」というダンスとタンゴの同好会を主宰してきた人だ（もちろん現在も存続）。

お役所その他の援助はなく、すべてタンゴファンの手弁当のボランティア活動で運営される菅平タンゴフェスティバルには、しばしばアルゼンチン音楽家のお客さんも招かれる。各地のアマチュア楽団、歌手なども、プロのアーティストと同じステージに立つ。必ずしもタンゴばかりと限らない。

アルゼンチンのフェスティバルのような大規模なイベントを期待してはいけない。これは、いつも親密な雰囲気にあふれた、家族・兄弟のようにみんなの顔が見える、年に一度の交歓の場なのだ。

ロッジ自慢のボリーム満点のおいしい夕食のあとでコンサート。公式行事（？）のほかに各部屋でのタンゴ談義。レコード・コンサートやセミナーもある。タンゴファンの秋の行事としてこれ以上のものはない。翌朝にもいろいろな企画があるので飲みすぎないように注意。

■菅平を支えた人達

高場氏の紹介文でほとんどすべてを語っていますが、フェスティバルを全力で応援し、手弁当で協力された方々もたくさんいました。思いつくままに列挙してみます。いずれも菅平での役割です。

故 日向信吾氏……………「川口タンゴクラブ」主催、喫茶店「エル・ジョロン」店主、「O. T. ジョロン」オーナー。音楽機器の一式を、西川口から仲間と車で提供。夜中に走り、早朝より黙々と設営。

故 岩崎永一氏……………タンゴSP盤コレクターで菅平の常連。解説、司会等々、貴重な盤を聴かせてくれた。

故 加年松城至氏……………第一級ガルデル愛好家で、菅平では司会兼ガルデル専門歌手。初代「中南米

音楽」編集長。アダ・ファルコンを修道院に訪ね、面会に成功。

故 蟹江丈夫氏……総合司会兼「ロドリゲス楽団」ピアニストとしてレギュラー出演、名解説者として知られる。

故 芝野史郎氏……いわずと知れた関西を代表するタンゴ解説者。関東の蟹江氏と好ライバルで、毎回、フェスティバルを盛り上げた。

故 三浦美津子氏……名古屋のタンゴ喫茶「フェリシア」店主で自称タンゴ歌手。「名古屋中南米音楽（会長 加藤都喜夫氏）」の会場及び春日井邦夫氏主宰「ロス・ノチエーロス」の練習場としても提供。いずれも菅平で大活躍。

河内敏昭氏……バイオリン・ギター奏者。フェルナンド・テル・トリオのギターは語り草だが、菅平フェスティバルでも、ギター伴奏でタンゴの歌唱指導、合同演奏のアレンジ等々で活躍。

高場将美氏……司会・コメンテーター。加年松城至氏のギター伴奏者。長い間「中南米音楽」で中西主幹の補佐。

その他、故 湯沢修一氏の元夫人、秋谷一枝氏の内助の功は勿論、世話役の堤俊明氏、塩田富貴子氏、バイレの三浦幸三氏、青森の松坂正氏、福島菊池利久氏をはじめ各地の愛好会会長及び会員諸氏等枚挙にいとまがありません。

■参集した演奏家

当時の日本のプロのタンゴ演奏家・歌手のほとんどの方々が1回は出演のため、参加されております。プロ・アマ混合も、アマのみのグループも全国から数多く参集致しました。

昨夏、88歳で天寿を全うされた我等の藤澤嵐子さんも2回、菅平に御夫君の早川眞平氏と参加下さいました。最初は1981年（第3回）で、嵐子さん56歳の時です。その時はステージで歌も披露。引退復帰後の歌声にフェスティバルは興奮と感動に包まれました。2回目は、眞平氏が亡くなったのが



写真提供：三浦幸三氏

1984年（享年70歳）でしたから、その前の年だった筈です。前年、17年振りで、お二人で訪垂された時の土産話に花が咲き、話が尽きず深夜に及び、ぼつぼつお開きになりかけた時、嵐子さんが誰に向かうともなく吐き捨てるような口調で「才能の無い者は歌うべきじゃないのよ」と言われました。前後の話は何を聞いたのか今ではまったく覚えておりませんが、この一言だけは強烈なインパクトで今も残って

います。まさかご自分に対してではないとは思いますが、一般論として言う場面でもなかった様ですし、はたして真意は……。その時に「えっ、どなたの事ですか?」とはっきり質問すべきだったと、今も時折思い出すと悔やまれます。

フィゴ祭りの面々 (2000.10.21)



第23回 スエニョス楽団 (2001)

数多く参集していただいたセミ・プロで特に印象深いグループを列挙します。まず筆頭は名古屋の加藤修一氏が率いる「オルケスタ・エスペランサ」です。ご自身のピアノを中心にバイオリンのトップが素晴らしく、ダイナミックな表現と華麗なアンサンブルは誠に胸を打つものがありました。

次に同じく名古屋の永島久由氏主宰の「オルケスタ・コンパニェロス」。日本のアマでは最古参で、1960年（昭和35年）結成とか。そのひた向きの演奏にはいつも心地良い感動を覚えました。

またまた名古屋ですが、田中博澄氏のバンドネオンの音色が際立ったコンフントは、蟹江氏曰く「心で弾くバンドネオン」。まさにこのフレーズ通りの演奏でした。名古屋は何故にこのようなグループが割拠したのか不思議です。田中氏は視力がご不自由にもめげず、現在も健在で演奏されているのを「TANGUEAND EN JAPON」No.31で拝見し、只々感服致しました。嬉しい限りです。

そして忘れてならないのは京都の「京都セイソ」。今では関西中心に大活躍の「アストロリコ」の門奈紀生氏も、当時はアマチュア楽団を主宰して欲求不満の解消を計っていたと思われませんが、さすがと思わせるフィーリングで、聴く者を虜にしておりました。

「オルケスタ・タンゴ・ワセダ」は現在では只一の大学タンゴ楽団になってしまったが、すいよう会との附合は古く、菅平タンゴフェスティバルにも、第1回から参加し、名曲の数々を聴かせてくれた。卒業後、岩崎滋とタンゴ・コスモスで活躍したバンドネオンの尾澤昌仁君も菅平で「ケハス・デ・バンドネオン」のバリエーションを見事に弾きこなしていたのを思い出す。現在も「オルケスタ・タ

TANGO

「聴くもよし、踊るもよし」
菅平に集合した熱心なファン

第18回「タンゴ・フェスティバル」

文◎高野博昭「本誌」 text by Hiroaki Takano

年一度、全国のタンゴ・ファンが集う恒例の「タンゴ・フェスティバル」が、今年も十月十九、二十日の二日間、長野県・菅平高原のホテルを借り切って開かれた。

「今回は選挙日と重なり、参加できなかった人も多かったです」

と主催者の湯沢修一さん（東京のタンゴ同好会「すいよう会」会長）は言っていたが、昨年の参加者六十

五人を上回る九十四人が集まった。

フェスティバルは、タンゴの本場、アルゼンチン式に「サルー」の掛け声で乾杯したあと、五人のバンドネン演奏「ふいごまつり」で幕を開けた。プログラムは、本場の有名な演奏者のビデオ観賞、SP・CD盤の試聴会、ダンス、生演奏ありと、バラエティーに富んだ内容だった。参加者たちは、時間刻みの細かな進

行表に合わせて会場を移動、聴いたり踊ったりしていった。

なかでも参加者たちが毎回楽しみになっているのは、生演奏会。夕食を挟んでの「夕べの演奏」と「夜の演奏」、それに二日目の「朝の演奏」と三回も行われ、「ロス・マエストリー・トス・デル・タンゴ」「トリオ・スエーニョ」「ロス・チャム・ジョス」「志賀清とタンゴモデルノス」のプロアマチュア合わせて四楽団が出演、熱のこもった演奏や歌を披露した。

SP盤の試聴会では、自慢の古いレコードを持参した人が、曲目、演奏者、録音などを細かく説明し聴かせた。なかには今世紀初めに録音された貴重なレコードなども含まれていた。この試聴会に合わせてダン

スをする人たちが、見事な足さばきで踊って見せた。

タンゴ・フェスティバルは、今回で十八回目。初回から連続参加している黒木皆夫さん（59）は、バンドネオンも弾き、ダンスもする器用な人だが、フェスティバルの歴史をこんなふうに語ってくれた。

「以前は全国からたくさんのお客さんが参加して演奏技術を競っていたんですが、最近は参加者が少なくなりました。でもこのごろはダンスをするグループの参加が増えてきたのが特徴ですね」

「聴くもよし、踊るもよし」のタンゴ・フェスティバル、参加者たちは、タンゴ漬けの二日間を十二分に楽しんだようである。

「ソング・ワセダ」は毎年、秋に四谷区民センターで開催のスエニョスタンゴフェスティバルに、スエニョス楽団とのジョイントで出演し、聴くも佳し、踊るも佳しの会を作り出している。又、すいよう会レコード・コンサートには毎月、部員が手伝いに来てくれて居り、3曲選を担当している。

まだまだ活躍されたグループはありますが、頁数の関係でもう一つ「シエテ・デ・横浜」も初期の菅平の常連でした。齊藤一臣氏を中心に、ビクトルの「フリエンネ」等を楽しませてくれましたが、ある年1年間、休業宣言をし、2年後にガラリと演奏スタイルをプグリエーセ・スタイルに変更し、「ラ・ジュンバ」、「マラ・フンタ」等を次々と演奏し、我々一同、びっくり仰天致しました。現在は「オルケスタ横浜」で若手プロと混合で活躍中なのはご存知の通りです。

朝日新聞記者の牧野さんは、度々菅平の記事を載せてくれましたが、アサヒグラフの高野博昭さんも、1996年の第18回に参加され、すぐに記事にしてくれましたので、湯沢氏は喜んで会報に転載しました。今、読み返すと当日の熱気が伝わってきます。改めて掲載させていただきますのでご参照下さい。

■思い出のエピソード

いろいろエピソードはたくさんありますが、まずは「京都セイス」ですね。常に車で参加でしたが、ある年、例年のようにメンバーは早朝に京都を出発し、菅平に向かったのですが、渋滞に巻き込まれ、何とか各楽団のリハの最終に間に合いました。休む間もなく本番に入りましたが、演奏中に第2バ

ンドネオン氏がステージで倒れてしまい大騒ぎ。救急車で上田の病院へ搬送されたこともあり、当然この楽団は棄権かと思いきや、バンドネオンは門奈氏が熱の入った演奏を展開し、予定の曲目を全てこなしたのには、参加者一同、感心しきりでした。幸い倒れた方は、大事に至らず、無事に帰られたと伺っております。

今一つ、カルロス・ガルシアとタンゴオールスターズの楽団が来日した前後の頃と思います。大岩祥浩氏主宰の会の機関紙に「ほろびゆくタンゴ」と題して会員某氏がタンゴファンは、ケチで、頑固で、陰険だと自虐的な論調で、本国にも大衆に支持される演奏家はもういない、フェデリコ、リベルテラ、ラシアッティ、ピアソラ、モレスは「ガラクタ楽団」、カルロス・ガルシアは「なんだ、あれは！」等々言いたい放題で、当時タンゴファンの間では大きな話題となっていました。湯沢氏はこれを問題視し、「すいよう会」のあらゆる会合で激怒し、特にご最員のガルシアをけなされたのが、相当感情を害された様子でした。当然、大岩氏の耳にも入ったのでしょう。その年の菅平にご夫妻で参加されたのです。折りも折り、我々野次馬は、ハラハラ、ドキドキしながら事の成り行きを見守っていましたが、両雄共にほとんど顔を合わせず、互いに音無しの構えで時間が過ぎました。予定の行事が一寸した切れ目の時、大岩氏が初参加の挨拶（求められたのか、求めたのか不明）に立ち、型通りの世辞の後、やおら近頃自分の会の機関紙の「ほろびゆくタンゴ」についての批判・非難がある様だが全て誤解である。真意はタンゴの将来性についての叱咤・激励であり、逆説的な表現を理解して頂きたい。この機会にタンゴ発展のために共に努力してゆきたいものだ…云々と結び、それに対する反論も無く、見事なものだな～と感心致しました。翌朝、早めに立たれたらしく、朝食時にはもう出立されておりました。半ば期待していた波乱も無く、若干物足りなさを感じたのを思い出します。

■おわりに

振り返ってみますと、当然ながら皆さん若かった。30～40年も前の話ですから。時代も良かったのでしょう。聴くもよし、踊るもよし、飲んで語れば更によしです。この様な企画が今後できるとすれば、全国ネットの「日本タンゴ・アカデミー」位と思われれます。

かなり雑多な書き方で恐縮ですが、タンゴ愛好家の間で今や語り草になっている「菅平高原タンゴフェスティバル」について本誌に取り上げて頂いたことを感謝致します。

なお参考までに第1回（1979年・昭和54年）～第23回（2001年・平成13年）までの参加人数の推移と第22回目の参加者名簿を載せてみました。懐かしいお名前も散見されます。

第1回から最後となった第23回まですべてに参加し現存するのは、もう私のみかもれません。改めて時の流れを感じます。

資料1

第1回～第23回菅平高原タンゴフェスティバル参加記録

第1回	1979年9月15日～16日	参加	152名
第2回	1980年9月14日～15日	参加	170名
第3回	1981年10月10日～11日	参加	151名
第4回	1982年10月9日～10日	資料なし	
第5回	1983年10月9日～10日	参加	130名
第6回	1984年9月15日～16日	参加	167名
第7回	1985年9月15日～16日	参加	208名
第8回	1986年9月14日～15日	参加	201名

第9回	1987年10月10日～11日	参加	185名
第10回	1988年10月9日～10日	参加	180名
第11回	1989年9月23日～24日	参加	161名
第12回	1990年9月23日～24日	参加	132名
第13回	1991年9月22日～23日	参加	144名
第14回	1992年10月10日～11日	参加	131名
第15回	1993年10月10日～11日	参加	134名
第16回	1994年10月10日～11日	参加	98名
第17回	1995年10月9日～10日	参加	65名
第18回	1996年10月19日～20日	参加	98名
第19回	1997年10月18日～19日	参加	80名
第20回	1998年10月17日～18日	参加	77名
第21回	1999年10月16日～17日	参加	77名
第22回	2000年10月21日～22日	参加	70名
最終回	第23回 2001年10月19日～20日	参加	65名

資料2

第22回菅平高原タンゴフェスティバル参加者名簿 10月18日現在 敬称略、ABC順

55. 足立精三・千葉市	18. 永島久由・名古屋市
8. 永福無蘭・石川県	19. 永島唯由・名古屋市
9. 永福倫子・石川県	14. 中村 喬・京都市
39. 五井勇夫・鎌倉市	51. 成田君代・鳩ヶ谷市
17. 濱野繁太・尾鷲市	58. 西村久恵、東京都
56. 花輪健郎・東京都	63. 西浦正子・国分寺市
71. 半沢美代子・福島県	37. 小川紀美代・武蔵野市
11. 服部 昭・大津市	36. 岡部紀代子・群馬県
12. 服部 秀・大津市	72. 大橋瑛子・福島市
65. 服部昌平・習志野市	35. 大塚 清・長野市
66. 服部ハル枝・習志野市	47. 大塚 典・東京都
60. 林 明・東京都	70. 大和田充昭・原町市
69. 平野啓二郎・白河市	31. 斉藤信江・四日市
24. 福永久美子・名古屋	54. 佐野三郎・横浜市
41. 古橋順越・鎌倉市	61. 佐藤正夫・東京都
50. 井上智江・三鷹市	62. 佐藤博子・東京都
16. 石黒美智子・大津市	7. 芝野史郎・草津市
20. 岩田武雄・名古屋市	53. 七ヶ所博幸・東京都
59. 伊豆儀巳・大和市	34. 清水紀代子・長野市
25. 榊島稔典・名古屋	5. 新名興三・丸亀市
30. 加藤喜美子・四日市	48. 曾根脇加年子・三鷹市
29. 川村美智子・三重県	22. 鈴木克比古・愛知県
68. 菊池久利・福島県	40. 鈴木和夫・府中市
6. 木村 修・西宮市	1. 鈴木忠夫・姫路市
26. 香田文男・名古屋	52. 高野博昭・川口市
27. 香田正代・名古屋	73. 渡辺富美子・福島市
32. 栗田隆三・静岡市	28. 矢田麻子・四日市
33. 栗田明子・静岡市	3. 富田 稔・丸亀市
43. 黒木皆夫・調布市	10. 鶴巻博子・石川県
67. 桑田晴雄・東京都	64. 山田 守・多摩市
2. 圓尾かおる・姫路市	23. 山本 英・名古屋市
21. 三品一正・名古屋市	49. 山本美恵子・日野市
38. 森 正樹・東京都	44. 山本正一・東京都
46. 三宅芝子・武蔵野市	57. 湯沢修一・東京都
45. 村上ミツ子・東京都	15. 野瀬 弘・大津市

(編集部注：この名簿は厳密に言えば個人情報に属しますが、10年前のものであり、現在では故人となった方々も含まれているので資料的価値を考慮して掲載しました。)

Los letristas del tango
タンゴ作詞家列伝 第4回

J. カルーソ/R. カジョール/C. レンシ

高場 将美
Masami Takaba

フワン・カルーソ Juan Andrés Caruso

フワン（セカンド・ネームはアンドレス）・カルーソは、1890年、ブエノスアイレス州の首都ラプラタ市の生まれ、子どものとき両親をなくし、ブエノスアイレス市に出てきた。貧困の中で育ち、少年時代に劇場の《クラーク claque》（いい場面で、タイミングよく、パチパチ拍手をする仕事）をしていたとき、仲間と楽屋どろぼうをやり、アルゼンチンのずっと南部バイアブランカ市に逃れた。ろくに学校に行けなかったはずだが、同市で、地方新聞の社主に気に入られ、教えられて、ジャーナリスト（というのも大げさだが）になった。スペインのガリーシア地方からの移民の息子で、アルゼンチン演劇史上に大きな足跡を残すことになる役者・劇団長のエンリーケ・ムイニョ Enrique Muño (1881 - 1956) が公演に来たとき、彼の記事を読んでたいへんほめてくれたとのこと。生まれつき、文才があり、演劇への感覚がすぐれていたのだろう。



1910年（20歳のとき）に、ブエノスアイレスに戻り、中央南部のサンクリストーバル区に住んだ。移民の人口が多く、タンゴ文化（！）が凝縮された地域で、ボエードやバルバネーラ区に隣接している。ムイニョが、この区の住人だったので、なにかコネクションがあったのだろうと推察される。

カルーソは、演劇関係のジャーナリストになったのと平行して、当時は芝居と密接に結びついていたタンゴの世界の人々とも仲良しになった。特に、同じ地域に住む、同年輩のフランシスコ・カナール Francisco Canaro (1888 - 1964) とは大の親友になった。カナールの自伝によれば、そのころ、サンクリストーバルの友だちグループは、彼やカルーソ、そしてグレコ Vicente Greco (1888 - 1924)、バルディ Agustín Bardi (1884 - 1941)、カストリオータ Samuel Castriota (1890 - 1932)、ターノ・ジェナーロ «Tano» Genaro Espósito (1886 - 1944) などだったそうだ。みんな20代だった。

この記事では、それぞれの作詞家が最初に有名曲をつくった年代の——少々誤差はお許しください——順で紹介している。カルーソも、早くからタンゴの歌詞をつくったが、広く知られなかったので、登場は今回になった。

芝居に関係している人はみんな、多かれ少なかれ挿入歌タンゴの歌詞を書いた時代だ。カルーソは、14年に、劇音楽としてフィルポ Roberto Firpo が作曲した『ボヘミアンの魂 Alma de bohemio』に、曲の感じに合わせてサルスエーラ（スペイン歌劇）の気分の歌詞を書き、16年にカナールが巷（ちまた）のメロディをタンゴに編曲した『汚れ顔 Cara sucia』に歌詞を付けたが、これらは当時は一般に歌われることはなかった。

1919年に、カルーソは劇作家としてデビュー（その後、30作ほど上演された）、サイネーテ（2～3曲歌が入る大衆・民衆的なテーマの風俗劇）『場末の気高さ *Nobleza de arrabal*』を発表した。その挿入歌（カナーロ作曲）にももちろん作詞したが、後年、楽譜出版社の事情で、オメーロ・マンシ *Homero Manzi*（この記事で後に紹介）が改作した歌詞が正規のものになってしまった。

カルーソの最初のヒット曲といえるのは、24年の『カスカベリート（小さな鈴） *Cascabelito*』だろう。作曲者ホセ・ポール *José Böhr* (1901 - 94) の大のお気に入りメロディで（題名なしだった）、なんとか人に知らせようと、いくつか歌詞を付けてもらったがうまくいかず、カルーソに作詞を依頼した。カルーソは、歌手カルロス・ガルデル *Carlos Gardel* (? - 1935) の親友だったので、そのコネクションを利用したかったのだ。ガルデルは、このメロディがものすごく嫌いで、たとえカルーソ作詞でも絶対に歌わないと断ったが、ポールに泣きつかれて仕方なく録音した。

ガルデルは、カルーソの人柄が大好きで、結局は彼の歌詞を40曲近く録音している。カルーソは、長身で、いい男で、非行少年だったはずだが品がよく、みんなに好かれていたらしい。

やはりスター歌手のイグナーシオ・コルシーニ *Ignacio Corsini* (1891 - 1967) もカルーソが好きで、30曲ほど録音している。一番のおすすめは、バルディ作曲『わたしに手紙を書かないで *No me escribas*』(1927年)。

1924年に、オデオン社主催のタンゴ・コンクール第1回が開かれ、優勝は、フランシスコの弟ラファエル・カナーロ *Rafael Canaro* (1890 - 1972) が作曲した『ガウチョの嘆き *Sentimiento gaucho*』。器楽用の曲だが、すぐにカルーソが歌詞をはめ込んで、ガルデルが録音した。この歌詞の舞台は、ブエノスアイレスの北端の危ない地区にあった実在の酒場で、カルーソが実際に目撃したままだそうだ。最初の部分と、最後の部分をご紹介します（ガルデルの改訂版による）。

*En un viejo almacén del Paseo Colón / donde van los que tienen perdida la fe, /
todo sucio y harapiento, una tarde encontré / a un borracho sentado en oscuro rincón. /
Al mirarlo sentí una profunda emoción / porque en su alma un dolor secreto adiviné /
y sentándome cerca a su lado le hablé / y él entonces me hizo esta fiel confesión,
ponga, amigo, atención. //.....//*

“... Porque todo aquel amor / que por ella yo sentí / lo cortó de un solo tajo el filo de la traición.”

（パセオ・コローン（通りの名前）の とある古い酒場。信じる心をなくしてしまった男たちの行くところ。すっかり汚れて ぼろぼろの服の男に、ある午後わたしは出会った。暗い片隅に座っていた酔った男。彼を見てわたしは 深く心を動かされた、彼の魂に秘められた痛みを察したから。そこで、そばに座って彼に話しかけた。すると彼は、この偽りない告白をした。友よ 耳を傾けてお聞きあれ。……「……おれが彼女に感じた あの愛のすべてを、ただ一撃で断ち切った、裏切りの刃が」

カルーソの、今日もっとも広く愛されている歌詞は、カナーロ作曲『最後の盃 *La última copa*』(1925年) だろう。私生活では、1921年にムイニョ劇団の女優と結婚、執筆活動と平行して、同劇団のマナージャーにもなった。しかし、30代の末に病気になり、長いあいだ苦しみ、生きる気力をなくして、1931年3月1日に亡くなった。資料には書かれていないが、自殺だろうと思われる。

ロベルト・カジョール **Robero Lino Cayol**

ロベルト（セカンド・ネームはリノ）・カジョールは、1887年9月23日、ブエノスアイレス生まれ。若いころ雑誌に記事を書く人、つまりジャーナリストになった。現在もそうかもしれないが、アルゼンチンのジャーナリストは社員として固定給をもらう人は少なく、今の日本でいうフリー・ライターがほとんどだった。彼はまじめで、よく研究し、人気ある一流新聞にも寄稿した。

そういう原稿料は決して高くない。彼の場合は知らないが、タダで書かしてもらおう（！）人も、少なくなかったようだ。そこで、より収入を得たい人は、アルバイトに、芝居の台本を書き、やがては、そちらが本業になることも多かった。もちろん芝居が書ける素質がなければならず、芝居が当たらなければ（観客がたくさん集まらなければ）報酬は少ない。



1909年に、カジョールは、コメディ『釣り針 *El anzuelo*』で、劇作家としてデビューした。その後、より観客を集めるジャンル「サイネーテ」を書くようになり、結局、50作以上つくった。いちばん有名なのは、1816年の『女の子のデビュー *El debut de la piba*』だ。歌のうまい、でも舞台になんか出たくない女の子カタリーナ（イタリア移民の娘で、料理するのが大好き）を、バラエティ劇場のスターにしようとするお話で、どうってことないけれど、とても楽しく、数人の登場人物（みんな、おもしろい人）のセリフも場末のエスプリにあふれて魅力いっぱい。当時のルンファルド（アルゼンチン＝ウルグアイの都市のスラング）がたくさん使われ興味ぶかい。近年まで、よく上演されてきたようだ。1幕1場——その舞台はこうだ。

「雪のように白い（共同住宅の）部屋。奥には、太陽いっぱいの中庭に向かって開かれた窓。窓には、カナリアの入った金色の鳥かご。上手と下手に、あざやかな色とりどりのタータンのカーテンが、かかった扉。舞台には、松の食堂テーブル、食器戸棚、椅子など……」

このサイネーテは、ムイニョ＝アリッピ *Muñio-Alippi* 劇団、音楽デバッシ *Arturo de Bassi* (1890 - 1950) で上演された。どんな曲が歌われたのかな？と調べたが、台本には、歌詞さえも書いてない。「カタリーナの歌う曲については、作者協会から楽譜を入手してください」だって！

カジョールは、アルゼンチン最初の著作権団体である、アルゼンチン演劇・歌劇作家協会の創立メンバーのひとりで、1913～17年は副会長をつとめている。当時、人気ある芝居は、地方の劇団などが、無断でどんどん上演してしまうので、そういう海賊行為に対抗するため著作権保護団体がつくられたわけだ。

1911年に彼の書いたサイネーテのタイトルを取って、デバッシが単独で演奏するために『エル・カブレ（猛鳥の名前をとった、登場人物の異名）*El Caburé*』を作曲した。楽譜出版のためにカジョールが歌詞をつけたけれど、一般に歌われることはなかった。歌詞も、この記事の最初に登場したビジヨルド *Ángel Villoldo* のような、スペイン大衆歌劇のスタイルだった。

1924年から、カジョールは、サイネーテより多くの観客を集める（場合によるけれど）レビューの世界にも入った。ここでは台本作家は構成演出家であり、興行（経営）にもタッチする。彼の相棒は、

台本も書いたが、興行者として、たぶんアルゼンチン芸能史上いちばんの有名人になるウンベルト・カイロ Humberto Cairo (? - 1945) だった。カイロは、レビュー劇場《マイポ Maipo》の支配人だった。カジョール=カイロは、同劇場でたくさんのレビューを舞台に乗せたが、最初の特記すべき成功は、1925年の『わたしはすべての女性が好き Me gustan todas』だったろう。レビュー全体の音楽担当はデバッシだったが（彼も興行の共同経営者）、その挿入歌のひとつ『古い街角 Viejo rincón』は、デバッシ楽団のメンバーだった（と思う）ピアノ奏者、ラウル・デロソージョス Raúl de los Hoyos (1902 - 89) が作曲した。曲がたいへんすばらしい！ 彼がかつて、ブエノスアイレス市近郊の娼婦の館《ムーラン・ルージュ》で弾いていたとき作曲し、お客にも女性たちにも大好評だったタンゴだそう。

デロソージョスは、ガルデールと親しかったので、この曲を彼に録音してもらった。発表後すぐにギター伴奏で、そして1930年には歌伴奏用のカナリーオ楽団（小編成）といっしょに——このガルデールの歌が、またすばらしい！ いつ聴いてもワクワクしてしまいます。

元の歌詞は長すぎるので、ガルデールは編集して、より効果的に直している。また、1語「マンドリオン」をより一般的なことば「バンドネオン」に直した（意味は同じこと）。ここでは、ガルデール版の最初と、最後の部分をご紹介します。なお、題名は正しくは「古い（部屋の）片隅」。その部屋は娼婦の部屋なのだが、あいまいにボカシてある。

*Viejo rincón de mis primeros años, / donde ella me batió que me quería. /
 Guarida de cien noches de fandango, / que en mi memoria vives todavía. /
 ¡Oh, callejón de turbios caferatas / que fueron taitas del bandoneón! /
 ¿dónde estará mi garçonier de lata, / testigo de mi amor y su traición? // //
 De un tango al vaivén / da vida a un amor; / de un tango al vaivén / nos hace traición.*

（わたしの若い最初の時代の、なつかしい部屋の片隅、そこで彼女がわたしに、好きだと言った。歓楽の百の夜の隠れ家、おまえは、わたしの記憶に今でも生きている。おお、怪しげなヒモたちのたむろする裏道、彼らはバンドネオンのすごい腕前ももっていた！ どこにいったのか、わたしのトタン屋根の小部屋は？ わたしの愛と、その裏切りの証人だった場所は？……

ひとつのタンゴ、ダンスが揺れて、ひとつの愛が、命をもつ。ひとつのタンゴ、ダンスが揺れて、わたしたちを裏切る）

この最後の短い4行（日本語訳はうまくいきませんです）だけで、わたしはカジョールを、この列伝に加えた。

カジョールは、有名作家から共同執筆を頼まれるほど、サイネーテ作者としてすばらしい才能の持ち主だったが、わずか3分足らずでまとめるタンゴの歌詞は、あんまり得意ではなかったようだ。物語や状況の説明が多すぎて、たとえ歌詞であっても必要な、「詩」のひらめきに欠ける。

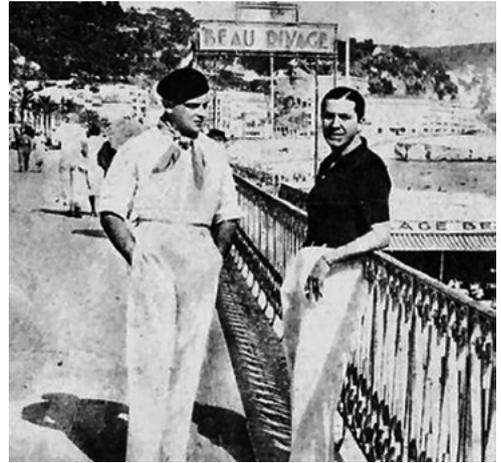
でも、いずれもデロソージョスが作曲した、『ゆうべ2時に Anoché a las dos』（1925年）、『コロン劇場の夜ごと Noches del Colón』（26年）などは、ガルデールが歌ってくれたこともあって、今も忘れられていない。前者は、男女2人の登場人物が語るの、ソロ歌手はやりにくい。

カジョールは、1929年6月27日、満40才になる前にこの世を去った。

カルロス・レンシ Carlos César Lenzi

1895年、ウルグアイの首都モンテビデオで生まれ。1963年に、アルゼンチンの首都ブエノスアイレスで亡くなった。世界的に、長いあいだ、いちばん愛されているタンゴのひとつである『淡き光に A media luz』の作詞者である。

この曲は、1924年に（異説はあるが、これが正しいと思われる）、レビュー『レビュー女王陛下 Su Majestad la Revista』の挿入歌として初演された。レビュー本体の作者・演出家は アンヘル・クロート Ángel Curotto (1902 - 90) である。彼は、その後、劇作家・プロデューサー（興行主）として、ウルグアイの演劇活動のリーダーのひとりになり、近年、彼の名前を冠した劇場ができた——映画館の改造ですが——ほどの名士だ。



タンゴ『淡き光に』は、たいへん評判がよく、ほどなくラプラタ河を渡って、ブエノスアイレスでも人々が鼻歌でうたうほど愛された。当時のことを書いた、あるタンゴ・ファンのエッセーを読むと、「楽しい曲だなあ、おもしろい歌詞だなあ」と喜んでいたら、ウルグアイの曲だということがわかって、口惜しくてたまらなかった、と書いている。『ラ・クンパルシータ La cumparsita』を筆頭に、モンテビデオ製のタンゴが次々とヒットしてしまうので、ブエノスアイレスのタンゴ・ファンは、「やられた！」と歯ぎしりしていたらしい。

でも、作曲者であるヴァイオリン奏者 エドガルド・ドナート Edgardo Donato (1897 - 1963) は、ブエノスアイレス生まれだという情報が入って、少し気持ちがおさまったようだ。ドナートは、2才のときから20代のほとんどモンテビデオに住み、そこで活動していた。

メロディのことは、この記事では放っておいて、歌詞をご紹介します。ルンファルド（スラング）で「ブリーン bulín」と呼ぶ、独身者が隠れ家みたいな感じで借りているアパートの一室が、舞台になっている。こういう部屋を借りるのは100%男性なのだが、それを女性にしまったデタラメさ——まったく現実から遊離しているのが、さすが！レビューの歌詞だ。この女性をコールガールと思うのは、考えすぎである。そう思われてもいいような、ズルい書き方をしているが……。

*Corrientes tres-cuatro-ocho, / segundo piso, ascensor. / No hay porteros ni vecinos. /
Adentro cocktail y amor. / Pisito que puso Maple; / piano, estera y velador; /
un teléfono que contesta, / una victrola que llora, / viejos tangos de mi flor /
y un gato de porcelana / pa que no mauille al amor.*

（コリエンテス通り 348番。2階へ、エレベーターで。管理人なし、隣人なし。部屋の中はカクテルと愛。マペレ百貨店であつらえたインテリア。ピアノ、草で編んだ敷物、ベッドランプ。蓄音器が泣いている、すてきな古いタンゴの数々を。そして猫が1匹、これは陶器でできてます。恋してミャーミャー泣くと困るから）

モンテビデオで上演するためとはいえ、曲がより多くの人に愛されるためには、タンゴ市場として、はるかに大きく有名なブエノスアイレスのことを考えなければいけない（この曲が全世界のタンゴの定番になるとは作者たちも想像できなかったろうが）。そこでコリエンテス通り、マペレ百貨店、と、

ブエノスアイレスの、だれでも知っている名前を入れてある。「348番」は、いいかげんに語呂のいい数字を並べた、架空の住所である。

作詞者レンシの人生・生活については、ほとんど資料がなく、よくわからない。かなり裕福な家庭の人だと思われる。1918年に『調教師 El domador』という作品で劇作家として、出発した。その後も、ふつうの芝居から、サイネーテ、レビューまで、いろいろ台本を書いた。軽妙なセリフをつくるのが上手な人だったようだ。いくつかは、前記のカロートと合作した。

詩人でもあったということだが、「詩人」というのは、業種というより、生きかたに対して与えられる称号で、定職にはならない。1920年代の後半から、かなり長くパリに行ったり来たり、ボヘミアンぐらしをしていたようだ。いちおうウルグアイ国の外交官だったらしい。

パリでは、歌手カルロス・ガルデールと、大の仲良し、ほとんど兄弟といえる間柄だった。ここに掲げた写真は、ふたりでニースに遊びに行ったときのものである（1932年）。このころ、ガルデール主演映画の挿入歌、ルンバ『あなたの黒い両目のゆえに Por tus ojos negros』の歌詞（かなり、いいかげんなもの）を書いている。作曲者は、パリで活動していたキューバ人ドン・アスピアスー Don Aspiázú (1894 - 1943) だった。

1930年前後に、パリには、5千人ほどのアルゼンチン＝ウルグアイ人が在住・居留していたそうだ。タンゴの分野で彼らの親分格は、アルゼンチン人のヴァイオリン奏者・指揮者マヌエル・ピサーロ Manuel Pizarro (1895 - 1982) だった。一時は5軒もダンスホールを経営していた。彼が作曲し、レンシが作詞した『モンマルトルの夜 Noches de Montmartre』(1932年)は、ガルデールが歌うためにつくられた。レンシの歌詞に、ウルグアイ人のピアニスト、ラモン・コジャーツ Ramón Collazo (1901 - 81) が作曲した『アラカ・パリス！ (気をつけろ、パリ) Araca París』(1930年)は、やはりガルデールが、実感こめて歌い、録音している。

*Pianté de Puente Alsina para Montmartre, / que todos me batían, pa m'engrupir: /
"Tenés la pinta criolla p'acomodarte / con la franchuta vieja que va al dancing... // //
¡Araca París! / ¡Salute París! / Rajá de Montmartre, / piantate, infeliz. /
Si vas a París / no vas a morfar: / no hay minas otarias / y hay que laburar...*

(おれは、ブエノスアイレスのアルシーナ橋界隈の場末から逃げ出した。みんなが、おれをだましたんだ。「そのラテンの顔で、ダンスホールに来るフランスのばあさんたちにモテるよ」……)

パリにご用心、あばよパリ！ モンマルトルから急いで逃げろ。あわれなやつ、さっさと逃げろ。パリに行っても食えないよ。バカな女たちなんていない。自分で働かなくちゃいけないんだ)

レンシの一生は、働かなくてもいい身分だったらしい。ほかに、彼の作詞には、ガルデールがとても気に入っていたけれど、録音する機会をなくした『場末よ、さようなら Adiós arrabal』がある(1931年)。ウルグアイのピアニスト、フワン・バウエル Juan Bäuer «Firpito» (1897 -1952) 作曲だ。ブエノスアイレスの場末から去っていく男の心をうたっている。

クアルテート・パレー・ド・グラス

por 西村秀人

第2回にも記したが、1950年代から、アルゼンチンでは老舗の大手であるRCA Víctor, EMI Odeónに対抗すべく新進レーベルのTK、Music Hall、Philips、Polydor、CBS Columbia、Microfónなどが登場、これらのレーベルは著名な専属アーティストを欠いていたので2大レーベルからの引き抜きによって大物の獲得を試みてきたが、同時に新しいアーティストの発掘にも積極的だった。

さらにLP時代に入り、レコードというメディアがより安価な形で広く普及するようになると、より手軽に楽しめるタンゴのスタイル、それも演奏者の名前で売るのではなく、それらしい楽団名でセールスをあげるレコード会社の企画によるアルバムが数多く登場するようになった。その最も成功した例はフィリップス・レーベルのアンドレのコンフント (André y su conjunto) でありでタンゴのみならず、ラテン、フォルクローレから日本の名曲集まで多数のアルバムを残した。第2回で紹介した同じレーベルのクアルテート・ロス・ポルテニートスも同じ系列の趣旨から生まれたグループであった。

アルゼンチン・フィリップスとほぼ同時、1958年頃から発売を開始したレーベル、マイクロフォン (Microfón) はスタート時からLPアルバム・ベースの制作を主とし、イージーリスニング系やダンス系のアルバムでセールスをあげ、1960年代からは大手レーベルとの契約が切れたタンゴの名ソロ歌手たちやフォルクローレの人気アーティストと契約して往年のヒット曲集を多数制作し成功した。そうしたタンゴの伴奏の多くをオスバルド・レケーナが受け持っていたのはタンゴ・ファンにもよく知られているところだ。そのマイクロフォン・レーベルにおけるタンゴの最初のヒット作といっても良さそうなのが、今回紹介するクアルテート・パレー・ド・グラス (Cuarteto Palais de Glace) である。

パレー・ド・グラスはパリにあった同名の建物をモデルとして1910年頃、ブエノスアイレス・レコレタ地区に作られた建物であった。パレー・ド・グラスはフランス語で「氷の宮」の意味だが、実際アイススケートが出来るよう氷が張られたスケート場が内部にあった。しかし氷を張る装置にお金がかかりすぎたので、ほどなく木の蓋がされ、以後その場所はタンゴを踊るのに適したスペースとなった。折しもタンゴが場末のやくざ者の音楽から、パリで認められた社交音楽になりつつあった時期で、1920年代にパレー・ド・グラスはブエノスアイレスを代表する社交場の一つとなり、カナロ、フィルポ、コビアン、ガルデルもそのステージに登場した。

1944年に発表されたエンリケ・カディカモの作品「パレー・ド・グラス」(アンヘル・ダゴステイノ楽団=アンヘル・バルガス歌のレコードあり) はまさにこの時代の栄光を歌ったものである。

1932年、パレー・ド・グラスはブエノスアイレス市が管理することになり、国立美術館事務局となり、外部の装飾や屋根が取り除かれ、外観も変わってしまった。1954年からテレビの7チャンネルの臨時スタジオとして使用されたこともあったが、1960年に展示室 (Palacio Nacional de las Artes) となり、

現在に至っている。2004年に国家が指定する歴史建造物にも指定されている。(筆者は1990年代にマリア・グラニーヤが「パレー・ド・グラス」という場所でショウをやって好評を得ていたという話を聞いた記憶があるのだが、それがこの場所だったのかどうかは残念ながら確認出来ていない。)

直接関連のない話を長々と書いてしまったが、クアルテート・パレー・ド・グラスはこのパレー・ド・グラスの全盛期、1910～20年頃の雰囲気なたたえたグループということなのである。レパートリーはタンゴのみならず、ワルツ、ランチェラ、ポルカ、パソドブレと幅広く、曲も古典から1920年代のヒット曲、さらにはメンバーが作ったそれらしい作品も含まれている。アルバムにはメンバーについての一切の情報はないが、バンドネオンは一貫してレオポルド・フェデリコ (Leopoldo Federico) と考えて間違いない。力強い弾きっぷりはフェデリコ以外には考えられない。ピアノは、作品を提供していることから考えても、アティリオ・スタンポーネ (Atilio Stampone) と断定してよい。当時マイクロフォン・レーベルには自己のオルケスタでも、歌手の伴奏としても多数のアルバムを制作しており、いわばホーム・ピアニストの位置にあった。ある資料によれば、ギターを弾いているのは作曲家としても著名なマルシリオ・ロブレス (Marsilio Robles)、もしくはフェデリコと「パケ・バイレン・ロス・ムチャーチョス」で同僚であるドミンゴ・ライネ (Domingo Laine) だったとされ、コントラバスはこの時代の数多くの録音に参加しているエンリケ・マルチェット (Enrique Marchetto) だそう。演奏はひたすら快調なテンポでリズムをはっきりと刻みダンサブル、しかしバンドネオンやピアノのうまさは十分に発揮されている。1曲の演奏時間は短い、アルバムの収録曲数は多く、それもアルバム成功の要因だったように思われる。

クアルテート・パレー・ド・グラスの最初のアルバムが制作されたのは1960年頃である。

(1) Microfón I-3 CUARTETO PALAIS DE GLACE Volumen 1

- ①Jueves ②Desde el alma -vals- ③Re fa sí ④El viejito del acordeón -polca- ⑤Felicia
⑥Olga -vals- ⑦Tu olvido -vals- ⑧Don Juan ⑨Un guapo del 900 ⑩Palomita blanca -vals-
⑪El porteño -milonga- ⑫Sangre ecuatoriana -pasodoble- ⑬El entrerriano
⑭La refalosa -polca- ⑮Unión cívica ⑯Francia -vals- ⑰El choclo

このアルバムは曲順を変え、ポリドールからLPPM-1148「不滅の古典タンゴ」として、日本におけるマイクロフォン原盤の最初の日本盤として発売された。ただし日本盤に⑨は収録されていない。上記は私が所持しているペルー盤のジャケットに記載された曲順だが、実際の盤には⑨が入っておらず、日本盤と同じ16曲である。しかし他のインターネット上の資料で確認したところでは、私の所持するペルー盤とは異なるジャケットデザインで同番号のアルゼンチン盤には(ペルー盤のジャケットはなぜか後述のアルゼンチン盤(3)と同じ)、そちらには⑥と⑦の間にDerecho viejoが入っており、⑨も含め、全18曲が収録されたように書かれている(音は未確認)。第1集は18曲入りの徳用盤という趣旨だったのかもしれない。それにしても日本盤が2曲カットされているのは妙だが。ちなみに⑨はアティリオ・スタンポーネの作品となっている。



(2) Microfón I-39 CUARTETO PALAIS DE GLACE Volumen 2

- ①El internado ②Un placer –vals– ③Mi noche triste ④La mentirosa –ranchera– ⑤Sábado inglés
 ⑥Bella morena –pasodoble– ⑦El torito –milonga– ⑧La tablada ⑨Taquito militar –milonga–
 ⑩La morocha ⑪El aeroplano –vals– ⑫El ciruja ⑬Mate amargo –ranchera– ⑭Viejo rincón
 ⑮Lágrimas y sonrisas –vals– ⑯La guitarrita

第2集も同じ路線で、上記LPPM-1148とほぼ同時発売された日本盤ポリドールLPPM-1149「不滅の古典タンゴ 第二集」では⑧と⑨の曲順が入れ替わっているだけで収録曲は同じ。のちにASI 109として同じ収録曲・曲順のまま再発されており、ウルグアイではClave EC35022として発売されている。

**(3) Microfón I-46 CUARTETO PALAIS DE GLACE Volumen 3**

- ①Sentimiento gauchó ②Pabellón de las rosas –vals– ③La puñalada –milonga– ④Madreselva
 ⑤Calibre 45 ⑥El amanecer ⑦El bulín de la calle Ayacucho ⑧Inspiración ⑨Milonga del 900
 ⑩Rodríguez Peña ⑪Fuegos artificiales ⑫Aguatero ⑬La payanca ⑭Mano a mano

第1, 2集と比べるとぐっとタンゴの割合が増している。タンゴ⑤の作者は(B.Moro-Rigol-Nochero)という3人のクレジットになっているが、これは知る人ぞ知るエドゥアルド・ロビエラ四重奏団(ニチューレvn、スタンポーネpf、ロマーノcb)が「クアルテート・ロレンソ」という変名で録音したマイクロフォンの珍盤PROM-221 “Valsecitos, rancheras y milongas”の収録曲中7曲の作者名として使われており、スタンポーネ、ロビエラ、ニチューレの3人だとされている(ちなみにロビエラはこのアルバムではバンドネオンではなく、アコーディオンを弾いている)。ここでも3人クレジットになっているが、実際はスタンポーネの曲なのだろう。でも⑫ははっきりスタンポーネ作と記されており、違いはよくわからない。この1枚は日本では発売されなかったが、アルゼンチンではAHORA114として再発もされている。この1枚は実はオリジナル盤は所持しておらず、ジャケット裏の宣伝写真で番号しか確認できないが、おそらく上記14曲がオリジナル盤の時から収録されていたと思われる。



ド・フェデリコ作でもともとパ・ケ・バイレン・ロス・ムチャ
ーチョスのために書いたと思われる作品。

断言はできないが、クアルテート・パレー・ド・グラスのオ
リジナル・アルバムは以上の6枚だと思われる。(もしこれ以
外のオリジナル・アルバムをご存知の方がいればご連絡いた
だきたい)最後のアルバムでもまだ1960年代末だったのではない
かと思われる。しかし人気はあったようで、その後編集盤も出
ている。



(A) Microfón (USA) LMS-76036 Lo mejor del Cuarteto Palais de Glace <1976>

- ①El porteño ②Rodríguez Peña ③Desde el alma ④Canaro en París ⑤Bella morena
⑥Don Juan ⑦El viejito del acordeón ⑧El entrerriano ⑨Taquito militar ⑩Francia
⑪Mano a mano ⑫El sombrero ⑬Pabellón de las rosas ⑭La tablada ⑮Mate amargo
⑯A media luz

(B) Microfón=MICSA PROM-40060 Lo mejor del Cuarteto Palais de Glace <1979>

- ①Taquito militar ②Desde el alma ③Sentimiento gaucho ④Olga ⑤Silueta porteña
⑥Soñar y nada más ⑦El porteño ⑧La puñalada ⑨Ilusión azul ⑩El choclo ⑪Tu olvido
⑫A media luz ⑬Un placer ⑭Madreselva

Aはアメリカ盤、Bはアルゼンチン盤である。タイトルは一
緒だが、内容は異なっている。収録曲はすべてオリジナル・ア
ルバム6枚に収録されている。

単独CDは残念ながら2000年にたった1枚Microfón 2-493614
Lo mejor del Cuarteto Palais de Glaceが出たのみである(内容
は上記(B)と曲順まで同じ)。CDでこそ、この種の軽快な演
奏は楽しめると思うのだが...



追記：第2回でクアルテート・ロス・ポルテニートを紹介した際、バイオリンはロベルト・ギサー
ドあるいはレオ・リペスケルの担当と推測したが、先日オスカル・デル・プリーオーレがラジオで話し
ていたことによれば、このグループの最後のアルバム“La yumba”だけは、度々の来日でも知られ
る名手カルロス・アルナイス Carlos Arnaizが弾いたそう。

ブエノスアイレスの MARIA ～その成り立ちと魅力

吉村 俊司

はじめに

2013年に行われたタンゴ関連のコンサートで、幅広い音楽ファンの中で最も話題になったのは、6月29日に東京オペラシティで行われた小松亮太らによる『ブエノスアイレスの MARIA』であった。コンサートの内容については『タンゴランディア』2013年秋号にレポートしたが、本稿ではそれだけの話題を呼んだ『ブエノスアイレスの MARIA』という作品そのものについて、掘り下げてみたい。

作品の生い立ち

まずは、『ブエノスアイレスの MARIA』が書かれた経緯について探してみる。

1965年のアストル・ピアソラは、ニューヨーク公演と傑作アルバム『ニューヨークのアストル・ピアソラ』の録音、さらにボルヘスとのコラボレーション『エル・タンゴ』の録音など、音楽的なピークを迎えていた。しかし同時期に女性問題に端を発する私生活上の問題を抱え、1966年2月には妻のデデ・ウォルフと別居。前後して音楽的にも極度のスランプに陥り、曲が全く書けなくなってしまう。同年に占星術師オランヘルより「今後二年間にわたって個人的・感情的・創造的・経済的危機がかかるであろう、しかる後に問題を解決すべく、誰かがあるプランを携えて汝のドアをノックするであろう」と告げられる。1967年12月1日、そのお告げ通りにウルグアイの詩人オラシオ・フェレールがあるアイデアを携えてピアソラ宅のドアをノックし、『ブエノスアイレスの MARIA』の共同制作が始まる…というのが数年前までの定説であった。¹

しかし実際のところ、この作品の成り立ちにはもう一人重要な人物がいた。女優、歌手、ダンサーのエグレ・マルティンである。1964年にテレビ番組で共演したことが縁で、マルティン主演の映画『奇妙な優しさ』（ダニエル・ティナイレ監督）の主題歌「闇の女グラシエラ」をピアソラが作曲。1966年頃には二人は親密な関係となってしまう（マルティンは既婚、5歳の娘もいた。ピアソラが妻と別居するに至った発端は別の女性）。やがてマルティンはピアソラにあるオペラのアイデアを提案し、ピアソラが作曲、マルティンが筋書き、舞台美術、照明のスケッチなどを書き始める。フェレールがピアソラ宅にやってきたのはまさにそのタイミングで、フェレールはマルティンの許可を得てこのスケッチをふくらませていくこととなる。マルティンは主役に想定され、読み合わせにも参加。こうして三人の共同作業で『ブエノスアイレスの MARIA』の原型が生まれたのである。

しかし、程無くこの体制は終止符を迎える。1967年12月24日、ピアソラ宅でのクリスマスを祝うパーティーにて、マルティンを迎えに来た夫で弁護士のラロ・パラシオスに対し、ピアソラはあろうことか「彼女と結婚したい」と申し出てしまう。マルティンは夫を選び、二人の関係は終焉。以後『MARIA』はピアソラとフェレールによって書き進められることとなる。ピアソラとマルティンの関係は当時大スキャンダルとなったが、その後このいきさつは封印され、長らくマルティンは「初期の主役候補」として認識されるにとどまっていた。^{2, 3}

マルティンがこの作品に及ぼした影響がどの程度のものであったのか、詳細はわからないが、少なくとも彼女がフェレールに伝えた演出上のアイデアについて、彼女は「いったい作品のどこにそれらの形跡が残ったのか、私にはわからない」と語っている。一方で、破局後にピアソラから送られたメモにフェレールが「永遠に私のマリアである君に口づけを」と書き添えて来たことに対して「嬉しかった」と述べ、またメモへの返信には「マリアの面倒をしっかりと見るように」と返している。³ 自らのアイデアが『マリア』として実を結んだことには誇りを持つと同時に、ピアソラ＝フェレールの作品として『マリア』が発表されたことについては尊重する姿勢がうかがわれる。

ともあれ、ピアソラとフェレールによって『マリア』は書き進められた。二人の精力的な取り組みにより1968年1月には作品自体も概ね形になってくる。3月にはモダンなフォルクローレを歌っていたアメリータ・バルタールを見出し、マリア役に抜擢、彼女も最終的な仕上げに協力しながら3月31日に完成に至る。^{1, 2, 3}

なお、作品の形式は”オペリータ”すなわち”小オペラ”とされたが、オリジナル盤のライナーノーツによれば、これは様々な要素を持つこの作品に対して便宜的に付けられた名前である。

オラシオ・フェレール

ここでオラシオ・フェレールについて、『マリア』が書かれるまでの間の経歴を簡単に紹介しておく（ピアソラについては今更説明の必要もないと思われるので省略する）。

フェレールは1933年ウルグアイ、モンテビデオ生まれ。少年時代からタンゴを好み、作詞作曲や楽器演奏も手がける。1954年にはタンゴ研究団体《エル・クルブ・デ・ラ・グアルディア・ヌエバ》を結成。パリに留学していたピアソラにファンレターを送り、翌年帰国途上でモンテビデオに立ち寄ったピアソラと出会う。以後二人の交流は続いていた。1959年にはタンゴ研究の著作も発表し、1964年には最初の詩集『ロマンセーロ・カンジェンゲ』を出版。1967年には同作品の朗読のレコードをギターのアグスティン・カルレバールの伴奏を得て録音している。^{1, 2}

公演と録音

こうして書き上げられた『ブエノスアイレスのマリア』は、1968年5月8日、ブエノスアイレスのプラネータ劇場で初演、そのまま8月末まで公演は続いた。当初1部2部それぞれ9場ずつの計18場からなるものであったが、公演を続けるうちに若干削ぎ落とされ、最終的には8場ずつの計16場となった。¹

この時の公演メンバーは以下の通り。

女性歌手（マリア、マリアの影）：アメリータ・バルタール

男性歌手（パジャドール、夢見る雀のポルテーニョ、古き大盗賊、精神分析医、日曜日の声）：

エクトル・デ・ローサス

語り（小悪魔）：オラシオ・フェレール

バンドネオン（演奏者であると同時に役名でもある）：アストル・ピアソラ

ピアノ：ハイメ・ゴシス

バイオリン：アントニオ・アグリ、ウーゴ・バラリス

チェロ：ビクトル・ポンティーノ

ビオラ：ネストル・パニック

コントラバス：キチヨ・ディアス
 ギター：カチヨ・テイラオ
 フルート：アルトゥーロ・シュネイデル
 パーカッション：ホセ・コリアーレ、ティト・ビシオ

当時のステージについて、2013年のインタビューでアメリータ・バルタールは「有名でない、地下にあるギャラリーの一部のような場所で、小さいけれど雰囲気のある劇場だったわ。舞台装置は何もなかった。ピアソラは作品を“オペリータ”と名付けたけど、実際の作品形態は“オラトリオ”だった。舞台の動きはなく、下に楽団がいて、私達が上に構えているだけのシンプルなセット」と語っている。⁴

メディアでの評価は賛否が別れたが、多くのミュージシャンが劇場に足を運び、その大半がこの作品を強く支持した。特にブラジルからやって来たヴィニシウス・ヂ・モラエス、バーデン・パウエルらからの賛辞はピアソラにとっても嬉しいものだった。²

一般の観客動員は、公開当初からしばらくは満席になる日もあったが、後半は客足が遠のき、最終的には大赤字となった。ピアソラは資金調達のために愛車を売るはめになったが、それでもこの作品を上演したことに満足感を得ていた。

録音については、ピアソラが当時契約していたポリドールは商業面から難色を示した。そこへ当時の新興レーベルであるトロバが名乗りを上げ、ピアソラはポリドールとの契約を破棄、同レーベルからレコードがリリースされる運びとなった (Trova, TLS-5020/2)。^{1, 2} 参加ミュージシャンは劇場公演と同じ。CD化もされており、日本でも1998年と2000年に発売されたが (オーマガトキ、OMCX-9002 / ビクター、VICC-60220 ~ 1)、残念ながら現在は廃盤となっており、輸入盤に頼るしかない。



作品

前述のとおりこの作品は、2部16場からなっている。曲目は以下の通り。

第1部

- 第1場 アレバーレ Alevare
- 第2場 マリアのテーマ Tema de María
- 第3場 狂ったストリートオルガンへのバラード Balada para un organito loco
- 第4場 カリエーゴのミロンガ Milonga Carrieguera
- 第5場 フーガと神秘 Fuga y misterio
- 第6場 ワルツになった詩 Poema valseado
- 第7場 罪深きトッカータ Tocata rea
- 第8場 古代の盗賊たちのミゼレーレ Miserrere canyenge

第2部

- 第9場 葬送に捧げるコントラミロンガ Contramilonga a la funerala
- 第10場 夜明けのタンガータ Tangata del alba

- 第11場 街路樹と煙突への手紙 Carta a los árboles y a las chimeneas
 第12場 精神分析医たちのアリア Aria de los analistas
 第13場 小悪魔のロマンサ Romanza del duende
 第14場 アレグロ・タンガービレ Allegro tangabile
 第15場 受胎告知のミロンガ Milonga de la anunciación
 第16場 タングス・デイ (神のタンゴ) Tanguis Dei

文献1の要約を引用して概略のストーリーを紹介する。

荘厳なテーマに乗せて小悪魔がマリアの声を呼び寄せる。マリアはギターの爪弾きに乗って登場し、吟遊詩人と小悪魔がマリアの生い立ちを物語る。マリアは一週間で成人を迎え、夢見る雀のポルターニョ（ブエノスアイレスっ子）が彼女の人生を語る。マリアは生まれた街を去るが、逃げ込んだ夜の世界でバンドネオンに墮落させられる。小悪魔はバンドネオンと決闘するが、マリアは下水溝の地獄に落ちて死んでしまう。ここまでが第一部。

第二部はマリアの葬儀から始まる。マリアの肉体は埋葬されるが、その影はブエノスアイレスをさまよいつつ、下町の街路樹や煙突に手紙を書いたかと思えば、精神分析医のサーカスでありもしない思い出を語らせられる。マリアに惚れていた小悪魔はマリアの影を探し求め、マリアの影はやがて小悪魔の子を身ごもる。そして日曜日の朝、マリアの影が生んだ子供は、もうひとりのマリアだった。¹

要約で読んでもところどころ意味不明な箇所があるが、フェレルの詩はそれ以上に難解で、シュールレアリスム的な表現が随所に見られる。しかしながら、マリアがタンゴそのものの象徴であることはおぼろげながらも感じられる。すなわちブエノスアイレスの辺境に生まれ、夜の街でバンドネオンと結びつき、やがて墮落して死んでしまうが、再び同じ悲しみを背負って甦る…。

一方で、マリアという名前からは容易にキリスト教的な連想もはたらく。聖母マリアであり、またマグダラのマリアでもある存在。なおかつイエスではなく自らを産んで再生する存在。曲名や詩にも宗教的用語がちりばめられており、ブエノスアイレスの人々をはじめとする欧米キリスト教文化圏の人々にとっては様々に想起させられるものがあるのではないかと思われる。

また、小松亮太は、1968年という時代背景の影響の可能性を指摘している。⁵ 当時はオンガニーア将軍による軍事政権の強権的な弾圧政治が行われた時代である。フェレルのシュールな詩の中には当時の人にしかわからないような、政治への批判、世情を背景とした皮肉、ジョークなどが含まれていたのかもしれない、という考察は一考に値する。

楽曲は、ピアソラがその持てる全ての音楽的要素を盛り込み、それまでのスランプを完全に払拭した出来であると言えるだろう。まずは何をおいてもタンゴがその土台にあり、タンゴを生み出した一つの要素である大草原のフォルクローレの響きも聞こえる。加えてクラシック、ジャズ、1960年代のポップスや映画音楽的な表現までが散りばめられている。これらがフェレルの詩と有機的に結びつき、難解な詩を劇的なストーリーとして聴く者に提示する。

アメリカタ・バルタールの声の存在感もこの作品を魅力的なものにした非常に大きな要素である。声はハスキーで美声とは言いがたく、技巧的にも決して上手い部類ではない歌手だが、その暗く影を帯びた歌声はマリアの物語にぴったりと合っている。

ピアソラ以外のアーティストによる録音と公演

ピアソラ自身は1968年の公演以降、この作品を上演することはなかった（「フーガと神秘」のみ単独の楽曲として何度か演奏されている）。しかしながら、特にピアソラの没後に彼の音楽が広く認知されるようになるとともに、クラシック界を中心に様々なアーティストがこの作品を取り上げて上演し、また一部で録音も残されている。特にステージにおいては「タンゴのオペラ」というコンセプトから、多くのケースでコンサート形式ではなく演技を伴うオペラ形式で上演され、またしばしばタンゴ・ダンサーが加わるケースも見られる。原作者たちの意図とは違う演出ではあるが、それだけ演出家等のイメージネーションをかき立てる作品であるとも言えるだろう。以下、特に公演についてはほんの一部ではあるが、興味深いものをご紹介します。

録音

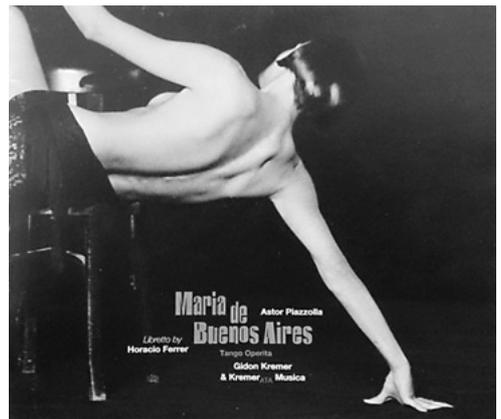
Bruno Pizzamiglio他 (Milan, 7313 835602-2)

指揮ブルーノ・ピッツァミグリオ、ピアノと音楽監督はホルヘ・スルエータ、バンドネオンはネストル・マルコーニ（アルバムのタイトルには演奏者の名前がない）。ピアソラの存命中の1987～9年に行われた公演の1989年リオデジャネイロでのライブ録音。曲順が入れ替えられたり、一部で複数の曲のフレーズを繋ぎあわせられたりしている。さらに歌手は全てクラシック声楽的な発声で歌い、語りも歌に置き換えられている。残念ながら新しいものを作ろうという意欲だけが空回りし、原作への敬意が感じられない結果と言えよう。ピアソラ自身「オペラ化についてはあまり気に入ったものにはならなかった。私のイメージとは少し違ってしまった」と語っている。¹



Gidon Kremer & KremerATA Musica (Teldec, WPCS-6380/1)

早くからピアソラの音楽に意欲的に取り組んできたバイオリニスト、ギドン・クレーメルによる1997年の録音。語りに作者のオラシオ・フェレルが参加し、歌手もフリヤ・センコ、ハイロと申し分ない布陣で、彼等のパフォーマンスは素晴らしい。楽曲の構成もほぼオリジナルに準拠。ただし第一部に「受胎告知のミロンガ」の歌詞を変えただけの「私はマリア」が挿入され、この後これが『ブエノスアイレスのマリア』のテーマ曲のように広く歌われるようになったことについては賛否がある。レオニード・デシャトニコフの編曲は概ね原曲に忠実だが、楽器の置き換えなどでよりクラシック的な響きとなっている。8人編成のアンサンブル《クレメラータ・ムシカ》の演奏はタンゴ的なリズムのしなやかさに欠けており、編曲と合わせてタンゴを産み出した混沌や猥雑な雰囲気は感じにくい。ただ、その分厳粛な空気感をもち、一つの表現としては聴くに値する。



Mariana Rewerski, Triade (Membran, 233462)

2004年2月～3月の録音。アルゼンチン出身のメゾソプラノ歌手マリアナ・レウエルスキと、ピア

ソラの音楽を演奏するために結成されたスイス人を中心とする5人編成の室内楽アンサンブル《トライアド》によるもの。レウエルスキが語りを含む全ての声のパートを一人で演じており、演奏も小編成なので、全体に小ぢんまりとした感じは否めないが、意欲は買える。

Cascade Festival Of Music Chamber Orchestra, Murry Sidlin (Koch, KIC-CD-7668)

2005年6月に米国オレゴン州ベンドのタワー・シアターで録音されたもの。同地で行われていたカスケード音楽祭の25周年記念として翌2006年にリリースされた（残念ながら同音楽祭は2年後に幕を閉じる）。指揮マリー・シドラン、女性歌手ジェニファー・ハインズ、語りエンリケ・E・アンドラーデ、男性歌手ペペ・ラファエル、バンドネオンにホルヘ・ココ・トレビソンノ。スコアはオリジナルを尊重しており、演奏の響きも良いが、躍動感は不足している。歌手と語りについても若干の物足りなさが残り、特にアルトの柔らかい発声は違和感がある。

Nueva versión de Marcelo Nisinman (Acqua, AC237)

バンドネオン奏者マルセロ・ニシンマンによる「新バージョン」で、2004年から2008年にかけての録音。この長い期間から、完成までいろいろ困難があったことが伺われる（語りのホルヘ・ワイズブルドは2007年に亡くなり、ペルサ・スエロが後を継いでいる）。全体の構成はオリジナルに準拠するが、スコアにはかなり手を加えている。和声的にはピアソラ以上に不協和音が多く、管楽器の増員、プリペアド・ピアノ（ピアノの弦に物を挟んだり乗せたりしてノイズや打楽器的な音色を出すもの）や極端に歪んだエレクトリック・ギターの使用など、かなり前衛的と言えるだろう。歌手のラウル・ラビエ、アリシア・ビグノラは好演。ニシンマン自身はこの編曲の核心を「伝統の変化によるブエノスアイレスの音楽の語法の変容と刷新」と、「当時のブエノスアイレスの音楽界で前衛芸術と目されながら今となってはそうでなくなったような表現」への深い問いかけにあるとしている（ライナーより、要約は筆者）。意図が明確な分共感できる部分もあるが、聴き方によっては原作への冒瀆と感じられる部分も少なからずある。とはいえ、ピアソラ自身の音楽的な姿勢を考えると、一概に否定することもできない取り組みではある。問題作であることは間違いない。

Amelita Baltar / Leonardo Granados / Guillermo Fernández / 小松亮太

(Sony, SICC 1644 ~ 5)

小松亮太他による2013年6月29日東京・初台のオペラシティでのライブ録音。オリジナルのマリア役だったアメリータ・バルタールが実に45年ぶりにマリアを演じ、男性歌手にレオナルド・グラナドス、語りにギジェルモ・フェルナンデスが参加。演奏は小松亮太と、今回のために結成された日本人のみによるアンサンブル《Tokyo Tango Dectet》。さまざまな録音の中でも最もオリジナルに忠実で、



なおかつ最も内容的にも充実していると言えるだろう。小松はライナーで以下のように述べている。

過去にあった「マリア」の様々な演奏をCDや動画サイトで聴き漁って一つの結論に達した。僕らが実現すべきは「タンゴとしての『ブエノスアイレスのマリア』を演ること」に他ならない。

ピアソラに憧れてはいても、タンゴを知っているわけではない（主にヨーロッパやアメリカの）ミュージシャンが繰り出すリズムやフレージングには、タンゴの演奏に於いて致命的な「無用な弛み」が常に付きまとう。一方アルゼンチンの人々の演奏は「ピアソラの二番煎じをやるわけにはいかない」という、ある種のプロ意識が先走る形で原曲の持つ魅力から作為的に遠ざかっている。

これまで見てきたいくつかの録音からも、上述のコメントは的確であると言えよう。そして彼等自身の演奏も、その意思表明を具現化したものとなっている。

Eduardo Issac (GHA, 126.051)

最後に異色作の紹介。アルゼンチンのギタリスト、エドゥアルド・イサークの録音で、2000年に発表されたもの。全体から8曲の抜粋版ながら、驚異的な技巧によるギター独奏でマリアの世界を完璧に表現している。これは一聴に値する。



公演

1987年 パリ トゥールコアン市立劇場

録音の項でも紹介した、ピアソラの存命中に行われた公演の初演。バンドネオンはこの時点ではファン・ホセ・モサリーニが参加しており、またファン・カルロス・コーベスが振付を担当している。上演内容については録音の項を参照されたい。

1999年2月 東京 シアターコクーン

ギドン・クレーメルらによる来日公演。録音の項で紹介したスタジオ録音のCDでは男性歌手はハイロだったが、公演ではホセ・アンヘル・トレージェスが参加している。コンサート形式。内容は概ねCDに準ずるが、より熱を帯びた演奏であった（筆者はNHK-BSで放送された録画を視聴）。

2002年 東京 オーチャードホール

イタリアのミルヴァらによる来日公演。ピアソラとの『エル・タンゴ』でも大成功を収めたミルヴァが2000年より各地で公演していたもので、男性歌手にはクレーメルの公演にも参加していたホセ・アンヘル・トレージェス、語りにダニエル・ボニージャ・トーレス、演奏はイタリア人を中心とした9人編成の《タンゴ・セイス・アンサンブル》。またダンサーとしてリッカルド・バリオス、マリーナ・フルが参加している。出演者の演技を伴うオペラ形式で行われ、ミルヴァとトレージェスの歌唱の充実、演奏陣の健闘により、非常に印象深い公演となった（筆者は劇場で鑑賞）。

2003年 ブエノスアイレス ボルヘス文化センター

アストル・ピアソラ財団による公演。歌手はホセ・アンヘル・トレージェスとパトリシア・パローネ、語りはファン・ビタリ、演奏はアストル・ピアソラ財団五重奏団を中心にミュージシャンを加え

たアンサンブルだった模様。本作品の35年ぶりのブエノスアイレスでの上演となった。⁶なお同財団は2012年、2013年にもブエノスアイレスで公演を行っており、この時は語りはフアン・ビタリ、歌手はセバ스티アン・オルツとアレハンドラ・ペルスキー（2012年）もしくはノエリア・モンカーダ（2013年）。⁷

2007年 ブエノスアイレス 国立セルバンテス劇場

マルセロ・ロンバルデーロ、オスカル・アライスの監督による公演。歌手はギジェルモ・フェルナンデスとフリヤ・センコ、語りはオラシオ・フェレール。音楽監督をペペ・カルリとネストル・マルコーニが務めた。⁸

2012年 米国カリフォルニア州サン・ペドロ ワーナーグランドシアター

ロングビーチ・オペラによる公演で、同オペラの芸術監督アンドレアス・ミスティークが制作したものである。演奏者などは不明だが、舞台を1970年代から80年代にかけての「汚い戦争」（アルゼンチン軍事政権による国家テロ）の後に設定して演出された。音楽と詩には一切手を入れず、照明や映像などで表現したとのことで、興味深いものがある。⁹

このほか、ピアソラ生誕90周年の2011年から没後20周年の2012年にかけての期間を中心に、世界各地で様々な団体による非常に数多くの公演が行われている。¹⁰

2013年 東京 オペラシティ

小松亮太他による公演。詳細は録音の項、ならびに『タンゴランディア』2013年秋号を参照されたい（筆者は劇場で鑑賞）。

おわりに

何度聴いても新たな魅力が発見される『ブエノスアイレスのマリア』。今回、音盤以外の資料にもあたりながら別の角度からこの作品に向かい合うことで、個人的にも新たな発見が数多くあった。それをこのような形でアカデミー会員の方々と共有できることは大変うれしい。一方で、とっつきにくくタンゴらしくない、とこの作品を敬遠されている方も少なくないのではないかと思われる。それらの方にとって、本稿がこの作品に興味を持っていただくきっかけとなることができれば、筆者としてはこの上ない喜びである。

1 『アストル・ピアソラ 闘うタンゴ』 斎藤充正（青土社）主にpp.258～282、504～505

2 『ピアソラ その生涯と音楽』 マリア・スサーナ・アッシ、サイモン・コリアー（松浦直樹 訳、斎藤充正 協力、アルファベータ）主にpp.126～132

3 『ピアソラ 自身を語る』 ナタリオ・ゴリン（斎藤充正 訳、河出書房新社）主にpp.289～297

4 『伝説のマリア、甦る！ ピアソラ=フェレール『ブエノスアイレスのマリア』の初演から45年。アメリータ・バルタール、初来日インタビュー』 斎藤充正（鈴木多依子 通訳、月刊ラティーナ 2013年8月号）

5 『ブエノスアイレスのマリア総論』 小松亮太（小松亮太オフィシャルブログ「そんなわけで」 <http://ryotakomatsu.eplus2.jp/article/365869917.html>）

6 José Ángel Trelles - Todo Tango <http://www.todotango.com/spanish/creadores/jatrelles.asp>

7 Fundación Ástor Piazzolla (<http://fundacionastorpiazzolla.blogspot.jp/>)

8 Sitio Oficial de Guillermo Fernández (<http://www.guillermofernandez.com/>)

9 María de Buenos Aires - Long Beach Opera (<http://www.longbeachopera.org/2012-season/maria-de-buenos-aires>)

10 María de Buenos Aires - Wikipedia (http://en.wikipedia.org/wiki/Mar%C3%ADa_de_Buenos_Aires)

カルロス・ガルデル (2)

Carlos Gardel (2)

大澤 寛 (訳)



“CARLOS GARDEL”, Tango de colección 20 (Clarín (2005))
第4章の筆者は Luis Chitarroni

第4章 思い出 よく知られた作り話の中のガルデル

カルロス・ガルデルは、タンゴという存在を普遍的に書こうとする人たち、つまりどんなに強く願ったところで、必ずしも波及効果や利益を生み出すような合意が生まれるわけではないものを書こうとする人たちのために存在する。ガルデルは、人々が絶対的な孤独に苛まれるとき、適当な言葉がないので“絶対的な”とするのだが、駆け込んで訴える相手なのだ。ガルデルは、その時代の様式に染められたひとつの現実——或る場所、或る時期、ひとつの国、ひとつの時代——を我々に考えさせてくれる声なのだ。そして、時代の様式と言うものはさらに多くの物ごとを規定する。道徳性、行動様式、見栄、優雅さ、過剰な優雅さなど。ボルヘスの例を挙げよう。これはガルデルとボルヘス両者の意思にかかわりはない。ボルヘスに関して言うなら、彼は意図的にガルデルを悪く言ったものだ。それは、世間によく知られているように、ボルヘスには音楽的なセンスがなく社交性も欠けていることが原因である。多くの人々もそうであるように、ボルヘスは自己に固有のものを、実は固有な現象ではなくて世間一般に普通にあるものなのに、容認することが出来なかったからである。ガルデルに関して言えば、ブエノス・アイレスの文筆家たちを気遣って、リカルド・グイラルデス* (* Ricardo Güiraldes 1886 ~ 1927作家、アルゼンチンの裕福な家系。父親はブエノス・アイレス州の地方長官を務めた) の弟以外はこっぴどくやっつけることをしなかったが、その理由は、本当の友情と言うものは浪費されたり壊されたりするものではなく、せいぜい友人のそのまた友人との間では、分かち合えるものだし、納得し合えるものだからだ。また敢えて“仲間”になろうとする人たちとの間でも、今やガルデルは、聖者の列に加えられることに、それは避けがたいことなのだが、抵抗するあの声なのだ。はかなく一時的なアイデンティティや、人間的で長続きのする気前の良さなどを十分には表現できない言葉を吐きながら、どのレパトリーにも驚くような言い方がいつも出て来る。例えば“製造元の判らない古い家具*” (*Mano a manoの歌詞に出て来る) とか“どうしてる？ 俺が判るか？”など。

ガルデルはまた、ガルデルを愛する人々の寛大な心の奥の襞の中に隠れ住む専門家たちのためにも存在する。私の知己である二人の専門家の名を挙げる。ドリーナ* (*Alejandro Dolina 1945~ 作家・作曲家・ピアニスト・ラジオやテレビ番組の演出家。1998年自身のオペリータ [Lo que me costó el amor de Laura] を Mercedes Sosa や Ernesto Sábato 等の協力を得て演出) と エストゥラスラス* (*Estrázulas 第1章に既出) というラ・プラタ河の両岸*の様な二人のことだ (*ドリーナはアルゼンチン人。エストゥラスラスはウルグアイ人)。適度の誇張は用いるが、言いつのることも固執もせず、そして冗漫にならないための適切な言葉を用いる二人。ガルデルの重要性を問う質問の中には、枝葉末節にこだわる皮相的なものが二つある。第一の質問は、

典型的にガルデルを表象するものは何かという点に関するものである。 gaucho の扮装をしたガルデルは田舎風の、粗野な、何か足りない印象であり、タキシードを着たガルデルは都会的でフランス風かイタリア風に見える、どちらでもいいことだが。タンゴとアルゼンチンと言う国民性を扱う商売人であり、朝早く市場にやって来る奇妙な人形のようなでもあり、アルゼンチンから輸出されて、あらゆる国籍の大衆に受け入れられて成功したコンパドリート*の一種でもある。

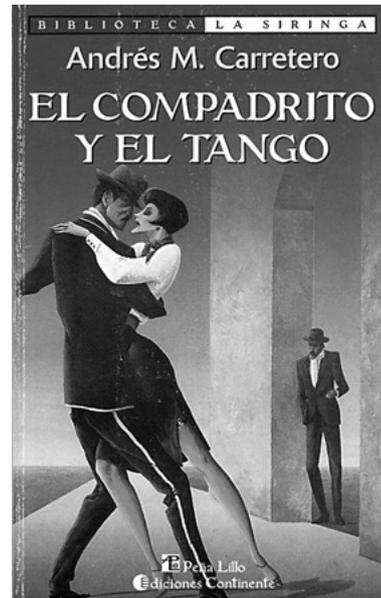


*アルゼンチン・タンゴによく登場するコンパドレcompadre, コンパドリートcompadrito の解説をアルベルト・松本氏の著作から引用する。

コンパドレ：プライドが高く勇敢で賢い親分的な男性

コンパドリート：コンパドレになろうとするのだが（未だなれない）、生意気で卑怯な喧嘩好きな子分

(参照) 明石書店刊 アルベルト・松本著 「アルゼンチンを知るための54章」 Peña Lillo刊 Andrés M. Carretero 著 「El compadrito y el tango」



この種の考察のひとつでも正しいとするならば、国民性と言うものの価値は価値そのものである以上、外見的な、余剰な価値に何の意味があるだろうか？（昔がどうだったかは知らないが、国民性と言うものは、アイデンティティを仮定することから生じた抽象概念だ） ビオイ・カサーレス* (*Bioy Casares 1914~99 作家。アルゼンチンの裕福な家庭に生まれた。ファンタジーやSF を含む多彩な作品を発表。ボルヘス

の親友でもあった。Wikipedia などから)の愉快的研究* (*Memoria de la pampa y los gauchos*) (*大草原と gaucho の記憶)が、厳しい観察の結果として伝えるものは、ブエノス・アイレスの住民には、古くから言われているように、衣服の色の感覚が欠けていたという事実である。貴族階級と彼らに課せられる経験主義的な試験のためには、否定できない証拠、偶然に見つかるものではなく殆んど運命の神経症とでもいうべきものが優先する。

もうひとつの質問は価値にまつわるものであり、そして同時にまさしく必要条件として少々の悪意を必要としている。それはお喋りなボルテーニョが、殆んど一人きりでも始めるトーナメント試合である。誰に勝つのかと言えば、親しい人やお気に入りの人に勝つのではなくて、他人それも最初に出会った他人に勝つためである。模倣者に対するオリジナルの優越性、つまりチャップリンに対するバスター・キートンの、ビートルズに対するローリング・ストーンズの、シナトラに対するトニー・ベネットの優越性があるからと言って、もうかなり古くなったウォク (*wok 英語 中華料理用の鍋)から、あるいはもう完全に使われなくなっても腐った苦味のするチーズのカッティング・ボードから、離れて行かなかった人がいるだろうか？ 我々が好感が持てずに避けているオリジナリティと言うものには、もちろん正当な称賛が与えられることを否定するものではない。

しかし現在では、メディアが調べ挙げている細かな周知の事実が、我々を幽霊みたいなものにしてている。だから我々自身をよりよく理解するには、言いかえれば先駆者の具体的なリアリティを前にして、少なくとも我々自身の非現実性をよりよく理解するためには、あの有名な先史時代の(先史時代ということにしよう。つまり我々が生まれる以前ということだ)幽霊を調べることで十分なのだ。ガルデルの声は、いつもそうなのだが、幽霊の役割を公然と示している。その声は、子供の頃から聞いていた(覚えているつもりでいる)あの神話の世界の声である。“Percanta que me amuraste, ,” (*俺を見捨てたあの女...) 年若い未来の幽霊が、ようやく理解できる物事を歌う聞き違えることのないはっきりした声。心にも血管にも酸素を取り込んだ声。詩句を際立たせた歌い方。声の調子。役割とその表出は完璧なものだ。厳密に何時とは言えないが、或る時点まではそれを疑っていた。しかしその後はもう疑っていない。ガルデルは日毎に上手く歌ったことを。

私はガルデルの死から23年後、つまりガルデルが未だ——今はどうか知らないが——我々の家庭でのよくある作り話(それは段々拡がってアルゼンチン国民の間の親しい作り話になって行く)の一部であった頃に生まれた。私の父親はガルデルより23歳若くて、疑いも無くガルデルの持つ拒絶できないものを尊敬しており、またさらに疑いも無くガルデルに対する競争心などが生まれなことを承知していたが、彼がガルデルについて語ったことなど特殊な要素は排除しよう。

ガルデルと言う聖人伝に登場する役者は、我々が自由に裁量できる。残された出生証明書などが見せてくれるものは、アイロン掛け女だった母親、トゥルーズで生まれたこと、ブエノス・アイレスの下町での貧しいが便利な生活、年齢と名声とが両立するというこの上ない栄光である(若いうちに成功したという事実が、その後が続いて経験する新しいものへの挑戦を妨げることになる。感動したり衝撃を受けることがなくなるからだ)。

ミュージシャンの家庭の将来にとって、私の父親はその家庭を捨てたのだが、あの犯罪的な芸能界のニュースが齎したものが我々をさらに傷つけることになる。私の祖父や伯父たちの友人であるデルフィーノ(Delfino)から教えられたことは、ガルデルの経済状態の浮き沈み、出生や遺言執行人の問題、ガルデルが“あの馬鹿”といつも呼んでいた或る人物——誰だったかは覚えていないが——に関する決定的な宣告などである。さらに悪いことに、遠い親戚になる従兄弟の一人が——二次的な関係であ

り音楽関係者ではない——ガルデルのファンであり、墓に花を捧げに来る常連でもあった。他人を仇名で呼ぶ時代だったが、その人物には“Pichurra” * (* “ピチューラ” 不明。どのルンファルドの辞書にも出ていない。ネイティヴに訊ねても、‘けち’とか‘男性器が小さい’などの極端に悪い意味だろうという) という良くない名がついた。そして献花のことを別にして、その度に家では大笑いになるのだが、問題は彼が我々をしつこく尋ねて来るようになったことだ。その仇名は、仇名より以前に“従兄弟”だったのだが、私に女性を想像させるものだった。フロイドによって発見され、男性と言うよりは女性に属する多形性凶悪質という用語かもしれない。問題の人物の外見は、少なくとも私にとっては、その意味もなくつまらない疑いを晴らすものではなかった。ガルデルのことをカルロスと呼びながら、絶え間なく話し続けた。Pichurra が話したことと言えば、例えば“カルロスが酒類を控えるよう節制を勧めた”とか“夜が更けて、そう、そんな或る夜、カルロスは、もっと節制するようにと言ったものだ”など。さらにPichurra は言った。“カルロスは太る傾向があった。肉付きが柔らかくなり、色がタルクみたいになくなった。何でも好きだったよ。カルロスははっきりしないこと、曖昧なことが嫌いだった。私のことも嫌いだった”彼の独り言めいたお喋りが長い間続いた頃、Pichurra の頭はその季節の嵐に会ったせいで巻き毛が解けて、彼をベラスケスの絵に描かれる貴婦人の持ち物である一種の小びとみたくに見せていた。“ああ、柔軟体操か。よくジムに通っていたよ。ジムで身体を鍛えていたんだ。そうやって。カルロスは我々にも教えてくれたよ。真似しろって。相手によって違うやり方で。“レモ・グリエルモ (Remo Guglielmo) には女房に甘い男と言うし、モデスト (Modesto) のことは見習い水夫と呼んでいたよ” Pichurraの想像の産物なのに確信に満ちた長い話の最中に、鋭く長い“ゴール”という叫びが奥の方から聞こえた。あり得ないことではなかった。1966年のワールド・カップが行われていたのだ。アルゼンチンはあまり成績が良くなかったのだが。奥の方から聞こえたその声には何やら満足げな響きがあったが、ラモーナ・ガラルサ* (*Ramona Galarza *アルゼンチンのフォルクローレやシャマメの歌手。1936年生まれ) の声を取って代わられた。

(原文はここで2行空を置いている)

年月とともに、特ダネだと信じていたこうしたニュースや個人の独白みたいなものは、同じような内容だったり、偶然が齎したものであったりして、がっかりさせられるものであることが判って来た。誰からも脅されないなら、こうしたことをもう告白してもいい頃だ。実際、ガルデルが教える通り、方法や手段も果たすべき役割も告白することにある。そして私が気付いたことは、これまでに述べたことが、一般的な、そして(多分)特殊なものでも余りにも楽観的なもので、陶醉状態にあるような、誇大妄想的なものだということである。単なる大風呂敷だったのかも知れない。年月が経つにつれて、私は従兄弟のPichurra からますます遠ざかったが、気がついたことは、私と同じ時代に育った人たちの多くは異なる結びつき方で繋がっていた。確かにエル・トロペゾン (El Tropezón) やロス・アンヘリートス (Los Angelitos) に集まる仲間の構成員は同じで、ラシング (Racing) やウラカン (Huracán) の常連たちは多分それらとは異なっていたが、私と同様に、ガルデルとの関係をとて親しいものとして共有していた。

別の世界でも同様の現象があるかどうか? ある。例えばアメリカ合衆国にはBing Crosby の、Frank Sinatra の、Elvis の隠された秘密を守っている人々がいる。私はそのことを信じない。何故ならば、家族的な秘密のルールは、唯一ガルデルの声が決めるものであり、そのこと自体が守護すべき秘密であり、ガルデルの他との違いを生みだしているものはガルデル自身による複製であるからだ。そのルールは、以下に述べる通り、練習し実演することの連鎖と継続性を生み出すものでない限り、

ガルデルの信奉者たちや追従者たちの気晴らしとは関係の無いものだ。二重契約ともいえる。ガルデルの声とそれを聴く人々との関係は、その人々とこの文の読者との関係もまた同様なのだが、それは信仰なのだ。

結局、ファンとしての各個人がどのようにして自身の仲間を作り、その管轄区域のパトロールを行うのかを訊ねてみると驚くべき結果が出る。私の父親の同世代であるフーリオ・コルターサル (Julio Cortázar*)は、その著作“La vuelta al día en ochenta mundos” (* “80の世界を1日で一周”)の中の短いエッセーの中で、純正な二人のガルデルと単なる本物の人気アイドルとしてのガルデルを区別している。

*Julio Cortázar 1914-1984 アルゼンチンの小説家。仏語・英語に精通。1951年パリに亡命。代表的な作品はボルヘスの系譜につながる幻想的な短編集「遊戯の終わり」(1956)や、パリとブエノス・アイレスを舞台とする2組の男女を描いた「石蹴り遊び」(1963)など。エッセイ集には上記の「80世界1日1周」(1966)や「最終ラウンド」(1966)などがある。

(参照) 平凡社「ラテン・アメリカを知る辞典」

私の父親と同様にコルターサル (Cortázar) の好みのガルデルとは、ギター伴奏で歌うガルデルであり、つまりCortázar と私の父親の二人にとっての、幼児期から青春時代のガルデルなのであって、この二人によれば、オルケスタの豪華な伴奏で飾られた甘くメロドラマティックな変調、間違えようのないあのテノールは除外されるのだ。Cortázar は、その世故に長けたかつ日常的な告白の中で、自分に加担する人々や証言を集めることに腐心している (私の父親はその仲間ではない)。その中の一人は女性歌手の*ジェイン・バトリ (Jane Bathori*。パリ生まれ。1877～1970) であり、もう一人は1921年生まれのあの大詩人*アルベルト・ヒリ (Alberto Girri * ブエノス・アイレス生まれ。1919～1991 ノスタルジックだが難解な作風とされる。英語圏の作家の翻訳家としても知られる。雑誌SUR や新聞 LA NACIÓN への寄稿者でもあった。Wikipedia などから。なお本文では生年を1921年としている) なのだ。私は、似たようなつまらない逸話を紹介しているのだが、この詩人の英国の詩に対する好みとは全くかけ離れたポルテーニョの話の種として、80年代の終わり頃にこの詩人の話を聞いたことがある。

どうやら、どんな結末があるのかを我々に全く考えさないで、このサークルは閉じられる。詩人としての共通の立場はスローガンを要求する。賭けを完全なものにするために言えば、マラルメが、彼を取り巻く人たちの言葉に対してより明確な意味付けを要求したのと同様に、心の内奥に秘めたことを伝えることが、この論争をゴールに近づける。つまり言葉が不十分であるために、声よりも静寂が立ち戻って来るのだ。



トゥルーズにおけるガルデルと彼の一族



マスキオ (Maschio) の厩舎にて (1933年)

「海を渡ったポルターニョたち」の足跡(2) 

マヌエル・ピサロ研究 (後篇)

—リスクに挑戦し、道を切り拓き、挫折を乗り越え、成功を勝ち取ったその人生と音楽—

齋藤 富士郎

(前号からの続き)

(4) ブエノス・アイレスへの帰国行 (1940年～1942年)



1939年9月1日、ドイツ軍がポーランドに侵攻し、第2次世界大戦が始まった。9月3日に英国とフランスがドイツに宣戦布告した。1940年6月14日、ドイツ軍はパリを占領し、同年6月22日、フランスは降伏した。

パリの楽しい夜は警戒警報の鳴り響く夜に変わった。古き佳き時代のパリは終わったのである。タンゴの普及・拡大どころではなくなった。ピサロはあきらめて1940年にパリを出た[4]*)。彼は家財道具とバンドネオンを携え、クリシー通りのアパートマンに鍵をかけて出発した。「シェ・ピサロ」は友人のマリバル (Marival) (参考資料[4]ではマイラル (Mayral) となっている) に託した。彼はこの頃相当な蓄財を果たしていたに違いないが、出国に際して引き出せたのは50000フランまでであった。ピサロに同行したのは妻のルネ・ヴァンセ (René Vincet)、バイオリン奏者の

エステバン・ロバティ、ギター兼コントラバス奏者のホセ・タンガ、弟でバンドネオン奏者のファン・ホセ、歌手のルイス・マンドリーノ、それに何と犬と猫であった。

一行は先ずバルセロナに向かった。ピサロは楽団の空席メンバーを補充し、歌手にルイス・スカロンを加え、バルセロナで演奏活動を行った。彼はバルセロナでしばらく待っていれば戦争は収まると楽観していたらしい。しかし戦争は収まるどころか拡大の一途を辿る。ピサロはあきらめてアルゼンチンに引き揚げることを決心した。

当時、北大西洋にはドイツ海軍のUボートが出没し定期船が運航できる状況ではなかったので、ピサロは一縷の希望を求めてすでに戦争状態に入っていたエジプトに向かった。彼は先ずアレキサンドリアで、恐らく旅費を稼ぐために、3か月ほど演奏活動を行い、次いでカイロに行き「ホテル・コンチネンタル」で演奏活動を行った。しかし、食料不足と長期停電で演奏活動の続行が不可能になり、一行は再びアレキサンドリアに戻ったが、諸条件は極度に悪化し、市はイタリア海軍の艦砲射撃にさらされる事態になった。

やっとのことでエジプト海軍の輸送船「ザム・ザム (Zam Zam)」号に乗船ができ、1941年12月25日にアフリカ大陸を時計回りにほぼ3/4周する旅に出た。3隻の軍艦が護衛に同行した。紛争地帯のスエズ運河を抜けて紅海に入った。紅海では船は夜間に消灯してジグザグに航海した。またマッチやライターの明かりが敵に発見される恐れがあるので煙草は吸えなかった。その後、アデン湾に入り、英

*) 1940年出国とするとブエノス・アイレス到着まで2年弱かかったことになり、一寸長すぎる気もするので1941年出国の可能性もある。しかしドイツ軍占領下のパリからの出国は困難であったと考えられるので、やはり1940年6月のドイツ軍占領以前の出国であったのではないと思われる。

領及びイタリア領ソマリアを遠望しつつ、インド洋に入った。そしてケニアに寄港し、アフリカ大陸とマダガスカル島の間のモザンビーク海峡を通過して、やっと喜望峯を回って大西洋に出た。エジプト海軍の護衛はケープ・タウンまでで、その後は英国空軍の監視下に入った。「ザム・ザム」号の最終目的地はブラジルの最東端のペルナンブーコ州で、そこで一行は下船した。そして今度はブラジル貨物船「ベフェンディ (Bephendy)」号に乗り、1942年4月11日に一行は犬や猫も含めて全員無事にブエノス・アイレス港に着いた。1940年にパリを出てからほぼ2年が経過していた。ピサロはパリで営々と築き上げた実績と財産、それに苦楽と共にした仲間達をパリに置き去りにしてしまった。



アフリカ大陸の地図。
地名は1942年当時とは
違っている。

(5) 失意の6年間 (1942年～1948年)

故国に戻ったピサロは妻と共にブエノス・アイレス州のクライポーレ (Claypole) に落着いた。彼は将来の経済問題を考えて、アルゼンチンでも音楽活動を続けるつもりであった。それに夫人の老母の面倒を見る必要もあった。しかし彼の20年間のブランクは大きかった。時代は“輝ける40年代”の真っ最中で、ピサロの音楽は色褪せて見えた。音楽活動を続けようと彼はいろいろと運動したが、折衝はどれも不調に終わった。「パリで勝利したことがその祖国において彼を忘れさせた」のである。同様な事情はエドゥアルド・ビアンコが帰国した際にも起きている。

しかし遊んでいる訳には行かない。粘り強い努力の結果、ピサロはLR3ラジオ・ベルグラノーの放送番組に出演することが出来た。またコリエンテス通りのキャバレー「ティビダボ (Tibidabo)」とカフェ「アルヘンティーノ」にも出演した。そこではバンドネオン陣に優秀な奏者のロベルト・ディ・フィリッポ (Roberto Di Filippo) が加わった。また「アポロ」劇場のサイネテにもトリオで出演した。1947年にはカシノ・デ・メンドサで新編成のオーケスタで一連の公演を果たした。

その頃、妻の老母が亡くなり、ピサロをアルゼンチンに引き留める強い理由が無くなった。それで彼は再びパリに戻る決心をした。

(6) 再びパリへ、そして終焉 (1948年～1982年)

1948年、マヌエル・ピサロは再起を期して再びパリに向かった。ピサロの2度目の渡仏時期について参考資料 [4] [5] では1950年としているが、ここでは参考資料 [1] に従って1948年とした。

今回の渡仏は単身ではなく楽団を伴っていた。そのメンバーはピサロ自身とバンドネオン奏者のホセ・アッペンディーノ (José Appendino) とロドルフォ・ネロネ (Rodolfo Nerone)、元ペドロ・ラウレンス楽団のピアニストであったエクトル・グラネ (Héctor Grané)、元ペドロ・ラウレンス

楽団の歌手であったホルヘ・リナレス (Jorge Linares) とやはり歌手のアイダ・ガラーン (Aída Galán) であった。

ピサロは、恐らく様子見として、先ずスペインに行き、マドリッドのレティラオ公園の「パリジャ・パベジョン (Parrilla Pabellón)」で2か月間活動し、まずまずの成果をあげた。その後、キャバレー「エスタンブル」でも活動した。スペインでの活動を挟んだので、パリに到着したのは1950年のことであったかもしれない。

大きな期待を抱いてパリに到着したピサロを待っていたのは経済的廃墟という厳しい現実であった。豪華キャバレー「シェ・ピサロ」はベーカリーに変わっていた。クリシー通りの彼のアパートマンは無断占拠されており、ピアノや何台かのバンドネオンを含む彼の所有物は無くなっていた。銀行口座に預金は残っていたものの戦後の急速なインフレで貨幣価値は下落し、無いも同然であった。彼はパリでの20年間の蓄積の全てを失ったのである。

普通の人ならここで挫けてしまうところであるが、ピサロは違った。1920年のマルセイユにおいて発揮した不屈の闘争心は衰えていなかった。彼は50代半ばにしてゼロから再び這い上がった。

パリの人々はピサロを忘れていなかった。1951年にはシャン・ゼリゼ大通りのキャバレー兼レストランの「レグロン (l'Aiglon)」で6か月間活動した。また、「クラブ・ド・シャン・ゼリゼ (Club de Champs Élysées)」やモンテーニュ・アヴェニュー (Montaigne Avenue) 16番地の上流階級向けの「Té Danzantes de la Elagancia」(高級ティーパーティのようなものか) にも出演した。また、ポンチウ (Ponthieu) 通り49番地のキャバレー兼レストランの「ル・ペロケ (Le Perroquet)」でも活動した。

その後、一時パリを離れ、コルシカ島に行き、アジャクシオのカシノで3か月演奏活動した。

パリに戻って、今度はシャン・ゼリゼ大通り79番地のダンスホール「ミミ・ピンソン (Mimi Pinsón)」でのアトラクションに出演した。この活動は7か月間続いた。

ピサロの活躍のお蔭でパリのナイトスポットの経営者たちは大いに稼ぎ、借金を完済できたという。

その後、恐らく高齢の故に、ピサロのオルケスタはキャバレーの出演に間隔をあげ始め、大学での演奏会やバイレでのレセプションに活動の中心を向けた。1970年代まで活動したと言われるが、晩年は息子に楽団経営を任せたとも言われている。それでもオスバルド・フレセドと肩を並べる長いキャリア寿命である。こうした活動でピサロは相当の蓄財を果たしたと想像され、晩年はニースで悠々自適の引退生活を送った。

「タンゴ大使」と呼ばれたマヌエル・ピサロは1982年11月10日、87歳になる3日前にその生涯を閉じた。「アルゼンチン人であるよりはフランス人」と評されたピサロであったが、望郷の念は強く、1970年と1974年に里帰りを果たしている。

(7) ピサロの音楽

ピサロの演奏スタイル

彼が国を出た1920年という年は、アルゼンチン・タンゴ第1次黄金時代は未だ立ち上がっていなかった。この年、オスバルド・フレセドはオルケスタ・ティピカ・セレクトの録音は果たしていたが、自己のオルケスタを持ったのは1921年である。フリオ・デ・カロがファン・カルロス・コビアンからオルケスタを引き継いだのは1924年である。オルケスタ・ティピカ・ビクトルが結成されたのが1925年、ファン・マグリオ「パチョ」がオデオンで録音を始めたのが1923年である。フランシスコ・カナロは1925年のパリ公演の「大成功」をバックにロベルト・フィルポを抜き去り、タンゴ界の大御所と

なりつつあった。

こうしたアルゼンチン・タンゴ第1期黄金時代を経験していないピサロの演奏スタイルは、モダン派の先駆者のアローラスの影響を受けてはいるものの、基本的にはファン・マグリオ「パチョ」から引き継いだものである。アコースティック録音時代から電気録音時代初期の演奏はバンドネオンを中心に全ての楽器による全合奏が中心で、低音を強調した全体的に重厚な印象を受ける。当時のパリのタンゴ楽団ではバテリアを使用することが一般的であったというから、低音の強調はバテリアの効果かも知れない。テンポを揺らすこともなく、どっしりと一定のリズムで終始している。バンドネオンによる装飾音やブリッジはあるものの、絢爛たるバリエーションはない。またバイオリオンのオブリガードも少ない。これには特に初期のピサロ楽団を支えたバンドネオン奏者のフィリポット、ピアニストのフェレル、バイオリン奏者のシウットらが第1次世界大戦前からフランスで活躍していた旧世代の人たちで、彼ら自身の演奏スタイルが古い時代のものを引きずっていたことと、その他のバイオリン奏者がフランス人であったことも関係しているであろう。端的に表現すれば、初期のピサロの演奏スタイルはファン・マグリオ「パチョ」やフランシスコ・カナロの1920年代の演奏スタイルから、その華やかな要素を取り去ったものと言えなくもない。またファン・マグリオ「パチョ」の衣鉢を継ぐアドルフォ・ペレス「ポチョロ」の演奏スタイルにも一脈通ずるところがあるとも言える。この当時のピサロの演奏スタイルをフレセド的と評する意見もあるが、フレセドはオデオン時代とビクトル時代でスタイルが大きく変わっているため、フレセドと比較するのは適当でないように思える。



マヌエル・ピサロのオルケスタのメンバー。撮影年不詳

このように書くとピサロの演奏スタイルは如何にも退屈なように思えるが、実際に聴いてみると決してそのようなことはなく、むしろ聴く者の心をリラックスさせる効果があるように思える。筆者などはピサロのそういうところが好きで日頃愛聴している。

その後、ペドロ・マフィアやペドロ・ラウレンスの薫陶を受けたバンドネオン奏者のアントニオ・ロマノ (Antonio Romano) やアルベルト・セレンサ (Alberto Celenza) が加入したことで、演奏スタイルは同時代のブエノス・アイレスのタンゴ楽団のスタイルに近付いて行く。特に1930年代後半にはバンドネオンのバリエーションも入った華麗な演奏スタイルになるが、その分だけ「ピサロらしさ」が薄れて行くのはやむを得ない。スッキは1950年に始まる第2期のヨーロッパ滞在ではピサロはその

演奏スタイルをより現代的な方向に全面的に転換したと言っているが、聴いた感じでは1930年代後半のスタイルの延長線上にあると言える。演奏は確かに華やかになっているが、普通のタンゴ・オルケスタになっており、これという特色は感じない。これをトロイロ風とする意見もあるが、トロイロよりはるかに通俗的である。

何故、ピサロは自分で歌ったのか？

ピサロは多くの録音において自ら歌っている。彼は確かに悪声でなく、聴くに堪えないとは言えないものの、どう聴いても素人の歌である。

ピサロ楽団の歌手としてはアリナ・デ・シルバ (Alina de Silva) が最も有名であるが、彼女がピサロ楽団と共に録音したのはディスコグラフィ [6] によれば1925年～1928年の3年間で、その後、彼女は独立している。彼女の後を継いでピサロ楽団に参加した歌手としては、何人かのスペイン人歌手の他にフアン・ラッジ (Juan Raggi)、ロベルト・マイダ (Roberto Maida)、ルイス・スカロン (Luis Scalón)、ロベルト・カルダス (Roberto Caldas)、フアン・ジリベルティ (Juan Giliberti)、ルイス・マンダリーノ (Luis Mandarino) がいるが、彼らはステージでは歌ったがピサロ楽団での録音は残していない。例外としてロベルト・マイダだけはピサロ楽団での録音を数曲残している。

これだけの歌手を擁していたにもかかわらず、何故、ピサロは録音に際して自分で歌ったのか？ 諸資料にもその理由は見えない。これは謎である。

(8) ピサロの録音活動

ピサロは1924年以来、(仏) Gramophone、(仏) Columbia、Salabert、Pathéの諸レーベル、そしてロンドン滞在中にはDeccaレーベルに、多数の録音をし、LP時代に入ってもBarclay, bel air, festivalレーベルへの録音活動は続いた。残念ながらその全貌は明らかではない。参考資料 [4] によればSP盤に300タイトルほどの録音とLP盤に数十タイトルの録音があるという。ディスコグラフィとしては芝野 史郎氏が氏の所蔵コレクションに基づいて200曲弱のSP録音の詳細なデータとLP録音の若干のデータを残されており [6]、これが今のところ最も充実したデータではあるが、勿論全録音ではない。

300タイトルという数はフランシスコ・カナロの自称7000タイトルの1/20に過ぎないが、それでも「海を渡ったポルテーニョたち」の中ではエドゥアルド・ビアンコと並んでトップクラスであることは間違いない。

復刻CD、LPとしてはA.M.P. CD-1131、A.M.P. CD-1248、A.V.ALMA CTA-955、Fremaux & Associés FA 5019 (以上CD) とA.V.ALMA CTA-1002 (LP) がある (オムニバスを除く)。

ここで疑問なのは芝野氏のディスコグラフィに (仏) Columbiaの1945年録音とされるものが30タイトル含まれていることである。1945年にはピサロはまだアルゼンチンにいたから、その時点でのフランス録音は考え難い。この30タイトルのうちの3曲、“Laisse ta main dans la mienne (El Choclo)”, “Rodríguez Peña”, “Confesión” は日本コロムビア SL-3074 (LP) に復刻されている。また、“Tigre Viejo”, “En Esta Tarde Gris”, “Pluie D’Etoiles (Lluvia de Estrellas)” の3曲はA.M.P. CD-1131に (仏) Columbia 1948年録音として復刻されている。

LP録音について芝野氏はBarclayレーベルに1955年に4曲 (EP) と1974年に7曲 (LP)、festivalレーベルに1974年に13曲 (LP) の録音があることを記載されている。またこれ以外に録音年は不詳であ

るが10曲を取めたbel airレーベルのLPがある。また、別のfestivalレーベルLPのジャケットに印刷されている広告に下に示したような3種のピサロのLPが含まれているのを見つけた。但し、筆者は実際に所蔵してはいない。以上で紹介したLPはすべてがオリジナル録音ではなく再編集ものもあるようだ。



PICOLO NAVIO (G.1924)
K 2724



BARRIO REO (G.1927-1928)
D 19085



MILONGUITA DE PARIS (G.1929)
X8695

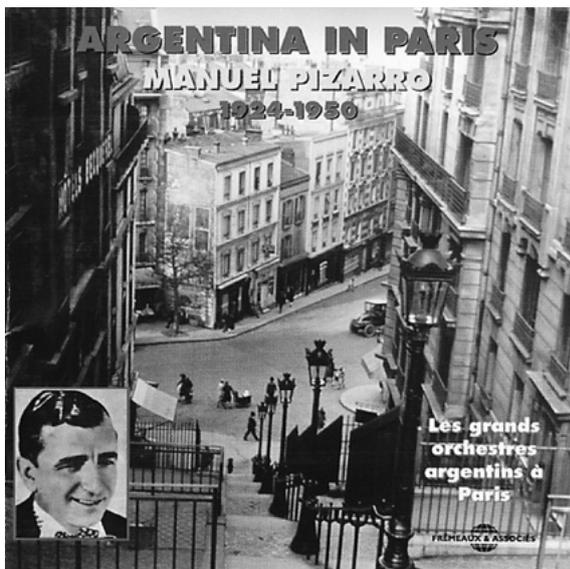


TUS CARICIAS (G.1932)
J 1487



YIRA YIRA (G.1931)
J 2295

ピサロが歌詞を間違えて歌っているもの



復刻CD FA 5019の一例



1950年代のLPの一例
bel air 321034



広告に掲載されたピサロ楽団のLPジャケット

(9) 作曲者としてのマヌエル・ピサロ

参考資料 [1] にはマヌエル・ピサロの作品として34曲が挙げられているけれども、参考資料 [6] や復刻CDにはそこには記載されていないピサロ作品も見出された。それらをまとめて表1に示した。但し、これがすべてとは断定はできない。表1によるとピサロは生涯に58曲の作品を残しており、3曲(エステイロ、ランチェラ、ルンバ)を除くと、あとはすべてタンゴと考えられる。この数もフランシスコ・カナロの700曲の約1/20であるが、やはり「海を渡ったポルテーニョたち」の中ではトップクラスである。そのうち“Abril”, “Batacazo”, “El cachá”, “Ilusión”, “Mano santa”の5曲はブエノス・アイレス時代の作品であり、この中では“Ilusión”が最も知られており、本人も気に入っていたようである。あとの36曲は渡仏後の作品である。その中では有名なものとしては“Noches de Montmartre”, “Todavía hay otarios”, “Una noche en El Garrón”あたりになるろうか。ピサロは自作品や自分の仲間の作品を演奏する時には他の有名曲よりも特に力が入っているように聴こえる。

(10) ピサロをカナロと比較する

人間としてのマヌエル・ピサロをフランシスコ・カナロとの対比において考えてみるのは興味深い。営々努力して成功者となった点では2人とも共通している。しかし成功を勝ち取るまでの道筋には違いがある。

ピサロは使命感に駆り立てられ、リスクに果敢に挑戦し、道を切り拓き、失敗・挫折にめげず、成功を勝ち取った。一方、カナロは自らリスクを冒さず、先人が切り拓いた道を、整備・拡充し、その上で成功者となった。カナロのパリ公演の「大成功」もピサロをはじめとする「海を渡ったポルテーニョたち」が営々築き上げた土台があってこそ可能であったと考えるべきで、いきなり出かけて行って「大成功」できるわけがない。

ピサロもカナロも優れた音楽家であると共に優れた経営者であり、オーガナイザーであった。しかし両者を比較すると、カナロは楽団メンバーの上に君臨したという意味でオーガナイザーであるよりは経営者であり、他方、ピサロはいろいろな経歴のメンバーをまとめて最高の結果を挙げたという意味で経営者と言うよりはオーガナイザーであると言える。マルセイユでの行動を見ると、若しピサロが音楽家

でなく工場労働者であったら、恐らく労働組合の委員長になっていたのではないかと思われる。

あとがき

「海を渡ったポルターニョたち」については資料が少ないが、それでもピサロは比較的多い方である。しかし詳細な点に関しては資料間の不一致が目立つ。本稿では諸事項についてなるべく矛盾が少ないように注意したが、それでもなおには断定できないことがらもいくつかあった。また、筆者の誤解に基づく記述もいくつかあるだろう。それらに関しては瑕疵としてご容赦願いたい。

参考資料

- ・ Oscar Zucchi, “El Tango, el bandoneón y sus Intérpretes” Tomo II, pp.764-815
- ・ http://www.todotango.com/english/biblioteca/cronicas/entrevista_inicio_pizarro.asp
- ・ http://www.todotango.com/english/biblioteca/cronicas/entrevista_pizarro_partedos.asp
- ・ Alain Boulenger, “ARGENTINA IN PARIS MANUEL PIZARRO 1924-1950” FA 5019 (CD) (Fremaux & Associés) 付属パンフレット
- ・ Alain Boulenger, “TANGO A PARIS 1907-1941” FA012 (CD) (Fremaux & Associés) 付属パンフレット
- ・ 芝野 史郎、「欧州で活躍したタンゴの使節たち (第4回)」、TANGUEANDO EN JAPON, No.10 (2002) pp.48-63
- ・ 大岩 祥浩、「アルゼンチン・タンゴ アーティストとそのレコード」((株) ミュージックマガジン、1999年)

表1 マヌエル・ピサロの作品と復刻データ

(参考資料 [1] に掲載のデータに、参考資料 [6] および復刻CD, LPから見い出したデータを補って作成)

	曲 名	自作自演復刻CD	自作自演復刻LP
1	Abril (1920年以前)		
2	Alejandro	FA 5019	
3	Al pie de tu reja		
4	A mi madre	CD-1131	
5	Amor -rumba- *)		
6	Arrepentida		
7	Ay sí, Ay no **)	CD-1246	
8	Bandoneón compañero	FA 5019	
9	Batacazo (1920年以前)	CD-1246, FA012, FA 5019	
10	Cachito		
11	Capitol (Vidalita) ***)		
12	Consejo sano	CTA-955	
13	Che, Carmela		CTA-1002
14	Cocota		
15	Colentino		
16	De aquellos tiempos		
17	Dioslocria		
18	El cacha (1920年以前)		
19	El estandarte (1922年作曲)		
20	El rebote		
21	Enero		
22	Fuelle lindo		
23	Golondrina		
24	Ida y vuelta		
25	Ilusión (1920年以前)	CD-1131	
26	Jardín Marchito		
27	La cuerpiada	FA 5019	
28	La gira (La jira)	FA 5019	
29	La ranchera de la pampa -ranchera- *****)	FA 5019	
30	Linda provincianita		
31	Magnete	CD-1131	
32	Manish		
33	Mano santa (1920年以前)	CD-1246, FA 5019	

34	Mariposa		
35	Martyr		
36	Milonguita de París		
37	Mirala como se va...Ay! Ay! Ay!		
38	Noches de Motmartre (Nuite de montmartre)	FA012, FA 5019	
39	Nostalgie		
40	No sufras corazón		
41	Ojo de agua	CTA-955, CD-1246	
42	Pablo Podestá		
43	Pala barra		
44	Paya (1920年以前)		
45	Pergamino	FA 5019	
46	Pobre paica	CD-1246	
47	Pobre loco		
48	Poco a poco (1920年以前)		
49	Promesas	FA012	
50	Que te vaya bien!		
51	Quien me ha visto y quien me ve		
52	Todavía hay otarios	CD-1131, FA012	
53	Sueño de novela		
54	Una noche en El Garrón	CTA-955, CD-1131, CD-1246	
55	Un viejo amor #)		
56	Valencia segundo		
57	Volvé negra ##)		
58	Rebeldía -estilo-		

*) Ghirlandaと共作

**) Villoldoの "Cantar eterno"の改作

***) Filipttoとの共作

****) Amy Chatelainとの合作

#) E.Oteo の"Mi viejo amor"と同曲

##) Ghirlandaと共作



アニバル・トロイロを楽しむ

佐藤 光男 (横浜市)

「トロイロについて書いてみないか」。私たちのレコードコンサートにお出で下さった編集者からこうお誘いを受けた。アニバル・トロイロ作曲の曲を集めて聴いて頂いている日だった。何せ高名の音楽家、タンゴ人であり、多くの研究者、評論家或いは熱狂的なファンによって語りつくされ、研究し尽くされている人物を改めてとり上げるのはいかにも気が重く、勇気の要る仕事である。しかし「何でもよい、思ったことを書いてくれればよい」の一言でその気になってしまった。

私には取り立てて好みの楽団があるわけではない。それでも、人並みに好き嫌いはあるし、良いものに出会った時には心が躍る。これまで耳にしたことのなかった20年代のタンゴに接したときの驚き、感激した思いは今でもはっきり覚えているし、その後の多くの演奏家、歌手を耳にして、タンゴの世界の広がり



に感服した記憶はまだ新しい。トロイロは、以前から断片的にレコードを手に入れているものの、さして熱心に聴いてはいなかった。でも、何事もそうだが、段々繰り返しているうちに馴染み、親しみの感情が湧いてくる。わたしの中のトロイロもこのように変化してきた。また、ただ音楽に耳を傾げるだけでなく、書いたものなどに触れると、興味がさらに異次元に広がっていく。以下極めて断片的だが、興味を覚えたことなど二、三とり上げてみたい。

アニバル・トロイロ。“El Bandoneón Mayor de Buenos Aires” (ブエノス アイレス最高のバンドネオン)。詩人フリアン・センテージャは彼をこう呼んだ。

「ロベルト・フィルポとエドゥアルド・アローラスはグアルディア・ビエハを制した。フリ・デ・カーロとオスバルド・フレセードは高級サロンの時代を、カルロス・ガルデルの歌声はエンリケ・サントス・ディセポロの詩とともに30年代を我が物にした。そしてアニバル・トロイロとオスバルド・プグリエーセは40年代を、いやそれをはるかに超え、二人の威信は現在にまで及んでいる」

トロイロが高く評価されるひとつに、取り上げる音楽（曲）と歌手の選び方にうまさがあるといわれる。これらを得意のレパートリーにしていった。また、音楽につける歌詞の、詩としての美しさが重要であると考えた。歌う人あるいは曲をつける人を考慮に入れて慎重に作詞家を選んだのである。カトゥロ・カスティージョ、オメロ・



マンシ、ホセ・マリーア・コントゥルシ、エンリケ・カディカモ、オメロ・エスポシトなどの人たちである。

トロイロの楽団からは、後にソリスタとして名をなす多くの逸材が育っていった。フランシスコ・フィオレンティーノ、アルベルト・マリーノ、フロリアル・ルイス、エドムンド・リベロ、ロベルト・ゴジェネチェ、ホルヘ・カサル、アンヘル・カルデナス、ロベルト・ルフィーノ、ティト・レージェス、そして二人の女性歌手、エルバ・ベロンとネリー・バスケス。当時、女性歌手を第一線に使うことは新しい冒険で、それなりの難しさがあったようである。とも角、こうしてそれぞれの名を挙げるたびに、あの曲、この曲についての思い、楽しさが浮かんでくるのではないか。

トロイロが取り上げた音楽（曲）を作曲家別に見てみよう。一度使った曲は何度録音しても1つとする。

トップは彼自身の41曲、曲づくりの才がすぐれており、自分の作品に自信を持っていたことが分かる。二番目はアルマンド・ポンティエールの20、以下、マリアーノ・モレス（16）、アンセルモ・アイエタ（11）、アストル・ピアソラ（9）、フリアン・プラサ（9）と続く。ここまでは、アイエタを除いては当時の新しい人、革新的な人が多いように見える。古典的な人はやや少ないように見えるが新旧の広い範囲にわたって裾野は広い。アルマンド・ポンティエールがトロイロ以外のトップとは意外に見えるが、これにはわけがある。68年、“Nuestro Buenos Aires”なるアルバムを出した。「Palermo en octubre」以下12曲は、作詞がフェデリコ・シルバ、作曲ポンティエールでロベルト・ゴジェネチェが客演で歌っている。

表1にトロイロ以外の、多用した作曲家と作品の主なもの（私の主観です）を掲げた。モレスの作品を歌謡の傑作に仕上げたことにトロイロは一役も二役も買っている。アイエタとガルシア・ヒメネスの

(表1)

トロイロが多用した作曲家と主な作品		
作曲家	作詞(曲)者	曲名
Armando Pontier	Hómero Expósito	Margo
	Hómero Expósito	Trenzas
	(-M. Caló) - F. Silva	Qué falta que me hacés
	Carlos Bahr	Cada día te extraño más
Mariano Mores	(Instrumental)	Milongueando en el 40
	E. S. Discépolo	Uno
	E. S. Discépolo	Cafetín de Buenos Aires
	J. M. Contursi	En esta tarde gris
	J. M. Contursi	Cristal
	Homero Manzi	Una lágrima tuya
Anselmo Aieta	(Instrumental)	Taquito militar
	F. García Jiménez	Palomita blanca
	F. García Jiménez	Siga el corso
	F. García Jiménez	Suerte loca
	F. García Jiménez	Carnaval
Ástor Piazzolla	(Instrumental)	Corralera
	(Instrumental)	Adiós Nonino
	(Instrumental)	Contratiempo
	(Instrumental)	Lo que vendrá
	(Instrumental)	Verano porteño
	(-Aníbal Troilo)	Contrabajando
Julián Plaza	(Instrumental)	Nocturna
	(Instrumental)	Nostálgico
	(Instrumental)	Payadora
	(Instrumental)	Danzarín

名コンビは知られたところだが、これを一層世に知らしめる役を果たしたのであろう。ピアソラとプラサの作品では器楽曲の素晴らしさを見せつけた。いずれも曲名を見ただけでそれぞれの音が、歌が聞こえてくる。

トロイロは編曲者を多用した。この時代おしなべて、音楽はより複雑になり、仕上げる過程はより複雑になる。作曲者のみでは手にあまり、編曲は専門化してゆく。オルランド・ゴニヤピアソラは楽団員として任にあたったが、アルヘンティーノ・ガルバンはより専門的に多くのトロイロ作品の編曲にあたっている。

フリオ・デカロ、フランシスコ・デカロそれにフリオ・ペルシバルといった人たちが編曲の先駆者とされるが、アルヘンティーノ・ガルバンとエクトル・マリア・アルトーラはタンゴを決定的に音楽の地位まで高めたという評価を得た。これはアニバル・トロイロひきいる楽団でこそ出来たことであるという。ガルバンはオーケストラ手法の中で弦を際立たせる革新的な手法を展開した。

トロイロは40年、ラジオ・エル・ムンドにデビューする。曲はフレセドの「Pimienta」だが、この時にはもうガルバンに編曲させている。「Recuerdos de bohemia」は45年当時、画期的なものだった。作曲エンリケ・デルフィーノ、作詞マヌエル・ロメロのこの曲を、トロイロの46年録音は冒頭と最後の部分で間がないにもかかわらず5分を大きく超えて演奏する。ガルバンは、彼の好んだドビュッシーの影響を大きく受けているという。

ガルバンはバルディーヤやコビアン作品でも同様の編曲を手がけた。しかし演奏時間がSPレコード両面に収まらず、録音するに至らなかったものが多くあった。ガルバンのフラストレーション解決は、彼自身の「ロス・アストロス・デル・タンゴ」まで持ち越されることになる。

ガルバンがトロイロ向けに編曲したものに、エドムンド・リベロが歌をつけた多くの作品を上げることができる。一番に挙げるべきは48年、「Sur」であろう。それより前、44年には、アルベルト・マリーノとフロリアル・ルイスがドゥオで歌った「Palomita blanca」がある。これ等にはトロイロの影はあまり見られない。

逆に、ガルバンをはじめ、ピアソラ、スピタルニク、アルトーラそれにプラサといった改革者たちの奔放な提案を素直に受け入れていたということである。

トロイロの作曲を歌曲、器楽曲に分けてみてみよう。先ず歌の曲。彼は歌詞を十分に吟味して作曲

(表2)

トロイロの主な歌曲と歌い方				
曲	作詞者	歌手	歌唱法	録音年
Toda mi vida	J. M. Contursi	Fiorentino	I, II, Ⅲ	41年
Pa' que bailen los muchachos	E. Cadícamo	Fiorentino	I, II, II (部分), Ⅲ	42年
Barrio de tango	H. Manzi	R. Goyeneche	I, II, II (部分), Ⅲ	63年
		Fiorentino	I, II, III (部分)	42年
Sur	H. Manzi	N. Vázquez	I, II, III, II (リフレイン)	64年
		E. Rivero	I, II, III, II	48年
Che, bandoneón	H. Manzi	E. Rivero	I, II, III, II	56年
		J. Casal	I, II, III, II (後ろ半分)	50年
Una canción	C. Castillo	Tito Reyes	I, II, III, II	65年
		J. Casal	I, II, III (部分), II	53年
La última curda	C. Castillo	E. Rivero	I, II, III, II	56年
		R. Goyeneche	I, II, III, II	63年

し、歌う人をうまく使い、育てた。表2はトロイロの歌曲の主なもの（これも私の主観）と歌詞をどのように歌わせたかを示した。

オラシオ・サラスによると、トロイロの出現前、楽団付き歌手は詞を部分的に歌うのが普通だった。エストリビージョである。トロイロは詞の全部を歌わせることを習慣化したとある。自分の作品をどのように歌わせたか、少しくどいようだが見てみよう。

①「Toda mi vida」（歌手：フィオレンティーノ）は41年、ビクターで3番目に録音した最初期の作品だが、I,II,III番からなる歌詞のI,II番のみ歌っている（これを便宜上 [I,II,III] と書く）。

この時期、他の楽団はどのようなようだったろうか。カナロは「Charlemos」や「En esta tarde gris」を、ディ・サルリも「Charlemos」を [I,II,III] 型としている。ダリエソの「Infamia」は [I,II,III,IV] 型、「Esclavas blancas」は [I,II,III,IV] 型であるが基本的にエストリビージョの形式には変わらない。

「Farol」（エスポシト兄弟曲、詞）は43年7月、プグリエセ初の録音である。これは [I,II,III,IV] だった。トロイロは同年9月、フィオレンティーノの歌で録音している。これは [I,II,III,IV] 型であるが、2回目のII番の一部を歌でなくメロディーのみにしている。変化が見られるが、プグリエセに遠慮しているようにも見える。

② 42年、「Pa' que bailen los muchachos」をフィオレンティーノに歌わせる。[I,II,III (部分),IV] 型である。のちにロベルト・ゴジェネチェで録音する（63年）。大変立派な出来栄えと思うが、歌い方は同型で楽団付きの扱いに変わらない。なお、この歌詞はちょっと変わっているので表3に示した。*印の……の部分、普通の歌詞にはあまり見られない。低音部に1小節弱のメロディがつけられているだけなのだが、わざわざ入れている。II番の**、III番の***のそれぞれの3行は歌い方としてかなり流動的であり、独立した節のようにも見える。

③ 同年、やはりフィオレンティーノの歌で「Barrio de tango」がある。これはほぼ [I,II,III (部分)] である。この曲を64年ネリー・バスケスが歌っている。これは彼女の（トロイロでの）初録音、[I,II,III,IV (リフレイン)] をハリのある歌声で聞かせる。

④ 48年、オメロ・マンシの詞で「Sur」を発表する。歌手はエドムンド・リベロである。ここでは歌詞をすべて歌っている（[I,II,III,IV] 型）。トロイロがリベロを高く評価したことがわかる。編曲はアルヘンティーノ・ガルバンだった。リベロはTK時代の56年、再びこの曲を歌う。面白いのはフランシスコ・ロトゥンドがトロイロの1回目の直後に取り上げていることである。歌はフロレアル・ルイス、[I,II,III,IV] 型で全部をうたっているが、歌い出しに、更に歌詞中の盛り上げ部分「Sur… Paredón y después / Sur…una luz de almacén」を入れて、勢いをつけている。

⑤ 「Che,bandoneón」の発表は50年、録音はTKで、ホルヘ・カサルが歌った。[I,II,III,IV (後ろ半分)] 型である。65年、ティト・レージェスは [I,II,III,IV] 型だった。

⑥ ホルヘ・カサルが「Una canción」を歌ったのは53年である。（[I,II,III (部分),IV] 型）

⑦ 「La última curda」は56年にリベロが歌った。63年にはゴジェネチェがこれを歌った。何れも [I,II,III,IV] 型を通してしている。

“Te Acordás Polaco?” と題するアルバムはトロイロ最後の録音である。ロベルト・ゴジェネチェが客演で12曲を歌っている。トロイロの作品は上記①、③、④、⑥を、勿論歌詞をフルで歌っている。71年のことである。

トロイロは、はじめエストリビージョを歌わせていた楽団付き歌手を次第にソロ歌手並みに扱うようになった。こうして、歌い方を慎重に、しかし着々と改めて行ったと考えられる。オラシオ・サラ

(表3)

Pa' que bailen los muchachos

Letra : Enrique Cadícamo
Música : Aníbal Troilo

I

Pa' que bailen los muchachos
via' tocarte, bandoneón.
¡La vida es una milonga!
Bailen todos, compañeros,
porque el baile es un abrazo:
Bailen todos, compañeros,
que este tango lleva el paso.
Entre el lento ir y venir
del tango va, la frase dulce.
Y ella baila en otros brazos,
prendida, rendida,
por otro amor.

II

..... *

No te quejes, bandoneón,
..... *

Que me duele el corazón.
Quien por celos va sufriendo
su cariño va diciendo.
..... *

No te quejes, bandoneón,
..... *

que esta noche toco yo.

Pa' que bailen los muchachos **
hoy te toco, bandoneón. **
¡La vida es una milonga! **

I Parte (bis)

Ella fue como una madre,
ella fue mi gran cariño...
nos abrimos y no sabe
que hoy la lloro como un niño...
Quién la va a saber querer
con tanto amor como la quise.
Pobre amiga, pobre piba,
¡qué ganas más locas de irte a buscar!

Pa' que bailen los muchachos ***
via' tocarte, bandoneón. ***
¡La vida es una milonga! ***

(todotango.com)

みんなが踊れるように

作詞 : エンリケ・カディカモ
作曲 : アニバル・トロイロ

I

みんなが踊れるように
おれが弾いてやろう, バンドネオンよ,
人生はミロンガ!
みんな踊れよ, 仲間たち,
踊りとは抱きあうこと,
みんな踊れよ, 仲間たち,
このタンゴが足を運ばせてくれる。
タンゴのゆっくりした歩みの中に
甘いことばが語られる,
彼女は他人の腕の中で踊る,
よその愛に抱かれ,
征服されて。

II

..... (音楽)

バンドネオンよ, 嘆くんじゃない,
..... (ク)

おれの心もいたくなる,
嫉妬に悩んでいる人は
その愛情を他人に教えているようなもの。
..... (音楽)

バンドネオンよ, 嘆くんじゃない,
..... (ク)

今夜はおれが弾いてやる。

みんなが踊れるように
きょうはおれが弾く, バンドネオンよ,
人生はミロンガ!

I (繰り返し)

彼女は母親のようだった,
彼女はおれの素敵な愛だった,
ふたりは別れ, 彼女は知らない
きょう子供のようにおれが泣いていることを。
おれが愛したほどに
誰が彼女を愛せよう!
哀れな女友達, 哀れな娘,
おまえを探しに行きたい狂おしい想い。

みんなが踊れるように
おれが弾いてやろう, バンドネオンよ。
人生はミロンガ!

(中南米音楽誌「タンゴの花束」より)
(改行など一部手直し)

スのいうところは、このような過程を指して言っているのではないだろうか。

面白いのは、歌手リベロとゴジェネチェとの対応である。二人ともトロイロのところで多くの曲を歌い、大きな役割を果たした。だが、二人ともオラシオ・サルガンとの関係はトロイロに負けなくらい深い。サルガンは二人を育て、世に送り出したとの評価が高い。サルガンはリベロを使って録音することを願った。しかしレコード会社はウンと言わなかった。サルガンの音楽の新しさがわから



ず、リベロの歌声特に音域の広さを理解しなかったせいという。トロイロはリベロを47～56年の間に、他の歌手とのデュオを含め24曲をレコーディングした。56年8月、「Sur」を最後にリベロが独立するとあとにゴジェネチェが入る。ゴジェネチェは同年9月から63年までに51曲の録音を残した。ゴジェネチェはトロイロで歌う前、サルガンで10曲ほど歌っている。そして61年と69年、サルガンは、名も力も備わったリベロとそれぞれ12曲のLPをつくる。

歌のタンゴを大切にし、名作を残してきたトロイロだが、多くのインストゥルメンタルの佳曲を残している。

「Responso」はオメロ・マンシの死を悼んだ曲だ。報に接しSADAICで、徹夜で翌日の早暁に書き上げたという。悲しみと祈りが込められた荘重とも言える曲だけにフルのオルケスタに向いている。「La trampera」「Nocturno a mi barrio」などはコンフントと相性が良いと言える。

53年、トロイロはギタリストのロベルト・グレラと（ギタロン＝エドムンド・サルディーバル、コントラバホ＝エンリケ・キッチョ・ディアスとともに）コンフントを組んだ。劇「エル・パティオ・デ・ラ・モローチャ」上演のためである。トロイロ＝グレラは53～55年に12曲、飛んで62年に10曲の録音を残した。また68年には、クアルテートで12曲がある。前者はグレラのギターとバンドネオンが繊細な音を紡ぎ出す、後者は力強いそして即興的なバンドネオンが奔放さを見せる。わたしはトロイロのクアルテートをこんな風に思っている。

両クアルテートの取り上げる曲は文字通り珠玉だ。自曲では上記の他、「Toda mi vida」や「La última curda」の歌曲がすっかり器楽曲に化けている。アイエタやピアノ、それにバルディといった人たちの名曲の表現も素晴らしい。

トロイロは、本当のタンゴを演奏するにはクアルテートに勝るものはないと考えていたという。わたしが残念に思うのはクアルテートの録音の少なさだ。450曲になんなんとするオルケスタに比べ、全部でSP6枚、LP2枚、計34曲はあまりにも少ない。

アニバル・トロイロのような大音楽家を、滅多にああこう言うものではないと思いつつ、今の私の思いをとりとめもなく綴りました。

シリーズ・資料再見 (2)

マンリオ・フランシアは語る

(大岩 祥浩・記)

(discos A.M.P. TC 1005 “TRADICION ORQUESTA TIPICA VICTOR VOL.3”、ライナーノートより)

カサ・ビクトル（ビクター社）はご存知の通りレコードの老舗です。オルケスタ・ティピカ・ビクトル（O.T.V.）が創設される直前まで、カサ・ビクトルの中心楽団はオスバルド・フレセドのオルケスタでした。時代に最もよく合ったタンゴ・スタイルというのでしょうか、フレセドは町の人気者でレコードもよく売れていました。つまり「オルケスタ・ポプラー」そのものでした。カサ・ビクトルは、ですから突然フレセドがマックス・グルックスマン（オデオン）に移るといいたしてたいへん困惑してしまっただけです。この頃（1925年）カサ・ビクトルにはもうひとつ有力なフリオ・デ・カロ楽団がありました。順風満帆の若いオルケスタでしたが、レコード会社の中心楽団としてフレセドの代役をつとめられるような大衆性は無かったように思います。



マンリオ・フランシア

案の定、アドルフォ・カラベリ（当時アルゼンチン・ビクターのプロデューサー）がデ・カロに相談したら「フレセドの代役など私にはできません」と言下に断られたそうです。「それではスカウトできそうない楽団は？」という質問にデ・カロは「ルイス・ペトゥルチェーリはどうですか」と答え、「ペトゥルチェーリはいま特別に決まった仕事を持たないで、あちこちの助っ人をしたりしてるようですし、彼なら相談にのってくれるでしょう」ということで、結局この場合はペトゥルチェーリに任せようということになったんです。デ・カロはファン・カルロス・コビアン楽団で働いていた時以来ペトゥルチェーリとはひょいひょい仲が良く、音楽性なども熟知していましたから、ペトゥルチェーリならカサ・ビクトルのこの難局を乗り切っていくだろうと思ったわけですね。

“オルケスタ・ティピカ・ビクトル”という楽団名を誰がつけたのか知りませんが、指揮者の名前を公表しなかったのはペトゥルチェーリの希望のようでした。これには訳がありましてね、「この楽団には、金に糸目はつけないから、いいムシコを集めよ」という大命令がありまして、ペトゥルチェーリの名を出さない方が人材を集めやすかったんだと思います。演奏スタイルは当時の標準型、レパートリーはディレクターであるペトゥルチェーリが決める、ということで始まったわけです。

私に出演依頼があったのは、たしか初録音の3～4日前だったと記憶しています。電話でルイシート（ペトゥルチェーリ）から誘われました。「他にどんな人たちを予定してるのか？」ときくと、ルイシートは何人かの名をあげていましたが、今はまったく覚えていません。ただ彼は「この話をしたのはあんたが最初だよ」といっていました。私の腕を高く買ってくれていたんでしょうね。

私の方の都合がよかったのでO.K.ということになりまして…。その後も事前に電話で呼び出されてはレコーディングに行きました。今と違って昔は電話がよく通じましたね（笑）。

録音に際して困ったのは、その日スタジオへ行くまで演奏する曲目がわからなかったことです。だから誰も事前に練習することができないんです。楽譜はいつもペトルチェーリが用意してきました。市販のピアノ譜の場合もあったし、エンピツ書きのときもありました。市販譜のときはメンバーの数だけ用意してありましたからいいんですけど、手書きの場合は今のようにコピー・マシンがありませんから、めいめい自分の分を写譜したりして、たいへん面倒でしたよ。

今じゃとても考えられないことですが、楽員達は全員が原譜を見て演奏するわけです。一応事前に打合せ程度のことにはしますが半即興の時期が3年位は続いたと思います。打合せ事項をメモして5～6回練習したあと「本番」ということになるんです。たいへんだったけど、今思えばただ懐かしく、楽しい思い出ですね。



さっきもいったように、曲目はディレクターが決定するんですが、時々メンバーの中に自作の曲譜を持ってくる人がいる。「いい曲が出たからぜひオレのタンゴをやってくれ」っていうのが現われるんですね。ファウスト・フロンテーラの「イロス・デ・プラタ」もそうだったニコラス・プリミアーニの「フリエンネ」もそうでしたね。そうするとゴレッセが一通りピアノをタタいてみて「ウン、いい曲だ。やろうよ。」と皆がいうと、急遽予定の曲目を変更したりして…。

こんなこといっても現在じゃまったく信じてもらえないでしょうね。本当に懐しい、佳き時代でしたね。(談)

(1975年8月12日収録)



映画に見るアルゼンチン・タンゴ模様

～そのアーティスト、タイトル、バイレなどをめぐって～

その4

飯塚久夫

前回は、タンゴ映画のハイライト・シーンを集大成した映画「アル・コラソンAL CORAZÓN」を概観したところである。

今回は、ウーゴ・デル・カリルHugo del Carrilが出演した映画の全てではないがその殆どのデータを整理してみよう。単なる資料集のようなものになるが、何らかの参考にはなるであろう。

■ウーゴ・デル・カリルの出演映画

以下は1938年から52年にかけて、デル・カリルが出演した映画のデータである。封切り順に並べていく。

「」：タイトル

- 1：封切り日
- 2：封切り劇場
- 3：撮影年
- 4：監督
- 5：音楽担当



また、タイトルの*印はリベルタ・ラマルケLibertad Lamarqueが共演しているものである。

「MADRESELVA」*

- 1：1938年10月5日
- 2：Cine Monumental (Lavalle780)
- 3：1938年
- 4：Luis César Amadori
- 5：Hans Diernhammer
Alfredo Malerba
Francisco Canaro

「TRES ANCLADOS EN PARÍS」

- 1：1938年1月26日
- 2：Cine Monumental
- 3：1937年
- 4：Manuel Romero
- 5：Enrique Delfino

「EL ASTRO DEL TANGO」

- 1：1940年2月7日
- 2：Cine Monumental
- 3：1939年
- 4：Luis Bayón Herrera
- 5：Luis Rubinstein
Rodolfo Sciamarella

「EN LA LUZ DE UNA ESTRELLA」

- 1：1941年5月7日
- 2：Cine Monumental
- 3：1941年
- 4：Enrique Santos Discépolo
- 5：Enrique Santos Discépolo

〔CUANDO CANTA EL CORAZÓN〕

- 1 : 1941年8月6日
- 2 : Cine Monumental
- 3 : 1941年
- 4 : Richard Harlen
- 5 : Alejandro Gutiérrez del Barrio

〔LA NOVELA DE UN JOVEN POBRE〕

- 1 : 1942年4月13日
- 2 : Cine Monumental
- 3 : 1942年
- 4 : Luis Bayón Herrera
- 5 : Alejandro Gutiérrez del Barrio

〔LA PIEL DE ZAPA〕

- 1 : 1943年10月28日
- 2 : Cine Teatro Broadway
- 3 : 1943年
- 4 : Luis Bayón Herrera
- 5 : Alejandro Gutiérrez del Barrio

〔LA CABALGATA DEL CIRCO〕*

- 1 : 1945年5月30日
- 2 : Gran Palace
- 3 : 1944年
- 4 : Mario Soffici
- 5 : Isidro B. Maiztegui

〔CANCIÓN DESESPERADA〕

(EL SOCIO)

- 1 : 1946年7月5日
- 2 : Cine Monumental
- 3 : 1945 ~ 46年
- 4 : Roberto Gavaldón
- 5 : Enrique Santos Discépolo
Homero Manzi

〔POBRE MI MADRE QUERIDA〕

- 1 : 1948年4月28日
- 2 : Cine Metropolitan
- 3 : 1947年
- 4 : Homero Manzi y Ralph Pappier
- 5 : Alejandro Gutiérrez del Barrio

〔HISTORIA DEL 900〕

- 1 : 1949年5月19日
- 2 : Cine Teatro Opera, Cine Roca
- 3 : 1948 ~ 49年
- 4 : Hugo del Carril
- 5 : Alejandro Gutiérrez del Barrio
Tito Ribero

〔EL ÚLTIMO PAYADOR〕

- 1 : 1950年2月9日
- 2 : Cine Teatro Opera
- 3 : 1950年
- 4 : Homero Manzi y Ralph Papper
- 5 : Tito Ribero

〔LAS AGUAS BAJAN TURBIAS〕

- 1 : 1952年10月9日
- 2 : Cine Gran Rex
- 3 : 1952年
- 4 : Hugo del Carril
- 5 : Tito Ribero

■まとめ

ウーゴ・デル・カ ril は1912年11月30日に生まれ、89年8月13日に亡くなった。彼がスターダムにのし上がったのは、上記の「マドレセルバ」の前、1936年末に出演した「昔の若者はゴミーナなんか付けなかったLOS MUCHACHOS DE ANTES NO USABAN GOMINA」(マヌエル・ロメロ監督、フランシスコ・カナロ音楽)という映画のヒットによってであった。ガルデル二世とまで呼ばれるほど、映画にも多く出演し、ここで紹介したもの他、「GENTE BIEN」「VIDA DE CARLOS GARDEL」「LA CUMPARSITA」「EL ÚLTIMO PERRO」「EL NEGRO QUE TENÍA EL ALMA BLANCA」「LA QUINTRALA」「MÁS ALLÁ DEL OLVIDO」「UNA CITA CON LA VIDA」「LAS TIERRAS BLANCAS」「CULPABRE」「ESTA TIERRA ES MÍA」など50本近くの映画に出演している。まさしく“歌う二枚目スター”であった(日本での人気はともかくとして...)

レッスンで使う音源

Academia Estela 大久保 江梨 (青梅市)

1999年よりタンゴ仕事をさせて頂いて居りますが、他種のダンスと比べると、タンゴダンスほど音源の重要なダンスは無いだろうと、私は思います。

レッスンで使う音源と言うテーマを頂きましたが、ダンスを教える者としてはレッスンからMilongaに出て楽しく踊れる事を、一貫して提供して行きたいと考えて音源を選んでいきます。

ダンスに使う音源として考えて見ますと、現地で通常に踊られているトラディショナルな音源が一番踊り易いだろうと思います。2012年に生徒さんを同伴してBsAsに行きましたが、初めてのMilonga体験でも普段のレッスンで使っている音源が多く、不安無く楽しめたとの感想を頂いています。

ステップは男性が個々に作るものですが、ある程度のステップやテクニックは教えやすいのですが、聴こえて来る音の表現をダンスの中で相手に伝え、応答し合う事を教えるのは難しい事です。また、自己研鑽のレッスンばかりが好きでMilongaでの体験を積まないと、自分よがりなダンスに成ってしまいます。どんなに色々なステップを駆使して踊って下さっても、流れて来るメロディーやビートのキレや楽器の特徴ある音色を無視してはスポーツ的に成り、タンゴでは無いと思います。そして、音を感じる、捉えると言う事が、一般的に日本人には難しいと言われるますが、アルヘンティーナと日本人の国民性・民族性や歴史の違いがあるのかも知れません。

几帳面で丁寧で努力を惜しまない日本人の特性として、教えられたステップの数やステップの正確さばかりを重視して、音源（ミュージカリティ）の大切さに気付かないと、皆同じ様なダンスに成ってしまい、日本人独特のタンゴ（アルゼンチンタンゴ本来の味わいにかけるスタイル）に成ってしまいます。教えられた一つのステップでも、聴こえて来る音源で、その時々によりの様に変化しても、間合いの使い方やアドルノ（表現の飾り足）とのバランスが重要で、相手との語り合いを踊る即興性が、タンゴの神髄であるのがサロンドンダンスだと思います。

まず、初めての方には無料体験に参加して頂きますが、Tango・Milonga・Valsを聴いて頂き、3種目のダンスをほとんど同じステップで踊れるダンスであると、説明します。圧倒的にダンス人口の多いソシアルダンスは、種目によりステップや方向性が決められていますので、対比して説明する事も有ります。

レッスンでは、レベルによってオルケスタや曲を選びます。

ビギナーや初心者には、テンポ（ビート）の取りやすいものとして、ディ・サルリやダリエンソやパチョなど。

勿論、年代によってはテンポが速すぎたりしますので、チェックします。



女性生徒のレッスン

恩師、リバローラ氏は「アブラッソ」と「カミナンド」が基本と言います。

カミナンド（歩く）は、ビートの一拍で歩ける事を基本に、半拍も二拍も理解して歩ける様にレッスンします。そのためには、音の取りやすいダリエンソを使いますが、フランシスコ・カナロのポエマなどのゆっくりの拍子をカミナンドするのも難しいことで、一步の中間バランスとタイミングが重要に成ります。タンゴダンスは、前後左右への一步の連続と片足の軸回転のみですから、方向を選んで歩くシンプルなステップが繋がっているだけで、やや前バランスなアブラッソを保ちながら男性が一步一步のステップを作り、女性に思いを込めて伝えるだけなのです。深いアブラッソは、日本人には馴染みづらいようですが、お互いの胸のセンターを二人で合わせて、男性はボディと抱いた腕でカミナンドや回転の方向を伝えます。

女性は、男性からの優しいエネルギー（テンション）を受けて、動く方向を理解し音を聴きながら移動します。腕だけや手の先だけのマルカ（リード）で押したり引いたりされると苦痛を感じます。カミナンドのレッスンでは、着地音を片足で捉え、もう片方の足は添えて次に備えますが、速い曲やゆっくりな曲に合わせる能力をアップさせます。カンビオ（踏み替え）も、一拍や半拍を聴いて足元に伝えるレッスンが重要です。

ただ、上達すると表現が必要に成るので、初級のレベルの時にも、プグリエーセやコロールタンゴやトロイロやフレセドやセステート・マジョールも聴いて頂き、歯切れの良い曲と情感豊かな曲が有ることも紹介します。私は、前&後、オーチョをそれぞれテーマ別に教え、シンプルな左右のヒーロ（回転）の習得までを、初級者と位置づけていますので、ステップを覚えたら、聴こえて来る曲により同じステップを変化させる事も、気が付いて頂ける様にしています。

中級以上に成ると、色々なステップを組み立てられる様に成りますが、メロディーの変化する小節の場所も聴き分けて、余韻を残す間合い（溜める）を共有してから、次のステップを楽しめるように指導しています。また、サカーダやボレアードやバリーダやガンチョなどをステップに組み込むレベルに成ると、それぞれのステップを仕掛けたい&使いたい音を聴き取る様に、柔らかい表現か激しい表現か等を男性が的確に女性に伝えられる様に、聴き比べる必要が有ります。

私は、男女両方を指導するスタイルですが、ステップを自由に作れたり、教えることが出来ても、音について学ぶ場所が日本に無かったので、2002年にBsAsに行き、帰国して2003年にアカデミーの会員に入らせて頂きました。

リバローラ氏との契約が出来、2003年から毎年2回の来日レッスンが組めるように成りましたので、受講者にもミュージカリティの大切さと、タンゴ独特のニュアンスや感覚を理解して頂けるような指導もしています。

男性がステップを構築して方向性を見極め、リードするダンスだと説明すると、男性が上手ければ女性は簡単に踊れると勘違いしている方もいます。ミュージカリティを学びますと、表現の自由さもさることながら、女性の着地音は非常に繊細で个性的であり、コミュニケーションの良し悪しも大きな課題です。表現の70%は女性の足元のミュージカリティだと言われますので、女性の着地音が



カルロス・リバローラ & Estela



美影 & Estela

とても重要に成ります。

男性のチョイスしたステップやリードに、女性が上品なエレガンスを表現して応えて二人の特別のタンゴのエモーションが高まります。だからこそ、同じ曲で同じ相手でも、全く同じように二度とは踊れないのです。もし、自分の感情（情感）を無視し表現を相手に伝え無いでオートマチックに踊るなら、味の無いただのステップを羅列しているダンスに成ってしまい、タンゴから離れてしまうと思います。本来のタンゴダンスは、サロンスタイルの即興性のダンスですから、同じフロアで踊っているペアとも比べる必要もなく、甲乙もつけるものでは有りません。

世界中でタンゴ大会が開かれています、経済や社会の色々な状況の事由で開かれているのだと思います。勿論、タンゴを広める、普及するためのコマーシャルにはなっていますから、とやかく申し上げられません。ミュージカリティの大切さを指導に取り入れなければ、タンゴでは無いとの思いから、アカデミーではオルケスタの歴史やエピソードも学ばせて頂けるようにも成りました。



良く使用する曲は、エル・チョコクロ、バイア・ブランカ、大きな人形、カナロ・エン・パリ、ラ・タンパルシータ、Sueño eterno、淡き光に、七月九日、フェリシア、ラ・ジュンバ、レクエルド、タンゲーラ、バンドネオンの嘆き、カフェ・ドミンゲス、ガジョ・シエゴ、夜明け、アモール・イ・セロ、コラソン・デ・オロ、エル・エスキナーソ、カミニート、街角、オルガニート・デ・ラ・タルデ、El torito、El esquinazo、有りすぎて書けません。

良く使用するオルケスタは、ダリエンソ、F. カナロ、デイ・サルリ、フレセド、プグリエーセ、トロイロ、サッソーネ、キンテート・ピリンチョ、パチョ、ビアジ、セステート・マジョール、アンヘル・ダゴステイーノ、コロールタンゴ、フリオ・デ・カロ、やっぱり多すぎて書けません。

アカデミーの諸先輩の皆様には、音源についてお尋ね致しますと、いつも快くご指導下さったり音源を提供して下さい助けて頂いて、この場をお借りして感謝申し上げます。

また、最近ステージスタイルのデモもさせて頂きましたが、サロンとステージの音源についても、チョイスの仕方とか、振付などを曲のどの様な部分に生かすかとか、益々奥の深いTangoをより学び、ダンス指導に生かしたいと思っておりますので、今後ともどうぞ宜しくお願い致します。

(編集部注：挿入した画像は中の文章とは直接の関係はありません)

全国リレー随想 (13)

タンゴはまず「聴く」ことから

笠井 正史 (武蔵野市)

私は長年タンゴを聴いてきた方なので、「ミロンガ」といえば「ミロンガ・ポルテーニャ」か「ミロンガ・パンペアーナ」しか頭に浮かばなかった。多分私と同じ乃至それ以上の長期に亘ってタンゴを聴いてこられた方には恐らくそうした向きがあるのではないかと思っている。それが1980年代初頭からタンゴとは縁遠い国に長らく住んでいたため、日本に戻ってきてみると、ラティーナ誌の記事などにも盛んに、踊り場としてのミロンガが紹介されており、「ミロンガ」という言葉の実感がすっかり変わっていることに遅まきながら気づかされたのであった。



第10回タンゴダンスアジア選手権大会
(2013.6.13)でのミロンガ・タイム

今や、ミロンガ人口は急激に伸長しており、例のアジア選手権にも世界選手権にも日本人の踊り手が参加して大賞を手にするまでになっている。ステージダンスだけではなく、サロン・ダンスの方でタンゴを踊る人も激増しているように聞いている。中南米音楽誌を引き継いだラティーナ誌はタンゴ記事が相対的に減ったため、多くのタンゴ人はやや不満な思いを抱えてきたようであるが、同誌はことミロンガについては大変ご熱心で、毎年、ブエノスアイレスツアーも世界選手権のある時期に開催しているし、アジア選手権などのカンペアーナの主宰もしている。

さて、そこで問題なのは、とかく踊り一筋の謂わば「ミロンガ人」はどうもタンゴとは踊るもので、聴くのは二の次ならまだしも、踊れる曲が掛かっていればそれで十分といった調子の人が多いことである。昨年ラティーナ主催のツアーに参加した処、参加者の殆どがこの「ミロンガ人」で中には恐れ入ったことにピアソラは知っているがカナロは知らない、という御仁までおり、オーバーな表現をすれば、すんでのところ腰を抜かす程であった。また、レッスン場でファン・ダリエソの演奏がテープで(まだCDではなかった)流されていたのが、インストラクターがテープを裏返したところ、

今度はカルロス・ディ・サルリの演奏曲になったので、「あ、今度はディ・サルリですね」と言うと、ミロンガー筋の人たちはどうも私が何を言っているのか呑み込めなかったようであった。つまりダリエンソもディ・サルリも踊り一筋の向きにはどうでもよいといった印象を受けたのである。

タンゴダンスが盛んになるのは大変結構なことであるが、敢えて「タンゴ人」から「ミロンガ人」へ切なるお願いをすれば、「タンゴを踊る前に先ず聴いて下さい」ということである。さすれば、理解も深まり、ダンスにもそれなりの味付けができるのではないかと思っている。では、何を聴くかであるが、「タンゴが聞こえれば、それに合わせて踊るから何でもよい」というのでは本当にタンゴを楽しんで踊っていることにはならない。

とかくダンス一筋の「ミロンガ人」の中には歌なしの曲、通称インストルメンタルのみを好み、歌の入った曲を敬遠する嫌いがあると聞く。確かに日本人の多くはスペイン語を理解しないので、「何を歌っているのか分からないから歌詞は余計だ」という人も多いようであるが、タンゴは本来的に歌詞がついていて、喜怒哀楽を表現する音楽である筈である。このことは、英語で歌われるブルースも、フランス語で歌われるシャンソンも、ポルトガル語で歌われるファドも、いずれにも共通していることで、日本人がそういう音楽を聴き始めた時は殆どの人が、英語を始め外国語の歌詞は理解できていなかったに違いない。つまり、タンゴについても同様に、意味の分からない歌を聴いているうちに段々好きになっていったのである。最近のコンサートでは歌詞の日本語訳が舞台の片隅に表示されたり、日本で発売されているCDに日本語訳の付いた歌詞カードが付いたりして、タンゴの歌を理解し易くなってきているが、恐らく多くの「ミロンガ人」はこうしたことには無頓着で、単にタンゴのリズムのみを耳に入れて踊っているのではないかと危惧している。

一方で歌の好きな人たちは「タンゴはスペイン語で歌うもの」と思っており、丁度「フランス語で歌ってこそシャンソン」とか「ファドはポルトガル語で歌わなければファドではない」というのと同じような理解をしている。現在、「タンゴ愛好家」というか、「好きでタンゴを聴いている人」の平均年齢はかなり高年齢化しており、その多くは若い世代の人たちのようにスペイン語に通じている訳ではない。ということは歌詞の内容がよく分からないまでも長年タンゴを聴くうちに好きになっていったのである。

かつて、タンゴ界に藤澤嵐子氏が登場した時代、スペイン語の分かる「タンゴ人」は極く僅かであった筈である。それでも「タンゴという音楽は実に好いものだ」という受取りが日本をアルゼンチン、ウルグアイと並ぶ世界のタンゴ国にしていったのは間違いない。もし、その当時今の「ミロンガ人」のようにタンゴはただ踊るための音楽と受取っていたとしたら、果たして60年後の今の日本におけるタンゴの存在はどうであったろうか。



若き日の藤澤嵐子

昨年初めてブエノスアイレスに行った折、1935年に亡くなったカルロス・ガルデルが今なお、現地の人々から敬愛されているのを知り、ガルデルの偉大さを痛感するとともに、タンゴの歌のもつ力の大きさが計り知れないものであると感じさせられた。今の日本の「ミロンガ人」にもっと、ガルデルを聴けというのではないが、少なくとも「タンゴはただ単に踊るための道具」ではないことを知って貰いたいと思っている。



ブエノス・アイレス「バル・スール」でトリオの演奏をバックに踊るカップル

昨今円高と航空運賃の引下げのお蔭で、遠いとはいえアルゼンチンまで出かけてタンゴの踊り方を習いに行く人が増えたようで、誠に結構な現象であるが、折角そこまで時間とカネを掛けて行くのであれば、単にサリーダやオチョに終わることなく、そこに掛かっているタンゴの曲目に耳を傾け、タンゴ通になって帰ってきて欲しいものである。

最近各地のカルチャースクールで、スペインのアンダルシア音楽を知らない人たちがフラメンコを習ったり、ハワイアン音楽を知らない人たちがフラを踊ったりしているようであるが、せめて、タンゴのバイレを心がける「ミロンガ人」には先ず以てタンゴを、それも、インストルメンタルだけではなく、歌詞のあるタンゴを聴いて「タンゴ人」として育てて行って欲しいと願っている。

次は市川市の鶴岡忠成さんにバトンを渡します。



ブエノス・アイレス・タンゴフェスティバルの会場でオルケスタ（画面奥）の演奏を聴きながら踊るブエノス・アイレスの人々（2007年3月）

（画像提供：編集部）

ティックな曲が多いが、これは主として早川真平氏の好みだったそうで、藤沢さんはそれほど歌いたかったわけではなく、録音はしたが、ステージではまったく歌わなかったレパートリーもあったという。ご自身の好みは「別れの前に」(Antes del adiós)のような感じの曲だともおっしゃっておられた。(偶然だが、私は初めてアルゼンチンに行った際に、SADAICのタンゴ博物館で「私はランコが歌った Antes del adiósの作者なんだよ、と誇らしげに話しかけてくれた年配の人がいた。おそらくその人は晩年長くSADAICの要職にあった作詞家 Eugenio Majulか、あるいは渡亜時の藤沢と交流の深かった作曲家Roberto Nievas Blancoだったのか、今となってはどちらだったのか確かめられないが...)。結局CDリイシューの話もそこそこに、近所のお寿司屋さんで一緒に食事をさせていただき、こともあろうか2人ともご馳走してもらったのだった。その時「大きな手術をしたので、大好きなお肉を控えなくてはいけなくなったので、今はここで魚をよく食べているんです」「タンゴを聴くことはあまりなく、クラシック音楽と読書が楽しみだ」と語られていたのが今でも思い出される。

私が一番驚いたのは、その声の太さ、声の厚みだった。お医者さんに驚くほど丈夫な喉の持ち主だと言われたことは藤沢さんの著書にも書かれているが、普段の話し声でも十分その声帯の厚みが感じられた。

藤沢嵐子のステージとレパートリー

ここからは公演プログラム等の曲目から、そのレパートリーを考察してみたい。基本的には元資料に記されている通りだが、一部曲目変更などに関する補足メモがついている場合には、そちらを優先して記載している。前述の通り、これらがすべてではないが、おおよそその変化・推移をみるには十分な量だと思う。

*1951年7月23日 東京音楽祭 後楽園第2夜 ジャズとシンフォニック・タンゴの夕

ロス・ピコネロス／ベサメ・ムーチョ／ラランバ(=おそらく「ラ・ランダ」)／ジューラ・ジューラ(ティピカ東京)

<ゲイスターズ、アーニー・パイル・オーケストラ、東京キューバン、北村維章とシンフォニック・タンゴ・オーケストラ、アロハ・ハワイアンズなどと共演>

ビクターで最初の録音を行う前の唯一の資料がこれであった。ジャズとタンゴのコンサートだが、実際にはラテン、ハワイアンも登場して5～6曲ずつ次々にバンドが登場するスタイルだったようだ。藤沢が歌ったのは上記4曲と考えられるが(オリジナルにはどの曲が藤沢の歌が明記されていない)、「ピコネロス」「ラ・ランダ」は戦前日本盤が出ていたメルセデス・シモーネのレパートリーであり、著書にもあるように藤沢さんが最初にシモーネの歌を手本にしたという記述と一致している。ラテンの名曲「ベサメ・ムーチョ」は当時進駐軍放送でザビア・クガートの演奏が良く流れてヒットになっていたもので、ティピカ東京はコロムビアに黒木曜子の歌でレコーディングしており、ビクターでは録音しなかった(のちに本命盤となるトリオ・ロス・パンチョスの録音はまだこの時点で行われていない。)

*1952年3月2日 日比谷公会堂 アルゼンチン・シンフォニック・タンゴ演奏会

エン・セクレト(Enrique S. Discépolo作 Secretoか?)／南(スール)／ポエマ／プレガリア／ママ、私恋人が欲しいの／チェ・バンドネオン／希望(エスペラル)／青い夢／デセンカント／インプロラシオン／祈り(オラシオン)／白いスカーフ／ジプシーの嘆き／メルセ寺院の鐘(ティピカ東京、トリオ・ティピコ東京、ティピカ・シンフォニカ東京、ゲスト：南里文雄)

*** 1952年6月24日 早稲田大学大隈講堂 WHAT'S JAZZ**

演奏曲目記載なし (ティピカ東京)

＜シックス・レモンズ、ホット・ペッパーズ、シックス・ジョーズ、ゲイ・スターズと共演＞

*** 1953年6月21日 大阪朝日会館 アサヒ中南米コンサート**

牛車に揺られて／お聞きください、判事様 (早川真平五重奏団)

パシオナル／チューリップの踊り／ノスタルヒアス／さよならも言わずに (ティピカ東京)



1953年8月に早川、藤沢、刀根研二の3名は初めてアルゼンチンへ出発、12月に帰国しているが、上記のコンサートは前に行われたもので、明らかにレコードのレパトリーが多く、特に1952年3月のコンサートのレパトリーの多くはその後1年ほどの間に録音される曲ばかりである。1940～50年代のアルゼンチンの楽団と同様、レパトリーを長期間ステージにかけてから録音にのぞむことが可能だった時代である (ここではコンサートのプログラムを取りあげているが、もちろんこうした活動以外にキャバレー、ダンスホール、ラジオの仕事がほぼ毎日のようにあった時期である)。

1953年大阪のコンサートでアタウルパ・ユパンキの「牛車に揺られて」をキンテートの伴奏で歌っているのが興味深い。こうしたフォルクローレは当時「フォルクロリカ」という名称でタンゴ・ファンを中心に愛好されていたが、ユパンキの代表作ともいえるこのミロンガは当時発売されていたレコードはなかったはずで、(クリスマス・レーベルのライネ＝クエジョの二重唱のレコードが出たのはもっと後)、わずかにトロイロ楽団 (リベロ歌)、カナロ楽団 (アレナス歌) のレコード辺りが輸入されていたかどうか、という状況だったはずである。

*** 1954年1月28日 日比谷公会堂 アルゼンチンタンゴ コンチネンタルタンゴ 競演の夕**

パシオナル／ラ・モローチャ／ウナ・カンシオン／パティオ・ミオ／ママ、私恋人が欲しいの／ジーラ・ジーラ (ティピカ東京)

＜北村維章と東京シンフォニック・タンゴ・オーケストラと共演＞

*** 1954年3月28日 函館HBCラジオ劇場／3月29日 札幌新東宝 藤沢嵐子の唄とアルゼンチン・タンゴ**

パシオナル／さらば草原よ／交わす杯／ラ・モローチャ／パティオ・ミオ*／クアルキエル・コサ*／テ・キエロ*／淡き光に／プリンセサ・デル・ファンゴ／ママ、私恋人が欲しいの／ノスタルヒアス／ジーラ・ジーラ (ティピカ東京、*は早川＝刀根＝高のトリオ伴奏)

*** 1954年5月16日 日比谷公会堂 アルゼンチン・タンゴの夕 藤沢嵐子・早川真平・渡亜欽送演奏会**

プリンセサ・デル・ファンゴ／マノ・ア・マノ／チューリップの踊り／ウナ・カンシオン／淡き光に／ムチャーチョ／パシオナル (ティピカ東京)

＜ティピカ・ポルテナヤと共演＞

1953年12月に帰国した早川と藤沢は、翌年6月に再びアルゼンチンへ渡るが、上記3つのコンサートはその短い間に行われたものである。カルダーラの「パシオナル」、トロイロの「パティオ・ミオ」「ウナ・カンシオン」など最新ヒット曲が多くを占め、大ヒット曲とは言えないが、フランチャーニ＝ポン

ティエル楽団（フリオ・ソーサ歌）で録音された新作「プリンセサ・デル・ファンゴ」も珍しいレパートリーだ。

*** 1955年1月16日 日比谷公会堂 GALA PERFORMANCE 早川真平・藤沢嵐子帰朝歓迎**

ホルヘ・カルダーラ来朝記念 第1回特別演奏会

バンドネオンの心／ジーラ・ジーラ／ウナ・カンシオン／淡き光に／ノスタルヒアス＜ティピカ東京＞

マノ・ア・マノ＜ホルヘ・カルダーラ（バンドネオン・ソロ）伴奏＞

パシオナル／ブエノスアイレスの思い出／ノーチェ・デ・ロクーラ／テ・キエロ／ラ・クンパルシータ／さらば草原よ／ママ、私恋人が欲しいの＜早川真平とオルケスタ・ティピカ・シンフォニカ＞

*** 1955年2月21日 日比谷公会堂 アルゼンチンタンゴの夕**

プロイビード（禁止）／マノ・ア・マノ／ひとしずくの涙／悲しいミロンガ／ラ・クンパルシータ＜ティピカ東京＞

シレンシオ／カミニート／ノーチェ・デ・ロクーラ／ノスタルヒアス／ラ・モローチャ／さらば草原よ／ママ、私恋人が欲しいの＜早川真平とオルケスタ・ティピカ・シンフォニカ＞

*** 1955年3月22日 日比谷公会堂 なつかしの名曲集の夕**

曲目不明（ティピカ東京、ホルヘ・カルダーラ）

*** 1955年5月1日 東京都立体育館 1955マンボ合戦 日・米・比タンゴ・マンボ!!**

ラ・クンパルシータ／さらば草原よ／ママ私恋人が欲しいの 他（ティピカ東京）

＜東京パンチョス、KBRタンゴ・アンサンブル、村越一夫とマンボ・キング、浜口庫之助とアフロ・クバーノ、東京マンボ・オーケストラ、J.C.ハード、ナンシー梅木、マノロ・クエルバ他共演＞

*** 1955年7月 東京宝塚劇場 東宝ジャズ・ハイライト**

ジーラ・ジーラ／ママ、私恋人が欲しいの（ティピカ東京）

＜雪村いづみ、武井義明、旗照夫、ナンシー梅木、柳沢真一、深緑夏代、越路吹雪、ペギー葉山、ビンボー・ダナオ、東京マンボ・オーケストラ、ジョージ川口、バッキー白片、東京キューバン・ボーイズ他競演＞

*** 1956年2月25日～3月7日 日本劇場 日劇ステージ・ショウ ラ・クンパルシータ**

ママ、私恋人が欲しいの／ベサメ・ムーチョ／ジーラ・ジーラ／わが懐かしのブエノスアイレス（ノエリア・ノエルと二重唱）／ラ・クンパルシータ（N.ノエル、牧博、前田美知子と）（ティピカ東京）

上記の期間は、54年のアルゼンチン行きから帰国の際、一緒に来日したバンドネオンのホルヘ・カルダーラが日本に滞在していた期間にあたる。「プロイビード」「ノーチェ・デ・ロクーラ」が新しいレパートリーで、「ノスタルヒアス」は新曲ではないが、この頃から取りあげられ始めたのがわかる。1955年の後半からは空前のマンボ・ブームが始まり、55年5月のマンボ・コンサート（何と明治大学附属中野高等学校の主催！）にも無理やり組み入れられている。55年7月には宝塚劇場、56年2月には日劇に出演しているが、この頃劇場でのステージ・ショウにもたびたび登場している。日劇のショウはおりしも来日していたアルゼンチンの歌手ノエリア・ノエル（ただしタンゴ歌手ではなく、主にブラジルで活動している女優だった）との共演であった。またこの頃から新しいタンゴ歌手が登場し始め、日劇のショウには前田美知子と牧博が共演している。

***1958年4月10日 県民会館（山梨）大ホール タンゴの夕**

三年経って（フェロン・トレス・アニョス）／バイレモス／君待つ間／トゥクマンの月／君の帰還（トゥ・ブエルタ）／カンタ・サンバ／天国で待って／水色のワルツ／ある恋の物語／ベサメ・ムーチョ／チョガイ鳥／いつまでもここに／カプリチョ・デ・アモール／淡き光に／さらば草原よ／ママ、私恋人が欲しいの／ノスタルヒアス／ラ・クンパルシータ（ティピカ東京）

***1958年6月10日 ヤマハホール 第1回 ランコ・フジサワの集い**

Aプロ カミニート／三年経って（フェロン・トレス・アニョス）／私の古いギター（ミ・ビエハ・ビオラ）／トゥクマンの月／君の帰還（トゥ・ブエルタ）／水色のワルツ／ママ・ビエハ／チョガイ鳥／ミシェル／カプリチョ・デ・アモール／ムチャーチョ／ある恋の物語

Bプロ 淡き光に／バイレモス／テ・キエロ／カンタ・サンバ／禁止（プロイビード）／枯葉／ラ・ノチェーラ／牛車に揺られて／いつまでもここに／マノ・ア・マノ／ラ・モローチャ／イ・トダビア・テ・キエロ／ノスタルヒアス

***1959年8月25日 大阪産経会館 藤沢嵐子・早川真平オルケスタ・ティピカ東京**

シンフォニック・タンゴ演奏会

牛車に揺られて／希望（エスペラル）／私の古いギター（ミ・ビエハ・ビオラ）／チェ・バンドネオン／トゥクマンの月／ミセリア／ボジェーラ／水色のワルツ／ママ・ビエハ／ムチャーチョ／テ・キエロ／いつまでもここに／さらば草原よ（ティピカ東京、菅原洋一の歌もあり）



***1960年6月9日～11日 日本劇場 パリ=ブエノスアイレス**

カミニート／トゥクマンの月／アディオス・コラソン（ティピカ東京）

<牧博、高英男、菅原洋一、前田美知子他も出演、6月12日～15日はティピカ・ポルテニヤが出演>

1957年の資料がないが、1956年9月～57年5月に3度目の渡亜を行っていたこと関係があると思われる（いつも気になるのだが、この56～57年のアルゼンチン行きに関しては雑誌記事も見当たらず、現地での録音もなく、藤沢さんの本にもまったく言及がないのはどういうことだろう...）。この頃になると日本のタンゴ楽団・タンゴ歌手共に数が増え、東京を中心に「金馬車」「コロンビア」「ブルボン」などタンゴの実演喫茶やホールでのコンサートを通じて、より広い層へのタンゴ・ファンの拡大

が起こった。

*** 1961年7月10日 日比谷大音楽堂 最大のタンゴ**

(同タイトルの公演は8月1日にも同会場で行われた模様)

カミニート／トゥクマンの月／いつまでもここに (ティピカ東京)

＜ティピカ・アルヘンティーナ、ティピカ・パンパ、ティピカ・ポルテニヤ、原孝太郎とアンサンブル・ミネルバと共演＞

*** 1961年9月4日 日比谷大音楽堂 ビクタータンゴ愛好会発会記念 NOCHE DE TANGO**

ママ・ビエハ／ママ、私恋人が欲しいの (ティピカ東京)

＜トリオ・ロス・ムチャーチョス、ハイメ松元、ティピカ・ポルテニヤ、ティピカ・パンパ、ティピカ・アルヘンティーナ、柚木秀子、村山灯子、前田美知子と共演＞

前の時期もそうだが、フォルクローレ系のレパートリーが目立ってくるのもこの時期の特徴といえるだろう。

*** 1964年12月10日 厚生年金会館 中南米公演記念帰国演奏会**

海に向かって／メドレー (ママ、私恋人が欲しいの～カミニート)／カタマルカの風景 (柚木、阿保との三重唱)／ケ・ボニータ・バ／ソンプラス (パシージョ)／ベサメ・ムーチョ／アディオス

*** 1965年7月9日 日比谷大音楽堂 アルゼンチン独立記念 これがタンゴだ**

白いスカーフ／最後のコーヒー (ティピカ東京)

＜ティピカ・パンパ、鈴木雅晴とグロリア・タンゴ・オーケストラ、ティピカ・ポルテニヤ＞

*** 1967年10月29日 タンゴ・フェスティバル 全日本タンゴ・オールスターズ**

最後のコーヒー／レクエルド (グアラニア)／シレンシオ (ティピカ東京)

さらば草原よ (全日本タンゴ・オールスターズ)

＜伊吾田勇三とオルケスタ・ティピカ、今井恵威子、キンテート・タンゲーロス (平野洋輔)、前田美知子と共演＞

*** 1968年10月5日 藤沢嵐子リサイタル Mis 20 Años con el Tango**

ママ、私恋人が欲しいの／カミニート／いつまでもここに／トゥクマンの月／花祭り／牛車に揺られて／わが悲しみの夜／白いスカーフ／テ・キエロ／奥様お手をどうぞ／ある恋の物語／夜のタンゴ／知りたくないの／枯葉／恋心／青い背広で／淡き光に／最後のコーヒー／アディオス・コラソン／ラ・モローチャ／ジエラ・ジエラ／シレンシオ (ティピカ東京)

*** 1971年1月4日 新春グランド・コンサート 藤沢嵐子 早川真平指揮オルケスタ・ティピカ東京**

ママ、私恋人が欲しいの／カミニート／水色のワルツ／花祭り／牛車に揺られて／トゥクマンの月／君しのお夜／グリセール (トリオ伴奏)／悲しいミロンガ／淡き光に／いつまでもここに／最後のコーヒー／別れの前に (アンテス・デル・アディオス)／ロコへのバラード／最終列車まで／ジエラ・ジエラ

1964年2月、ティピカ東京、藤沢、阿保郁夫、柚木秀子の一行が中南米公演に出発、帰国後のコンサートは現地でのステージでのレパートリーが中心となっている。ペルー、ベネズエラ、エクアドルなど公演地の曲も加えられている。1960年代半ばからタンゴ楽団の仕事は急速に減少していったようだが、68年のコンサートの曲目に日本語のタンゴ調の曲目が含まれているのも、状況の変化を示して

いると言えるだろう。1969年来日したファン・カンバレリ四重奏団の全国公演では歌手のホルヘ・ビダルが急きよ来日できなくなったため、ゲストとして藤沢、阿保の両名が公演ごとにゲストをつとめている。

1971年1月のコンサートはティピカ東京活動停止前の最後の大規模なコンサートであるが、「ロコへのバラード」「最終列車まで」といった最新曲も含まれている。藤沢はこのあと71年7月のコンサートにゲスト出演した後、10年間ステージから離れることになる。

***1981年12月3日 中野サンプラザ／12月9日 大阪厚生年金会館／12月17日 愛知厚生年金会館**

タンゴの異邦人 藤沢嵐子ラスト・イヤー・コンサート

白いスカーフ／いつまでもここに／パテロ・センチメンタル（ティピカ東京）

場末のバンドネオン／牛車に揺られて／カスカベリート（トリオ・コンテンポラネオ）

ロコへのバラード／イ・ア・ミ・ケ／ノスタルヒアス（ティピカ東京）

***1983年10月24日 五反田簡易保険ホール アルゼンチン帰国記念 志賀清タンゴ・コンサート**

カミニート／淡き光に／チキリン・デ・バチン／白いスカーフ／ジーラ・ジーラ（志賀清とタンゴ・モデルノス）

***1984年7月7日 川口市民会館 藤沢嵐子 en か・わ・ぐ・ち**

ママ、私恋人が欲しいの／白いスカーフ／パテロ・センチメンタル／チキリン・デ・バチン／最後のコーヒー／想いのとどく日／カミニート／いつまでもここに／悲しいミロンガ／ロコへのバラード／淡き光に（志賀清とタンゴオールスターズ' 84）

1980年「タンゴ生誕100年」の機会をとらえ、11月、藤沢はNHKTVの番組に出演、12月にはリサイタルを行い、復活を果たす。この後毎年12月にリサイタルを行うようになり、その共演者としてオランダ・トリポディ・タンゴ・トリオ、ブエノスアイレス・タンゴ・トリオ（バンドネオンはカルロス・ブオーノ）、トリオ・コンテンポラネオが来日している。1981年2月には、民音の招きでオラシオ・サルガン＝ウバルド・デ・リオのグラン・オルケスタが来日、一部の公演で藤沢はゲスト出演、翌82年のカルロス・ラサリの民音公演にもゲスト出演している。81年5月にはアルゼンチン公演を行い、アルバム「タンゴの異邦人」のレコーディングを行っていてもいる。82年、84年のアストル・ピアソラ・キンテート日本公演にもゲスト出演しているのは周知の通り。

***1985年6月11日 早川真平を偲んで 藤沢嵐子リサイタル**

ラ・クンパルシータ／淡き光に／カミニート／白いスカーフ／パテロ・センチメンタル／ジーラ・ジーラ／ママ、私恋人が欲しいの／悲しいミロンガ／さらば草原よ／ロコへのバラード／チキリン・デ・バチン／水色のワルツ／奥様お手をどうぞ／夜のタンゴ（指揮：志賀清）

（上記はプログラム中の「主なレパートリー」に載っている曲目）

***1985年11月11日 五反田簡易保険ホール 早川真平追悼コンサート**

場末のバンドネオン／いつまでもここに／チェ・バンドネオン／ブエノスアイレスの思い出／イ・



ア・ミ・ケ／カミニート（柚木との二重唱）／ラ・クンパルシータ（柚木、阿保、菅原と）（オルケスタ・ティピカ東京、指揮：志賀清）

***1986年12月1日 よみうりホール '86タンゴ 藤沢嵐子リサイタル**

カンタンド／場末のバンドネオン／レネへの手紙／めぐり逢い／古い時代／あやつり人形（エル・ティテレ）／タタ・ノ・キエレ／パトテロ・センチメンタル／海に向かって／いつまでもここに／カミニート／インプロラシオン／孤独の中で（エン・ミ・ソレダー）／イ・ア・ミ・ケ／ボジェーラ／タンゲアンド・テ・キエロ／君しのお夜／別れの前に（アンテス・デル・アディオス）（志賀清とキンテート・モデルノス／オルケスタ・モデルノス）

***1987年3月28日 第427回三越名人会特別公演 藤沢嵐子 今、タンゴよみがえる**

カンタンド／レネへの手紙／淡き光に／夜のタンゴ／奥様お手をどうぞ／タタ・ノ・キエレ／ジーラ・ジーラ／別れの前に（アンテス・デル・アディオス）／ラ・クンパルシータ／ロコへのバラード（志賀清とキンテート・モデルノス）

***1988年9月1日 虎ノ門ホール CONCIERTO DE TANGO タンゴ・クリスタル**

インプロラシオン／カンタンド／ウン・モメント／恋人もなく／タタ・ノ・キエレ／ロス・マレアドス／ミロンギータ／ロコへのバラード（タンゴ・クリスタル）

***1991年9月6日 虎ノ門ホール タンゴの女王・藤沢嵐子 小松真知子とタンゴ・クリスタルの夕べ**

カンタンド／ミロンギータ／アンテス・デル・アディオス／恋人もなく／レネへの手紙／インプロラシオン／ボジェーラ／古き時代／チキリン・デ・バチン／イ・ア・ミ・ケ／ロコへのバラード（タンゴ・クリスタル）

復活後も順調にコンサート活動を続けていた藤沢だが、その著書「カンタンド」にある通り、1982年には早川真平の肺癌が発見される。長期療養の末、1985年に亡くなり、その年末には追悼コンサートが行われ、その模様はNHKFMでも放送された。その後も年1, 2回の大きなコンサートを行い、1991年9月最後の公演を行った。小松亮太も書いているが、この時の演目のうち「古き時代」は小松亮太のバンドネオン・ソロ伴奏で歌われた。今回の資料を見る限り、カナロの「古き時代」は一度も登場していない曲目である。どんな気持ちで選曲したのか、今となってはわからないが...

藤沢さんは数多くのレコードの他、3冊の本を残している。

- ①藤沢嵐子 「タンゴの異邦人」(中央公論、1956)
- ②藤沢嵐子著、青木誠編 「藤沢嵐子 タンゴの本 プエノスアイレス～東京」(中南米音楽、1981)
- ③藤沢嵐子 「カンタンド タンゴと嵐子と真平と」(六興出版、1987)

いずれの文章でも藤沢さんの実直さとおごりのなさが際立っている。これほどの成功を成し遂げたアーティストが、ここまで冷静に自分を見つめていることに驚かされる。いずれも絶版になって久しいが、読まれたことのない方にはぜひお勧めしたい。いずれの本でも最初の訪垂で伴奏をつとめたビクトル・ブチーノの伴奏が素晴らしかったことが記されているが、筆者は数年前に訪問したアルゼンチンの著作権協会 SADAICで副会長を務めるビクトル・ブチーノ（当時90歳前後）と会うことが出来た。会うなり開口一番「ランコは元気



か？」ときかれたのは嬉しかった。

前述の訪問の際、藤沢さんの自宅から出る時、ふと「早川」という表札が目に入った。当たり前のことなのだが、その時、私が会ったのは藤沢嵐子ではなく、早川嵐子さんだったのだということにふと気がついたのだった。



左より、蟹江、三浦、加年松、藤沢さん、牧野（すいよう会会員）（敬称略）（撮影年不詳）
（写真提供：三浦幸三氏）



昭和59年1月、伊豆長岡石亭にて。
後列左より、京谷夫人、河内、京谷、向日、？、大村、五井、伊勢谷、小松、？、山崎
前列左より、河内夫人、柚木、早川氏、小松真知子さん、嵐子さん、志賀、池田、永野

（写真提供：河内敏昭氏）

思い出す……

叔父「早川真平」と「藤沢嵐子」のこと

山田 建雄(京都市)

早川家は元々竹芸家で、代々世襲により大阪で花活けなどを主にした花籠作りを生業としていた。私の父は4人兄弟の長兄で、第四世尚古齋となって家業を引き継いだ。真平はその末弟だった。したがって、私は真平の甥っ子にあたる。父は弟真平は手先も器用でスジもよいので下弟子にしよう、と最初は考えていたが、音楽に魅せられてその道に走るようになった、という。そのキッカケはその頃隣家に住んでいた歌謡の作曲家(「北浜音頭」や「道頓堀シャンソン」



筆者近影(2010年5月)

などのご当地ものを得意とした)坂東政一さんが住んでおられた関係で、そこに毎日顔をだしているうちにフルートやピアノ、ギターなど、いろいろな楽器を手がけ、いつの間にか密かにダンス・バンドの演奏家としての活動をはじめてしまったという。

あるとき、父が尼崎のダンス・ホールへ行ったら、そこでピアノを弾いているのを発見し、弟の真平に、クラシックならまだしも、ダンス・ホールで軽音楽などを演奏するのは考えるように云うと、素直にハイとの返事があったので安心していましたが、なんと今度は隠れて兵庫県の杭瀬のダンス・ホールで演奏しているのが判明、父は今度は強く芸能生活をやめて家業を手伝うよう論じたところ、弟の真平は“兄さんすみませんが、私はどうしても音楽で身を立てたいのでゆるしてください”と頭を下げ、家を出て上京したという。

実は、私の父も音楽が好きで、若い頃はバイオリンを習ったりし、“我が家の家系にはどうも音楽で家を潰すスジがあるらしい”とつぶやいたことがある。父は有名なバイオリニストの辻久子のお父さんである吉之助さんと一緒に福井さんという先生についてバイオリンを習っていたそうだが、福井先生は知られた女優の山根寿子さんの父親だそうで、ヤッシャ・ハイフェッツとクライスラーにはことのほか惚れ込んでいた、という。

叔父の早川真平がバンドネオンを手にしたのは上京後のことのように、最初は歌の伴奏楽団に加わったり、いろいろと苦勞もされたようだが、私が小学校1年(昭和25年)に上がった頃、「早川真平とオルケスタ・ティピカ東京」を立ち上げ、さらに藤沢嵐子を専属歌手に迎えて一気にその名を博し“昭和のタンゴ・ブーム”の先駆けとなったのは周知のとおりだ。

私のはっきり意識して真平叔父さんに逢うようになったのは小学校5~6年のころで、逢うのは決まって父親に連れられていった関西公演の会場の楽屋だった。京都では弥栄会館、円山公園音楽堂、大阪は産経ホール、毎日ホール、それにフェスティバル・ホールなどで、まぶしい舞台の演奏を袖で



左から：筆者父、妹、母、嵐子さん、筆者、真平氏
(昭和27年1月、清水寺にて)

ったために久々にゆっくりと逢うことができ、一杯やり、食事をしながら話をするのができた。もちろん藤沢嵐子も一緒に会話に加わっていた。場所は毎日ホールの地下にある店で、軽く飲んで、たしかカレーが食べたいと言ってそれを食べ、“すごく辛い！、けど、うまいね”といていたのを記憶している。その後は北新地のクラブへ連れて行ってくれ、兄弟や親族の動向などが主な話題になって飲んだ。叔父の真平は元々無口のほうで、逢うといつもにっこり一言、“元気にしているのね……”といい、“ハイ”と答えるとやさしく頷いてくれる程度だったが、この夜は日本酒のほかに洋酒も飲まれかなりご機嫌で、珍しく演奏活動にも触れ、本当は今年の予定だったが、ちょっとずれて来年早々にアルゼンチンほか、中南米の公演に出発するとの話もされた。嵐子はそれらの話をニコニコして聞きながら、お好きなタバコ（ケント）をおいしそうに呑んでいた。

翌昭和39（1964）年は東京オリンピックの年で、ティピカ東京の一行は予定通り南米公演に旅立ったのを耳にした。9ヶ月にも及ぶ巡演は大成功だったと聞いたが、その後私は転職し、手描染色の仕事に追われ、残念ながら以前のように演奏会には足を運ぶことができなくなった。もっともその頃からタンゴは徐々に下火になり、関西公演も従来に比べ激減してきたこともあって、なんとなくタンゴとは疎遠になっていた。そして後、昭和57（1982）年、大阪産経ホールの公演を久しぶりに聴きに行

聴き、終演後の慌しい楽屋でそそくさと挨拶して帰ってくるのが常だった。演奏の詳細は覚えていないが、胸をときめかせて耳にしたそのときのタンゴの数々が、音楽にはまったく無知だった私に、大きく眼を開かせてくれたことは確かだ。

私を含め、演奏会場でその頃タンゴを聴いた人々が異口同音にしていたのは、バンドネオンの珍しさと、その憂いを含んだ独特の音色の素晴らしさだった。この楽器があるからこそタンゴは他の音楽にない魅力をもち、人をして痺れさすのだと私も思った。それはもちろん叔父の真平が膝に乗せ、愛しむように弾いていたからでもあるのだが……。

楽屋は常に慌しく、開演前は常に打ち合わせやリハーサルに追われ、終演後は関係者や後援会の方々との挨拶や会合などで落ち着いて会話をする余裕はなく、顔は合わせるものの、いつも“元気？”、“あっ、ハイ”といったていどでおしまいだった。

ところが、私が大阪の農産種子輸出入会社に勤めていた昭和38（1963）年の12月だった。大阪労音の1ヶ月の公演があ

く機会があった。楽団は南米公演の経験もあってか、一層の洗練さが加わり、歌手は新進の山崎美枝子もまじえ、嵐子が1971年からの10年のブランクを感じさせない見事な歌を聴かせてくれて感動を呼んだ。振り返ってみると、これが実は私が叔父真平の姿を目の前で見て、演奏を聴いた最後になってしまったのだ。



1982年の大阪公演で

その後間もなく、叔父真平が体調を崩したと耳にした。元々持病があるようには聞いていたものの、たいしたことはないだろうとそのときは思った。だが、実は大変重篤な状況だと後で判った。大阪での公演からおおよそ2年後の昭和59（1984）年12月28日の午前10時29分、肺ガンのために川崎市の日本医科大学の付属病院で亡くなった。享年70才。

その後、嵐子はしばらく活動はしたものの、66才になった平成3（1991）年に惜しまれつつ引退し、新潟の長岡市に移住。その後は芸能界と一切の関係を断って静かな余生を送っていたが、昨年（2013）8月、米寿を迎えた直後の22日、栄光に満ちた88才の生涯を閉じた。

戦災の深い傷跡のまだ癒えぬ昭和24年以降、折からのダンス・ブームや、民放の相次ぐ発足などの好背景はあったにせよ、雄雄しく牽引し、未曾有の“昭和のタンゴ”の全盛期形成に大きく寄与したことは、早川真平と藤沢嵐子の二人にとっては何よりの誇りだったに違いない。今は亡きご両人の功績をたたえると共に、あらためて心からの冥福を祈りたい。

ランコ・フジサワとフジヤマのトビウオ

笠井 正史(武蔵野市)

藤沢嵐子さんが亡くなられた。大分以前にカトリックの洗礼を受けておられたとのことであるから、ここは「帰天」されたと申し上げるべきかも知れない。タンゴ人にとってはおそらく今年最大の悲しいニュースと言うべきであろう。私は読売新聞の紙上でその訃報に接したが、他の新聞雑誌では（ラティーナ誌はともかく）どのくらい報道されたのかは分からない。テレビでもあまり報道された気配がない。なにもワイドショー辺りで大々的に取り上げてほしいというのではないが、あれほどの大歌手の訃報が殆ど報じられていなかったことに何か悲しいというより寂しさを覚えたのは私ばかりではないであろう。

些か齢の分ってしまうような話であるが、藤沢嵐子さんが早川真平氏、刀根研二氏とともに初めてブエノスアイレスに行かれた当時は、日本の戦後がまだ終わりきいていない時期で、國中あちこちに所謂戦争の傷跡が残っていた時代であった。雑音のひどいラジオでブエノスアイレスからの中継を聞き、現地のアナウンサーが「カンタ・ルランコ・フジサワ！」と紹介するのを耳にして感激した人はかなり居られたのではないかと今更ながらに思い出している。

藤沢嵐子さんが訪垂される少し前に水泳の古橋広之進選手と橋爪四郎選手のロスアンゼルスでの活躍が大々的に報道され、敗戦で意気消沈していた日本人に活力を与えたとよく言われた。そのニュースはその後も度々取り上げられ、「フジヤマのトビウオ」が戦後の日本を、というより日本人を元気にしたと語り伝えられてきた。プロレスの力道山やボクシングの白井義男選手も同様に、戦後の日本で、「ガイジン」相手に戦い勝利をおさめたことが大きく報道され、歓声とともにこれまた敗戦で意気消沈していた日本人を勇気づけた人として称賛されたのであった。

そこでタンゴ人として訴えたいのは、その時期に遠いブエノスアイレスで名声を挙げられた藤沢嵐子さんの事績は決して小さな出来事ではないということである。ジェット機時代ではないあの時代に地球の裏側のアルゼンチンまで行き、ペロン大統領の前でタンゴを歌い喝采を浴びられたということは、それこそ日本人もここまで出来るのだという事例を提示されたことに他ならない。今日ではタンゴに限らずあらゆるジャンルの音楽家が海外で華々しく活躍しているが、1950年代の初頭に、まだ「軽音楽」の一つとしてしか取り扱われていなかったタンゴの世界で、それもタンゴの故郷であるブエノスアイレスであのような評価を受けたことそれ自体が大変な出来事であった訳である。

藤沢嵐子さんの活躍が報道されるまで、タンゴは知名度がまだ低く、ジャズ、シャンソンとともに軽音楽とかダンス音楽として一括りにされていた印象がある。それが、今度は一つの独立したジャンルの音楽として一般に認識され、それまでラ・クンパルシータぐらいしか知らなかった日本人に数々

のタンゴの名曲が紹介されるようになったのであった。大体、バンドネオンという楽器さえ、一部の人が知らなかったし、オーケスタ・ティピカと言っても大抵の人は何のことかまず分からなかった時代である。つまり、藤沢嵐子、早川真平、刀根研二氏の訪亜は単なる見聞とか現地視察などというのではなく、日本におけるタンゴの世界にとっては大変な一大事であったのである。

それは日本人が海外に向かって踏み出す足がかりであったと言っても過言ではない筈である。ビジネスの世界では講和発行後海外へ雄飛する人が徐々に始まってきたが、こと音楽の世界では、もっぱら海外の音楽家を招聘して、その演奏を聴く方で、まだまだ外へ打って出る段階ではなかった。外貨制限とか旅費の問題も大いにあったのは勿論であるが、それ以前に日本人の音楽家が海外に出かけたところで所詮結果は知っているといった諦めの境地があったことも否めない。そういった時代にいち早く地球の真裏まで出かけ、タンゴをその本場で聴かせるといった快挙を成し遂げたということは、これこそまさに戦後に日本人を勇気づけたことに他ならず、フジヤマのトビウオの快挙と並び称賛されてもよい筈である。

残念乍らいまだに日本ではスポーツ界のビッグニュースは新聞・雑誌・テレビいずれも大々的に報道されるが、音楽界のニュースはそれに比べて極めて地味である。ましてそれがタンゴの話となると、地味どころか、取り上げられれば好い方で、殆ど無視されているのが現状である。何も一つ一つ取り上げてくれというのではないが、藤沢嵐子さんのように「あの時期、あの遠いブエノスアイレスで」花を咲かせた史実を、訃報に際してもう少し大きく取り上げてもらってもよかったのではないかと寂しさを拭いきれない思いである。今は亡きご本人は多分「そんなことは気にするな」と仰せられているかも知れないが.....



2013年11月19日の東京リンコン・デ・タンゴにおいて藤沢嵐子さんを偲びつつ
同時代に活躍した日本のタンゴ楽団を語る笠井氏（写真撮影：編集部）

藤澤嵐子 追悼記念

藤澤嵐子・早川真平 年表(敬称略)及び写真・資料

藤澤嵐子 追悼記念

作成：編集部 資料提供：山本雅生氏

藤澤嵐子・早川真平 年表(敬称略)及び写真・資料

作成：編集部 資料提供：山本雅生氏

西暦年	事象
1914年	早川真平 大阪市に生まれる。
1925年	藤澤嵐子 東京市に生まれる(7月21日)。
1937年	日中戦争勃発。
1939年	早川真平 「渡辺ハマ子とその楽団」編成。 第2次世界大戦勃発。
1940年	早川真平 召集を受け、中国戦線に従軍。
1941年	太平洋戦争勃発。
1943年	藤澤嵐子 東京音楽学校(現・東京芸術大学)声楽科予科に入学。翌年本科に進むが、父の招きで大学を休学(後に中退)して満州に渡る。
1944年	早川真平 復員。刀根研二が在籍していた東京室内楽団に入団。
1945年	敗戦。第2次世界大戦終結。
1947年	藤澤嵐子 満州から引き揚げ。 早川真平 「オルケスタ・ティピカ東京」結成。
1948年	藤澤嵐子 「原孝太郎と東京六重奏団」に入団。 NHKラジオ放送「バンド・タイム」が始まる。「早川真平とオルケスタ・ティピカ東京」と「原孝太郎と東京六重奏団」が生出演。
	
1949年	藤澤嵐子 後に夫となる早川真平の率いるオルケスタ・ティピカ東京の専属歌手として迎えられる。
1950年	藤澤嵐子 ラジオ初出演
	
1951年	民間放送の開始。 藤澤嵐子 日本ビクターに初録音。

1952年 文化放送「バースデーコンサート」に藤澤嵐子と「早川真平とオルケスタ・ティピカ東京」がレギュラー出演。

ラジオ東京で「藤澤嵐子アワー」が開始。



1953年 テレビ放送開始。

藤澤嵐子、早川真平、刀根研二の三名が初めてアルゼンチンに渡る（出発8月15日、帰国12月8日）。

9月21日、藤澤嵐子 ディセポロ劇場でのペロン大統領が臨席するコンサートで「スール」、「ジーラジーラ」、「ウナ・ラグリマ・トゥージャ」を歌う。

昭和28年、はじめてアルゼンチンへ出発する藤沢(中央)、早川(左)、刀根(右)



ペロン大統領に迎われて。右は刀根研二。
帰国直前の11月17日

1954年 藤澤嵐子、早川真平 二度目のアルゼンチン旅行（出発7月）。

1956年 藤澤嵐子、早川真平 三回目のアルゼンチン旅行（出発9月22日、帰国1957年5月28日）。

1957年 藤澤嵐子 第8回NHK紅白歌合戦に出演、「Adiós Pampa mía」を歌う。

1958年 藤澤嵐子 第9回NHK紅白歌合戦に出演、「Mama, Yo quiero un novio」を歌う。

1959年 藤澤嵐子 第10回NHK紅白歌合戦に出演、「Bésame mucho」を歌う。

1960年 藤澤嵐子 第11回NHK紅白歌合戦に出演、「Yira, Yira」を歌う。



1960年頃の「オルケスタ・ティピカ東京」の労音の高松公演の折
左から 刀根研二、藤澤嵐子、早川真平

1961年 藤澤嵐子 第12回NHK紅白歌合戦に出演、“Adiós Pampa mía”を歌う。

1964年 東京オリンピック。

藤澤嵐子、早川真平及び「オルケスタ・ティピカ東京」のメンバー全員でアルゼンチン、チリ、ペルー、コロンビア、エクアドル、メキシコを演奏旅行（出発2月23日、帰国11月26日）。

メンバー

藤澤嵐子

早川真平

(バンドネオン) 岡本 昭、岩見和雄、関塚大八郎、平野洋輔

(バイオリン) 志賀 清、片山祐三、家野洋一、河内敏昭

(ピアノ) 刀根研二

(ベース) 福島敏夫

(歌) 阿保郁夫、柚木秀子

(マネージャー) 中西義郎



左より 早川真平 メルセデス・シモーネ 柚木秀子 藤澤嵐子 フロリンド・サッゾーネ
エツトル・スタンボニー 中西義郎 1964年 アルゼンチン エル・ムンド放送局にて

- 1965年 「早川真平とオルケスタ・ティピカ東京」による労音全国公演。
1968年 「早川真平とオルケスタ・ティピカ東京」解散
1970年 藤澤嵐子 カソリック教会の洗礼を受ける。
1971年 藤澤嵐子 厚生年金会館にて最後のリサイタル（1月）。
1980年 藤澤嵐子 中野サンプラザホールにて復帰リサイタル（12月）。



- 1981年 藤澤嵐子 3月来日のオラシオ・サルガン楽団の公演に出演、見事なカムバック振りを見せる。

藤澤嵐子、早川真平 17年ぶりにアルゼンチンに渡る。



17年ぶりのアルゼンチン公演（1981年）
ボカ地区のシアター・レストラン（カステロベッキオ）にて。
バンドネオン奏者はワルテル・リオス。



- 1984年 早川真平 肺癌により逝去、享年70歳。
1989年 藤澤嵐子 姫路市で最後の公演を行う（11月11日）
1991年 藤澤嵐子 9月6日虎ノ門ホールでの「タンゴクリスタルの夕べ」にゲスト出演したのを最後に引退、長岡市に隠棲。



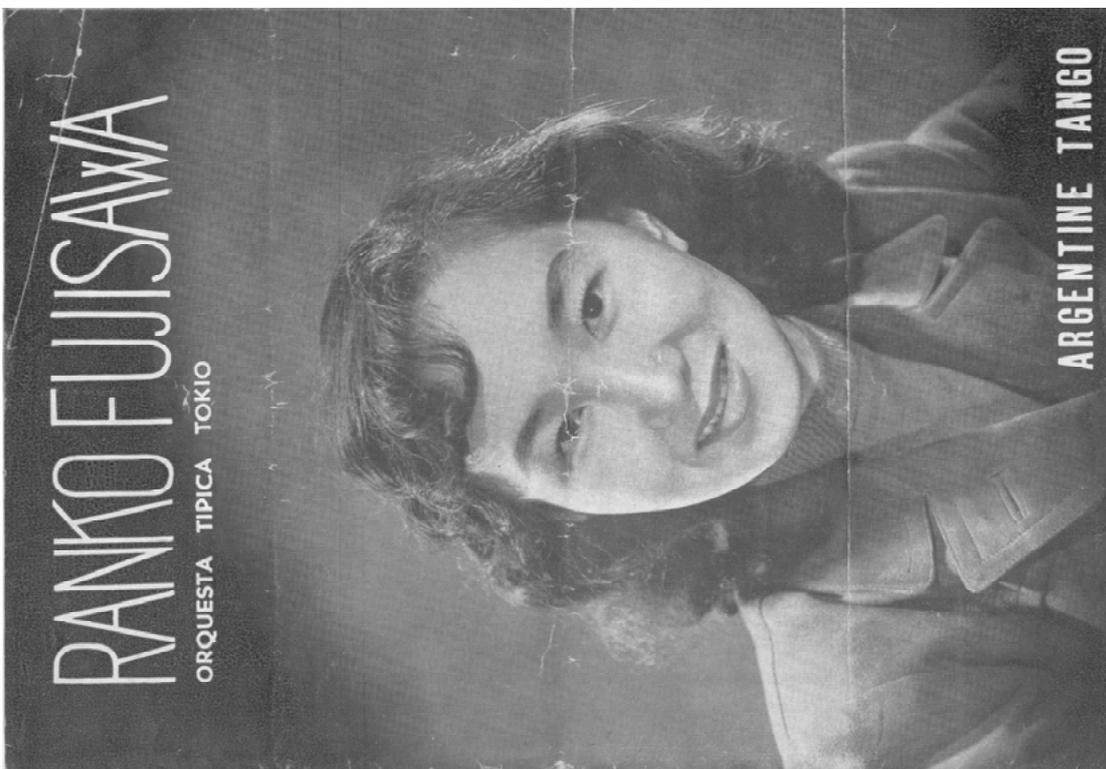
写真出所：朝日新聞
1991年12月16日号

- 2013年 8月22日、老衰により新潟県内の病院で逝去、享年88歳。

参考資料：(1)藤澤嵐子「タンゴの本」、(2)藤澤嵐子「タンゴの異邦人」
(3)藤澤嵐子 - Wikipwdia、(4)早川真平 - Wikipedia



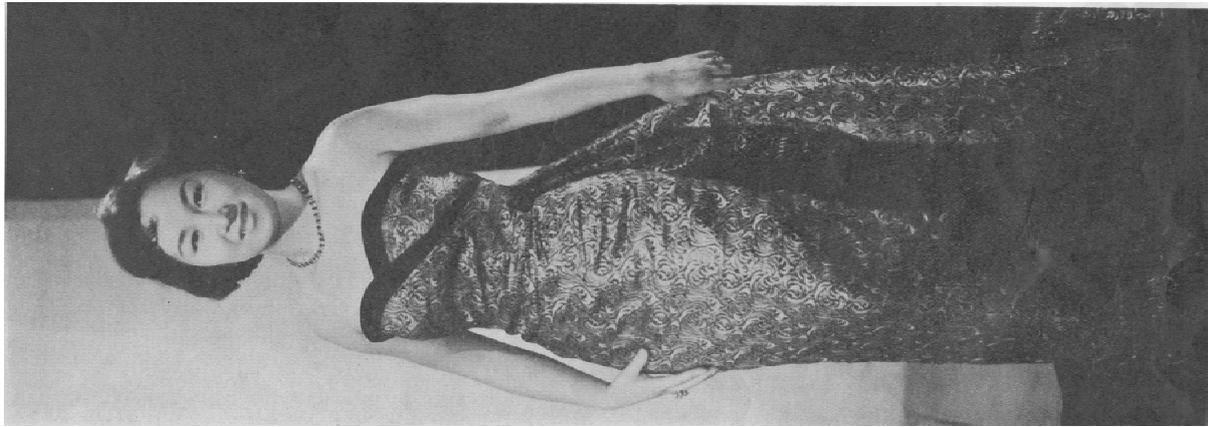
藤澤嵐子サイン入り アルゼンチン シンフォニック タンゴ
コンサート プログラム (1955年 公演会場・日時不明)



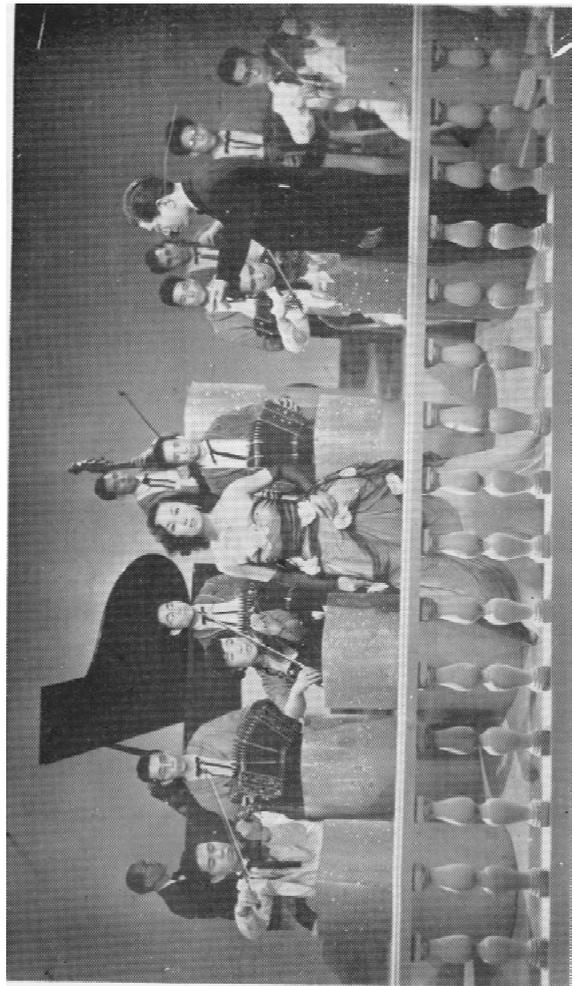
1954年1月15日 神戸商工会議所ホールでの公演プログラム



195年 アルゼンチン シンフォニック タンゴ コンサートのプログラムから



1959年3月14日 神戸国際会館での公演のプログラムから



1955年8月26日 宝塚大劇場での公演のプログラムから



腕をあげた 日本のタンゴ演奏家たち

—東京タンゴ聴きある記—



上村 要 (函館市)

2005年、福岡県古賀市にお住まいの安武利治さんから頂いた「チコス・デ・パンパ」のCDを聞いたとき、“これは一度現在の日本のタンゴ楽団の演奏を聴きたいものだ”と、感じていました。リーダーのバンドネオンが川波幸恵さんと女性、バイオリン、ピアノも女性、コントラバスだけが男性というクワルテット。全曲を聴いたわけではないのですが、リズムが実に良い。

私が持っている日本の演奏家のレコードで、もつとも新しいのは、小沢 泰さんから頂いた「コリエンテス／インスピレーション」の表題をもつ「オルケスタ・ティピカ・コリエンテス、歌：阿保郁夫」の演奏のLPで、この楽団としては2枚目の1980年録音。当時、高橋忠雄先生の書簡に“日本の演奏家も旨くなりました”と、書いておられます。

従って、上記クワルテットの演奏に接したのは25年後、現在からは33年前になります。

さて、2013年10月12日（土）、東京市ヶ谷の、カスケードホールで行われた日本タンゴ・アカデミー主催の「第3回ミロンガパーティー」に参加しました。家内が、函館でアルゼンチン・タンゴのダンスレッスンを受けて居り、私は、ダンスの方は一向に出来ないので、半分は引きずられての事でした。

当日、会場には数十組の参加者が居り、私の様な、演奏を目的の方々も結構居られました。函館のミロンガの場合は、数組程度のパーティーでした。演奏に入る前のBGMの時にも、それに併せてカップルの踊りが始まりました。その数も次第に増えていきました。その踊りを見て驚いたのは、函館の場合と変わりなく、鋭角的なステップは無く、静かな柔らかい感じのおとなしい感じのもので、むしろ一般の社交ダンスの方に、激しさがあるように思いました。もちろん、ダンスデモの“GYU&夏美しい”の場合は別格でしたが。

さて、私の目的であった「平田耕治クワルテット」の登場となりました。一斉に、曲に入りました。数小節過ぎたとき、“これは、いい”と感じました。先ず、バイオリンのスタッカートがとてもいいのです。この奏法は1950年代の日本のオルケスタには無かったものです。かつて、高山正彦先生に“なぜ、日本の楽団は、あのアルゼンチン楽団の、あの鋭角的鋭さをもったスタッカートが出来ないんでしょう、せっかくアルゼンチンまで行ったのに...”とお聞きしました。すると高山先生いわく、“バイオリンの奏法が違うようですねー”と、バイオリンを弾く仕草をしておられました。平田さんのバンドネオンを始め、バイオリン、ピアノ、バホとの一体のリズム感はとても素晴らしく、日本のタンゴ楽団もここまで進歩したかと、うれしくなりました。

演奏の後半に、ギターの内敏昭さんが加わりまして、プログラムにはない最後の曲、「ラ・クムパルシータ」におけるギター・ソロは指でひく奏法で、ピック奏法とは異なる情感あふれるものでした。この曲のなかで、最も気に入ったのは、このごろは、ほとんど聴くことのない、誠に鮮やかなバンドネオン・バリエーションでした。こういう演奏を聴いていると、“タンゴを聴いている！”という感じになります。

このパーティーのなかが、島崎会長に誘われてロビーで飲み物などの接待を頂きましたが、その時会長は“いや～巧くなりましたね～、驚きました、こうなるまでに50年かかりましたね！。これだと、明後日の「東京タンゴ祭」の見当は、大体つきます。それにしても、折角これまで弾ける様にな

ったのに、その半面で特に若い人達のタンゴに対する関心は激減して、日本全体に、かつての藤沢嵐子さん時代のような熱気はなくなりましたネ”と言われました。

翌々日の10月14日の「東京タンゴ祭」も満員の盛況でしたし、演奏の9団体もオルケスタ、コンフロント共に想像していた通りの水準に達して居り、それぞれに個性をもったスタイル、個性的な編曲力ももって居り、アルゼンチンの演奏家と比較しても何ら劣りません。

私が気が付いた2、3の点を。“タンゴ・ワセダ”の40年代を思わせるバンドネオン・ソロ。“ラスト・タンゴ”のアコーデオン、ギター、達者なバイオリン等のキンテートは往年のフェリシアーノ・ブルネリを思わせる編成でのワルツ。“キンテート・プラダ”の、速いテンポでのミロンガ。“オルケスタ・アウロラ”では、とくに「ブエノス・アイレスの夏」におけるバンドネオンでじっくり歌い上げるソロ。京谷さんは、全曲自作で、私は「コウジシモ作品集」と呼びたい。

歌については、大体戦後の傾向を踏襲していますが、30年代の歌手をもう一度聴き直しては如何だろう。戦後の歌手の傾向はステージ向き・ショー向きになり、タンゴの作品も、それにふさわしい曲が作られました。時代の趨勢とは言え、これも止むを得ない面もあります。

この二日間の演奏を通じて、これだけ巧くなった演奏にも拘わらず。なお不満が残るのは何故でしょう。

それは、演奏家が個性を追求するあまり、タンゴ原曲のもつ感動性、センチメンタル性を直視せず、編曲に重点が置かれる傾向を感じられるからでしょう。

昔、「高山派」と称するタンゴ・ファン・グループがありました。エドアルド・アローラスを頂点とする古典派タンゴ支持グループです。

今、タンゴに限らず、ポピュラー界は、その原点を見失って居ります。クラシック界にも40～50年代にモダン派の波が強力に押し寄せます。しかし、クラシック界は、原点を見失いませんでした。現在も健全です。

E. アローラスは、パリで客死してしまいましたが、多くの彼の作品の中で知られているのは、ホンの数曲でしょう。いわゆる「グアルディア・ビエハ」と呼ばれるタンゴの古典曲を、当時は十分な演奏が出来ませんでした。今の日本の素晴らしい演奏力で、原曲を取り出し、原曲を尊重した編曲を考え、原曲にふさわしいオブリガードを編み出し、提供して欲しいものです。これは、日本だけではありません、アルゼンチンの演奏家にも求めたいのです。

更に欲を言えば、スターの誕生です。かつての、バイオリンのエンリケ・カメラーノ、エンリケ・フランチャーニ、そして全盛期のホアン・ダリエソにおけるカジエタノ・プグリシ。バンドネオンでは、アニバル・トロイロの「パテティコ」時代のフィーリングを。そしてカルロス・ガルデルを目標とした歌手の出現でしょう。

以上、東京での二つのコンサートを見聞した私の勝手な感想です。

以上



東京タンゴ祭2013での小松真知子とタンゴ・クリスタル

(写真提供：(株)ラティーナ)

コンサート評

Tango Concert

~Estrellita Tokuko Takahashi~ を聴く

齋藤 富士郎

いや、驚いた！これが88歳の女性の歌声だろうか。藤澤嵐子さんは先年同じ88歳で老衰で亡くなったというのに、こちらは老衰どころか「七十～八十は涙垂れ小僧」と言わんばかりの勢いであった。

時は2013年10月25日、所は東京・銀座「ヤマハ銀座スタジオ」、開かれたのは当会会員でベテランタンゴ歌手の高橋トク子のコンサートである。白状すると私は招待券をいただいての出席であり、内心、「大丈夫なのか？」と思っていた。しかしそのような懸念は実際に歌声を聴いて完全に払拭された。脱帽。

当日の出演者は

歌：高橋トク子

ギター：飯泉昌宏

ダンス：宮本政樹&寺本千栄子（当会会員）

楽団：Sexteto Rosa（メンバー：高谷照信（dir. y bn）、山川知子（bn）
専光秀紀（v）、岩楯麻里（v）、大隈 慧（cb）、熊澤洋子（p）

の面々である。

演奏曲目は一々紹介しないが、すべてポピュラーなものばかりである。

高橋トク子の歌はさすがに年齢の所為もあって高音は出難そうであったが、これは仕方がない。驚いたのは大きく口を開いて歌う彼女の発声と発音の見事さであった。我々も小中学校で音楽の時間に、大きく口をあけて、はっきり発音して歌うように指導されたが、中々そうは行かない。それで思ったのは「この人はクラシックの声楽をしっかりと勉強した人だ」ということである。彼女はタンゴを歌い始める前はオペラ歌手を目指したというから、実際にそうなのだろう。日本語はそう大きく口を開けないでも聞き取れる言語なので、プロの演歌歌手でもあまり口を開けないで歌う人は結構居る。しかしヨーロッパ言語では大きく口をあけて歌わないと何を言っているのか聞き取れないのである。私は勿論スペイン語は解しないが、それでも彼女が発声する単語ははっきり聞き取れた。正直言ってこのように歌える人はそう多くはない。（藤澤嵐子さんも音楽学校で声楽を学んでいる。）

Sexteto Rosaは名前も聴くのも初めてであったが、腕利きのメンバーによる聞き応えある演奏を披露してくれた。超ベテラン・バンドネオン奏者の高谷照信は、私が未だ20代であった昭和33～34年頃、小沢 泰とオルケスタ・ティピカ・コリエンテスのメンバーであった。彼は現在85歳とのことであ

*Sexteto Rosa**Guitar*

飯泉昌宏



るが、当時は紅顔の美青年であった。こういうことがあった。ある日のヤマハ・タンゴ・コンサートでたまたま高谷氏の位置がステージに向かって右端の引幕に近いところにあった。そうしたら「高谷さんが幕に隠れてよく見えないから、前に出て欲しい」というクレームが届いたそうである。それで司会の高山正彦氏が「今日の会場の女性観客は高谷君を目当てに来ているらしい」と冷やかす半分にコメントされていたことを記憶している。

女性バンドネオン奏者の山川知子は始めて聞く名前であったが、バンドネオンの腕前は中々のものであった。彼女は慶應義塾大学の出身ということで、昨年11月に開催された第1回アルゼンチンタンゴ早慶戦においてもKBR Tango ensembleのジュニアバンドのメンバーとして出演していた。

専光秀紀はオルケスタYOKOHAMAの主要メンバーであると共に、独立のグループでも活躍する新進気鋭のバイオリン奏者で達者な腕前を聴かせてくれた。同じくバイオリンの岩楯麻里についてはオルケスタ・シン・ノンブレのメンバーでもあること以外には知らないが、腕前は専光氏と双壁であると見た。

コントラバスの大熊 慧とピアノの熊澤洋子（高谷氏のご令嬢とのこと）もしっかりした演奏振りでSexteto Rosaの演奏全体を支えていた。

ギターの飯泉昌宏はソロと高橋トク子の伴奏がメインで、Sexteto Rosaに加わった演奏ではやや音が聴き取り難かった。これは編曲の問題でもあろう。

宮本政樹&寺本千栄子ペアのダンスは決してヴィルトゥオーソ的ではなかったが、それがかえって良かった。タンゴダンス選手権チャンピオンたちが踊るようなダンスばかりでは見ていて正直疲れるのである。

褒めてばかりいると「何だ、ヨイショのレポートか」と言われそうなので、すこしばかり苦言も呈する。

高橋トク子教室のメンバーで高齢者女性集団のT.M.A. Sistersによる歌（「小さな喫茶店」）はアマチュアとしては中々のものではあるが、身銭を切ってチケットを購入した人々にわざわざ聴かせることはないと思う。聴かせたければ休憩時間に出るのが良いだろう。

それと司会の高橋いずみ（姪御さんとのこと）のど派手な衣装と大仰な物言いも気になった。司会はずっと地味にやるものである

会場は定員96名とこじんまりしたもので、これならPA（拡声装置）無しのアコースティックでもよかったのではないか思ったが、天井が高かったのでやはりPAは必要なのだろう。

ネリー・オマールは齢95歳にしてあの広いルナ・パークを満員にした。高橋トク子さんも是非「日本のネリー・オマール」を目指して欲しい。

Tango Concert

Estrellita Tokuko Takahashi



屋下がりひととき 魅惑のタンゴをあなたに

2013年10月25日（金）

ヤマハ銀座スタジオ

開場 13 : 30

開演 14 : 00

コンサート評

第一回アルゼンチンタンゴ早慶戦を聴いて

杉山 滋一

第一回アルゼンチンタンゴ早慶戦が2013年11月 1日午後6時から、東京・千代田区一番町の「いきいきプラザ一番町カスケードホール」で開催された。

昨今のタンゴダンスブームのなか、それぞれの青春を謳いあげ、タンゴバンドの存在と再興を目指して、慶應大学OBによるKBRタンゴアンサンブルと早稲田大学現役学生タンゴバンドとの合同演奏会を開催してその魅力を知ってもらうという意義ある催しである。

都の西北・早稲田大学、陸の王者・慶應義塾大学、ともに私学の雄として学問の世界で互いに研鑽を積み、政治・経済・社会・文化の面で数多くの人材を世に送り出してきた。野球をはじめラグビーやレガッタなどでも覇を競って、早慶両校ファンの血を沸かすことは今でも変わることなく続いている。そうしたなかで50数年ぶりにタンゴバンドによる共演が企画されることになった。暗く長かった戦時を過ごした後の開放的な雰囲気謳歌するかのよう、早慶両校に学生バンドが誕生した。慶應義塾の三色旗（Keio Blue Red Blue）の頭文字をとってKBRタンゴアンサンブルが1947年に、やや遅れて1951年には早大タンゴバンドがそれぞれ発足した。早大は翌年に「オルケスタ・デ・タンゴ・ワセダ」と名を替えて今日に至っている。

1950年代中頃にはラジオやテレビで大学対抗バンド合戦が華やかにとり行われ、われわれタンゴファンは夢中になって聴いたものだった。時代が下るにつれてロックをはじめとした音楽の世界の多様化によってタンゴも下降線をたどる。いくつもあった学生タンゴバンドも姿を消し、今では現役学生によるタンゴバンドは唯一オルケスタ・デ・タンゴ・ワセダだけになってしまっている。

早慶対抗バンド合戦（早慶戦）といっても点数を競うわけではなく、純粹に互いにタンゴ演奏を楽しむといった趣旨で全体は四部構成になっている。先陣はKBRタンゴアンサンブルのシニアバンドの登場である。上は70歳台の奏者を含む七人編成で、楽団テーマナンバーとして使われてきた



“Charito”の軽やかな響きで幕開けをする。オールド慶應ボーイにとって懐かしさが一気にこみ上がって来たことが客席からの拍手とともによく分かる。ダリエンソナンバーの“Loca”に続いて歌手が登場して“Caminito”が歌われた。司会者の紹介によると、BsAsで現地プロについて歌の勉強をされたこともあるとかで、のど自慢大会なら鐘三つの合格がもらえるほどの歌いぶりである。4曲目“Lágrimas y sonrisas”、5曲目“Felicia”と続き、最後に“La cumparsita”が歌われてシニアバンド全6曲の演奏が終了した。客席からは大きな拍手と掛け声が飛んでいた。

続いてオルケスタ・デ・タンゴ・ワセダからの選抜メンバーによる小編成4重奏団の登場で第二部がはじまった。現役学生の今日的感覚で選曲がされていて、1曲目“Lunfardo”、2曲目“Milonga del Ángel”を演奏した。どちらもA.ピアソラの作品であるあたりがその気持ちの表れであろう。ヴァイオリンを弾く女子学生のセンスがなかなか良いように思われる。今後の成長が期待できそうであると感じさせるものがあった。メンバーの一部が入れ替わって3曲目には視点を変えて欧州タンゴの“奥様、御手をどうぞ”が演奏されたが、バンドネオン担当の女子学生は驚くなかれ今年7月入部ということであった。キーポジションを確かめながら一生懸命に弾いている様子は微笑ましさを禁じえず、思わず知らず頑張るという気持で聴く側にも力が入ってしまう。人数を6人に拡大して（六重奏団）最後の4曲目に“Maypa”が演奏された。R.アルバレスの作品だけにバンドネオンを2台にしたその効果が上がるしっかりとしたパフォーマンスであった。



前半約1時間の演奏が終わったところで休憩になり、和やかな雰囲気の中かで旧交を温める人の輪がここそこに出来ていた。都内はもとより遠くは北海道や関西地方から足を運んできたOBの方もいるということを知った。それぞれがタンゴで青春を重ねてきたわけだけに、50数年の歳月の流れをしみじみと思い返しているのではないだろうか。

休憩後の第3部にはフルメンバーのオルケスタ・デ・タンゴ・ワセダの登場である。Bn 3、Vi 4、P、Cb、という9人編成による“A Evaristo Carriego”で始まった。2曲目は“El once”といずれも耳馴染みのプグリエーセ、ディ・サルリのスタイルで聴かせる。3曲目はミロンガを入れてプログラム構成に変化をつける。J. プラサの作品“Morena”がリズムよく演奏された。そして同じくプラサ作品“Melancólico”が4曲目に取り上げられた。この曲の編曲はプラサ自身のものであるため、オルケスタであればこそそのハーモニーの美しさを上手に出しているA.トロイロのスタイルをテキストにした演奏であった。普通のコンサートでは取り上げる機会のあまり多くない“Abran cancha”が5曲目に、6曲目には現在アルゼンチンタンゴの世界で長老の一人であるL. フェデリコとピアノ奏者N.レデスマ共作の“Sueño de tango”が演奏された。フェデリコの作品だけに手の込んだ音つくりのアレンジだが、精一杯各パートが頑張っていた。特に長いピアノソロやヴァイオリンのアンサンブルなどに楽団員の精進の跡がみとめられた。7曲目、8曲目は古典の名曲が続く。“Comme il faut”と“La viruta”の2曲でC. ディサルリとA. ゴビのアレンジが使われている。“La viruta”ではゴビの特徴を上手につかんで演奏していた。会場の拍手に応じて“Por una cabeza”がアンコール曲として演奏さ

れた。12月24日には四谷で例年の年の締めくくりのコンサートも開催されるとのことなので、さらに腕に磨きをかけて立派なパフォーマンスを示して「タンゴ・ワセダ」ここにありと思わせて欲しいものだ。



第4部にはKBRタンゴアンサンブル・ジュニアバンドの登壇である。第一部のシニアバンドと対比してのジュニアで（つまりはひと廻り下の年代層ということか？）Bn 2、Vi 2、P、Cb、という標準形式のオーケストラである。1曲目“Sentimiento gaucho”がF.カナロ楽団のスタイルで演奏されたが、なかなか息の合ったプレーを示していた。2曲目には第1部にも歌声を披露した歌手が登場して、プグリエーセ/モランを模した“La última copa”の熱唱に会場から大きな拍手が送られた。H.バレエラのレコードで御馴染の“Repetido”が3曲目に演奏された。リズムカルなこの曲を精一杯の熱演が披露されたが、バンドネオンのスタッカートにヴァイオリンセクションが付いていけないところが散見された。きっちりとアンサンブルが整っていることがこの曲の味わいである。その面でお一層の精度を高められればもっと良くなると思うので、あえて辛口の感想をしてしまった。4曲目にはJ.プラサの作品“Danzarín”がA.トロイロの型で演奏された。ここでも同じことが言えるが、ヴァイオリンセクションがもっと張りのある音を作って欲しいと感じた。ピアノはベリンジェリもどきに頑張っている弾いていたので、なおさらその感がしてならなかった。重層的なハーモニーの中核と成るべき弦が2人では難しいかもしれない。曲選びとアレンジと楽団員数とのバランスを考えると、他の曲があったのでなかろうかというのが率直な思いである。5曲目は再び歌に戻って“Nostalgias”が歌われた。伴奏もしっかりサポートしていて、情感を込めた熱唱はなかなかの歌いっぷりで客席から



大きな拍手が上がる。ジュニアバンド最後の6曲目はA.ピアソラ1951年作の“Prepárense”である。タンゴの改革を目指し始めた時期のものだけにタンゴの基本となるべきリズム（それもどっしりとした低音部の重厚な響きではあるが決して鈍重ではない）と主題を彩るメロディーとの対比が新しい時代のこの曲を6人でどれだけ表現しきれるか興味を持って聴いた。感じたのはピアノとコントラバスの協調によるベースラインがしっかりしていた。それと2ndバンドネオンの女性奏者の左手のフレージングの弾き方は立派なものであった。曲全体の仕上がりもヴァイオリンセクションに多少注文が付くけれどもまずまず良好といえるだろう。ジュニアバンド全6曲の中での位置付けではこの演奏がベストパフォーマンスではないかと思った。客席からのアンコールの声と拍手に“Hasta siempre amor”が歌を添えて演奏され第4部が終了した。

最後に早慶全員総出演合同演奏が披露された。下は19歳から上は75歳まで老若を超越した幅広い年代が同じステージの上に立つという壮観な演奏が行われた。曲は終りを飾るにふさわしい“La cumparsita”をE.ロドリゲス楽団を模したスタイルで演奏された。総員16名（Bn 7、Vi 7、P、Cb、）のグランオルケスタで、アンサンブルは堂を満たして鳴り響き、いわばこれこそが早慶両校のエール交換といえるだろう。そして老いたる者には青春を再び呼び起こし取り戻したことであろうし、若者には行きて帰らざる日々の有り様がどうであったかを知る良い機会となったことだろう。想像するに、合同演奏のリハーサルに於いてお互いにタンゴに掛ける情熱や、今でもそれを持ち続けているシニアの方々と若い学生たちの交流で素晴らしい時を過ごすことが出来たのではないだろうか。それこそが次の世代の若者たちにタンゴをつなげて行くことになるであろう。まさに温故知新であるはずだ。



会場の定員が200人程度のためチケットはすぐに完売で、入場できなかったOB、OGの方々が多数いらしたと事後になって聞いたが、これを機会にアルゼンチンタンゴ復活をかけて第二回、第三回とさらに続けて開かれることを期待したいものである。

あっという間の2時間の早慶戦であった。それぞれの方々が何を語り、何を思いだしたのであろうか、三々五々肩を並べて帰宅する後姿が宵闇に静かに消えていった。

2013.11.28. 記
(写真撮影：吉澤義郎)

2013年下期首都圏タンゴ・コンサート情報

作成：脇田 富水彦

.....
(対象は首都圏の定義とおり一都六県+山梨県、コンサート会場以外は50名以上入るライブハウス等に絞りました。)
.....

エンリケ・クッティニーニ TANGO EMOTION

エンリケ・クッティニーニ (pf)、ハビエル・サンチェス (bn)、マルティン・セバステイアン (vl)、ニコラス・ライノーネ (cb)、マリオ・ファリアス (vo)、グロリア米山 (vo)、マリエラ・セレスエラ&エルナン・セレスエラ (ダンス)、ルハン・ヒメネス&フランシスコ・セバステイアン・フェルナンデス (ダンス)

11月17日 ケネディハウス銀座、11月30日 杉並公会堂大ホール他

● オルケスタYOKOHAMA

齋藤一臣 (vl)、専光秀紀 (vl)、石川麻衣子 (vl)、岡安恵子 (viola)、平田耕治 (bn)、池田達則 (bn)、小川真人 (bn)、古野奈巳 (bn,fl)、飯泉昌宏 (gt)、齋藤直樹 (cb)、齋藤晶 (pf)、荒木洋一・Mayumi (ダンス)、佐藤利幸・中山満紀子 (ダンス)、ジョルジュ高橋・リタ (ダンス)、グロリア米山 (vo)、南川紘子 (vo)、叶千穂 (vo)、藤田翔 (vo)

11月10日 横浜市開港記念会館

6月23日 山元小学校コミュニティハウス

● カンバタンゴ

平田耕治 (bn)、アリエル・ロペス・サルディーバル (gt)、ルーカス・ステリン・ペンセル (gt)、木田浩卓 (cb)、エヴァ・フィオーリ (vo)

9月22日 藤沢市民会館小ホール 9月23日 横浜みなとみらい大ホール他

● 京谷弘司 クアルテートタンゴ

京谷弘司 (bn)、淡路七穂子 (pf)、吉田篤 (vl)、田辺和弘 (cb)、青木FUKI (vo)、ギジェルモ&ヨシコ (ダンス)

8月27日 六本木・STB139、11月28 三越劇場

● 東京バンドネオン倶楽部

小松亮太 (bn) 他

9月16日 小金井市民交流センター大ホール

● 小松亮太

11月9日 Bunkamuraオーチャードホール他

● **西塔祐三とオルケスタ・ティピカ・パンパ 秋のコンサート**

オルケスタ・ティピカ・パンパ

西塔祐三、中西伸一、北村聡、早川純、鈴木崇朗 (bn)、江藤有希、瀬尾鮎子、吉田篤、柴田奈穂 (vl)、
宮沢由美 (pf)、田辺和弘 (cb)、あみ、KaZZma (vo)

チコス・デ・パンパ

北村聡 (bn)、吉田篤 (vl)、宮沢由美 (pf)、佐藤洋嗣 (cb)、金子なつみ (vo)

エストレジャス・デ・パンパ

中西伸一、鈴木崇朗 (bn)、瀬尾鮎子、吉田篤 (vl)、深町優衣 (pf)、小栗亮太 (cb)、兵頭カンナ (vo)

10月24日 錦糸町・すみだトリフォニーホール

● **Sayaca**

SAYACA (vo)、青木菜穂子 (pf)、北村聡 (bn) 鬼怒無月 (gt)、西嶋徹 (cb)

10月31日 銀座シグナス

● **高橋トク子 リサイタル**

Estrellita 高橋トク子 (vo)、飯泉昌宏 (gt)、宮本政樹&寺本千栄子 (ダンス)、

6to Rosa 高谷照信、山川知子 (bn)、専光秀紀、岩楯麻里 (vl)、大熊慧 (cb)、熊澤洋子 (pf)

10月25日 ヤマハ銀座スタジオ

● **チコス・デ・パンパ**

9月12日 目黒・ブルースアレイジャパン

● **東京タンゴ祭2013 10月14日**

西塔祐三とオルケスタ・ティピカ・パンパ、京谷弘司クアルテート・タンゴ、小松真知子&タンゴ・
クリスタル、キンテート・プラタ、オルケスタ・アウロラ、LAST TANGO、ロス・ポジートス、
オルケスタ・デ・タンゴ・ワセダ、慶應義塾大学KBRタンゴアンサンブル

● **パブロ・シーグレル (pf)**

7月12日 13日 ブルーノート東京

● **平田耕治**

平田耕治 (bn)、加畑嶺 (pf)、那須亜紀子 (vl)、木田浩卓 (cb) ,

カロリーナ&エンリケ (ダンス)

11月17日 洗足大学シルバーマウンテン 12月1日 横浜・フィリアホール他

10月14日 有楽町・よみうりホール

● **古橋ユキ・タンゴ・アンサンブル**

古橋ユキ (vl)、吉田水子 (cb)、鈴木真紀子 (fl)、深町優衣 (pf)、鈴木崇朗 (bn)、酒井桃子 (vc)、
佐々木梨花 (vl/vla)、エンリケ・モラレス&ヘマ・モラレス・エスピノサ (ダンス)

8月20日 六本木・STB139

● **古橋ユキ四重奏団**

古橋ユキ (vl)、鈴木真紀子 (fl)、深町優衣 (pf)、鈴木崇朗 (bn)

11月8日 恵比寿・アート・カフェ・フレンズ

● ユリ・アスセナ&ス・グルーポタンゴ

ユリ・アスセナ (vo)、早川純 (bn)、吉田篤 (vl)、須藤信一郎 (pf)、田辺和弘 (cb)
7月18日 上野・Qui

● ルナ トリステ

会田桃子 (vl)、佐藤芳明 (ac)、田中信正 (pf)、鳥越啓介 (cb)、ゲスト:ベロニカ・シルバ (vo)、
小松亮太 (bn)、友情出演:ジョン・健・ヌッツォ (vo)
8月31日 六本木・STB139

(コンサート情報は故石川浩司氏のご健在の時には毎号掲載していましたが、氏のご逝去により中断となってしまいました。今回それを再開することを試みました。もとよりすべてを網羅している訳ではないことをご了承ください(編集部))



Tangolandia 誌で “Chiqué” の会員アンケートを募集中です

Tangolandia 誌において 2006 年秋号から 2008 年秋号まで 5 回に亘って掲載された第 1 回会員アンケート “La cumparsita” に続いて第 2 回の “Chiqué” (3 曲選) を募集中です。皆さま奮ってご応募下さい。

(I) 応募の方法

- ①メール：下記の専用アドレスをご使用ください。Tangolandia-chique@hotmail.co.jp
- ②郵送：Tangolandia 誌裏表紙記載の住所に大澤 寛宛でお送り下さい。封筒に“アンケート”と明示して下さい。なお FAX での受け付けはいたしませんのでご注意ください。

(II) 記入の仕方

- ①お名前およびお住まいの都市名
- ②まず好きな順に演奏者・楽団名をお書き下さい。カタカナでもローマ字でも結構です
 1. 演奏者(楽団)名 出典(録音時期など判る範囲で結構です)
 2. 同上
 3. 同上
- ③3 曲それぞれにまつわる思い出・エピソードなどを 1 曲について文字数 300 字見当でお願いします。あくまで目安です。
ご参考までに Tangolandia は 9 ポイント横書きで 1 行 40 文字です。

(III) 日付

メールの場合も郵送の場合も必ず発信・発送日をご記入下さい。
掲載は原則としてこの日付の順とします。初回掲載は 2014 年春号を予定します。

(編集部)



原稿募集

タンゴに関する随想・研究・資料・書評・コンサート評など、会員からの寄稿をお待ちしております。ご執筆の内容によって「タンゲアンド・エン・ハポン」または「タンゴランディア」のどちらかに掲載いたします。「タンゲアンド・エン・ハポン」の次号の締め切りは5月末日、「タンゴランディア」は3月末日となります。なお、原稿（図・画像を含む）は可能な限り電子化して電子メールの添付ファイルまたは外部メモリーの形で送ってください。やむを得ず手書き原稿になる場合は、編集部で電子化する作業が必要ですので、早めに送っていただくことをお願いします。また、原稿の内容によっては掲載できないことがあることをご承知置き下さい。

本誌に掲載の見解その他は、あくまでも執筆者個人のものであり、必ずしも日本タンゴ・アカデミーを代表するものではありません。なお人名のカナ表記については執筆者の表記のままを原則としますが、Juanを「ファン」と表記されたものについては、表記の流儀の問題ではないと考え、編集部の方で「ファン」と改訂いたします。

編集後記

タンゲアンド・エン・ハポン第33号をお届けします。今号は昨年8月に逝去された藤澤嵐子さんの特集号となりました。多くの方々から多数の原稿が寄せられております。いずれも中々の力作です。藤澤さんの生前を偲びつつお読みください。

(齋藤 富士郎)

日本タンゴ・アカデミー主機関誌 **TANGUEANDO EN JAPÓN**

第33号 2014年1月発行 (非売品)

発行：日本タンゴ・アカデミー

〒156-0044 東京都世田谷区赤堤 2-32-14-104

飯塚 久夫方

TEL/FAX 03-3324-1989 iizuka@kve.biglobe.ne.jp

編集部：齋藤 富士郎 (編集長)

〒195-0072 東京都町田市金井 6-17-2

TEL/FAX 042-736-7445 f-saito@mjq.biglobe.ne.jp

島崎 長次郎、大澤 寛、弓田 綾子、佐藤 進、西川 薫

דה